

の諸作、脚本には櫻痴の『豊島嵐』、松葉の『昇旭朝鮮太平記』等、新體詩には外山正一の『我海軍』、旅順口のヒーロー可兒大尉、殘花の『靈應高千穂』を始め、佐々木信綱、湖處子半月等の諸作、數へ來れば枚舉に暇あらず。然れども是等の文學は果して戦時の文學として誇るに足る者なりしか。あらず。當時の戦争文學は悉く一場の際、物に過ぎざりき。國民戦争熱の昂上する所、鬱結して詩歌小説となる者なれば、描寫諷詠する所、天真流露、往々至情の聲をなす。然れども戦争文學は固く其性質に於て優秀なる文學たり難き要素を具ふ。戦争文學は歳時と方處とに狹隘なる制限を有する特殊差別の文學にして、彼の古今東西に通して誤らず悖らざる平等普遍の大文學に非ず。國民一時の好尚に投するのみにて、長く其價值を保つ事難し。況んや二十七八年の戦争文學の如き、強て時好に迎合せんとする膚淺没趣味の者むしろ多きを占めたるをや。評壇之に命するに際物の名を以てしたるは極めて恰當の稱呼なりき。

然れども斯くの如き大戦争の思想界に及ぼす影響を考察すれば、國民の精神的活動の一時に雲蒸し來るに伴ひ、文學界の新旗幟亦動かんとするを看取すべし。

即ち思想界を通して文學界に及ぼせる戦争の間接影響は、其の直接影響の悲觀的なるに反し甚樂觀的なり。戦後文壇の現象は、嘗て特殊文學の繁榮のみに非ずして、普く諸般の文學の興隆なり。思ふに二十七年の沈衰は落滅に近き其れに非ずして、將に大に起らんとする前の其れなりき。戦捷の報連りに至るや、膨脹的國民世界の日本、東洋の經綸、清韓の輔導等の言辭は天啓の如く國民の胸裡に閃き、二十年この方蓄積し來りし潜勢一時に勃發して、或は大博覽會に於ける繪畫界の活動となり、繪畫協會を組織せる新進畫家の出現となり、白馬會を開ける洋畫新派の運動となり、或は彫刻鑄金の術、陶磁染織の技の進歩となり、或は洋樂の振興演奏會の成功となり、更に進んで文學の興隆となりぬ。小説は一轉進をなし、新體詩戲曲は全く面目を新にし、俳句と和歌とは維新以來の舊風を打破して明治の新風を起し、紅紫燦爛無前の盛觀を呈したりき。以下次を追うて其詳細を述べん。

第二節 俳句の革新

新文學思潮の革新運動は今や本邦文壇の最短詩に及びぬ。新思潮の赴く所、あ

らゆる、舊文學を革新せずんば止まず。既に小説を一新し、新體詩を起し、戯曲の面目を改め、今や進んで舊俳諧と舊和歌とを打破せんと試み初めぬ。就中俳壇の運動特に目覺しく、一時文學界を聳動したりき。

然れども斯界の革新は洵に後れたり。小説新體詩等は十年以前既に革新の緒に就きしに係らず、俳諧に在りては今日始めて其の氣運に向へるなり。其の根本に於て相一致する二者の運動が、其發現の年代を異にする事十年に及べるは何の故ぞや。之を解かんには、革新の原動力たる新文學思潮其の物の性質と俳諧其物の特性とを檢せざるへからず。

思ふに新思潮の根本は明に泰西の文學思潮、否寧ろ泰西文學其の物に在り。革新の運動に與りて詩人文士は一として泰西の文學を味はさるなく、其の創作せる文學は一として泰西文學玩味の餘に出てさるなし。故に本邦文學の中、先づ革新の鋭鋒にかけられたる者は、模範の泰西に存する者、即ち我邦と泰西とに共存する種類なりき。逍遙四迷か小説に目を注げる、演劇改良の主張者が脚本に手を下せる、外山、山等が新體詩を起して從來の和歌に代へんとしたる、何れか泰西の粉本

に其の革新思想の萌芽を養はれしに非ざる。是を以て俳句の如き、泰西諸國に其の類例を見るへからざる一種の短詩は、範を取るへき者固より存せず、西洋審美學の尺度も之に適用すへき方法を解せられさりしが、は革新家の勢力範圍外として長く取り殘され或は短小取るに足らずとして一概に斥けられたり。

而已ならず、俳句其物の性質にも亦彼等革新家の手を下すへからざる者あり。蓋し俳句は世界に於ける最小の詩形にして、其の含める意義と其の現す趣味とは全く特異の者なり。勿論用語は平易なり。吟咏の對象は卑近なり。平民文學の名洵に空しからずと雖、滔々たる非文學的駄俳句を業て、眞に文學の稱を價すへき佳作を取れば、十七音の小篇よく深大の意義を湛へて、間々寸鉄人の詩想を穿つ者あり。且其の着想に於て、詩材の配合に於て、詩想表示の方法に於て、はた語格修辭に於て、他の諸種文學に決して見るべからざる一種の特徴あり。殊に其の全體に磅礴する趣味は俳句獨得の者にして門外漢の易く窺ふべきに非ず。蕉門の寂。柔の如きは其の一例たるべく、此の傾向一步を進むれば一種宗教的色彩を帯び俳道に遊ぶ者は此の趣味の門に入るによりて一種解脱の境に至るを得べし。此

の點に於ては泰西の如何なる文學も之に比ふべき者あらず。又泰西の如何なる詩人評家も之か詩想と趣味とを正當に解する事難し。故に輒近本邦の短詩を味うて之を譯出する泰西詩文の士少からずと雖、手を俳句に下せる者に至りては失敗せざる者稀なり。或は句を解して意を誤り、或は意を解して趣を失ふ。思ふに俳句の趣味は恰も禪宗の如く、又文人畫の如く、純東洋的にして、西洋美學の則を以て律すへからざる一種の東洋詩美なり。嘗に西人のみならず、本邦文藝の士と雖或は鑑識を謬り或は謎語として之を斥く。されば明治二十年頃の革新家が遂に指を此の方面に染むるに至らざりしは、其の思想の泰西より得たりしよりすれば寧ろ當然なりといふべきか。

然らば舊俳の内部より之か革新を計る者あざりしが。彼等宗匠商賈の門流にも亦二三新智識を有する者なきに非ずと雖、一度其の門に入るや、依然舊俳の渦中に陥り、遂には皆純然たる宗匠商賈の繼承者となりき。故に當時の俳句は依然第一章に述べたる状態に在り、永機幹雄等所謂宗匠商賈の輩、徒に正風の虚名を呼號して祖翁の精神蕩然と空しく、穿ちを求めて理窟に陥り、風情を求めて晦澁に

流れ、要するに詩の何たるを知らず、詩境と非詩境の別を悟らず。相率ゐて非文學の畛域に赴けり。而も其の流を追うて俗俳を弄ぶ者、三都を始め諸國に滿ち、宗匠の門に集りて社中を成し、月に幾卷の集を作り、發句聯句に點を乞ひ、謝禮馳走をなし、入花景物を置き、圍棋雙六と同様なる消閑の遊藝となす者、所として存せざるなし。俳諧の墮落殆ど極れり。『俳諧古選』總論に「作者年々に多く風格日々に乖き門戸競ひ開けて多岐羊を失す、所謂盛極つて衰兆す」といへるは、明和以前の俳壇を評せし言葉ながら、移して以て明治の舊俳を評すべし。

俳諧の革新は二十年頃の文學革新家に望むべからざると共に、到底舊俳の門に望むべからず。斯界若し革新すべくんば之を別種の新人物に望まざるべからず。果然革新の曉鐘は、夙に泰西文學思潮に浴し、而も自國文學を研鑽して俳諧固有の趣味を解し、且つ舊俳以外に立ちて其の門に入らざりし新俳人によりて撞き出されたり。正岡子規尾崎紅葉の徒即ち之か巨擘なり。

既に述べし如く、俳諧革新の標準は之を泰西に求むべからず、而も一代俳諧の墮落救ふべからざる者ありしとすれば、新俳人の取るべき道、唯標準を過去に求め現

代非文學的傾向を打破して之を文學の地位に進むるに在るのみ。されば當時舊俳の門を避けて新風を起さんとし、或は文學として價值ある俳諧を創めんとせる新作家は、期せずして古人の作に就き、其批判の標準など、從來俗俳の徒が稱ふる傳說的の其れを取らず、自己の新見識を以て之か妍醜を分ち、新に妙句名吟を其の間に求めて之を研究の材、創作の師となせり。或は談林を採り、或は蕉風を採り、或は蕪翁を取り、其宗とする所にこそ差あれ、天保以後の俗俳を斥けて天明以前の古俳に活眼を開きしは蓋し一なり。

正岡子規
尾崎紅葉

古俳復活の先鋒たる子規と紅葉とは、其の年齢を同くし、其の學校を同くし、共に大學國文科に入り、共に半途退學し、而も等しく俳諧に指を染めたり。且つ子規か其の著『癡祭書屋俳句帖抄』に言ふ所によれば、彼か俳事を始めたるは十八年の頃なるが如く、硯友社員の紅葉追憶談によれば、彼の俳諧も亦子規と同年『我樂多文庫』と共に始まりしか如く、而も二者共に、舊俳と何等門流の關係なくして直に古俳の趣致を得んとしたりき。然れども二人相互の間には何等の交通なくして各獨立の發展をなし、其俳に入るの動機と師宗とする作家とを異にす。『俳句帖抄』に

依れば、子規が身を俳句に投するに至りしは全く『俳句分類』の編纂に因す。曰く『俳句分類』の研究が昔の連歌時代より始つて、貞徳派の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら、尙五里霧中に迷うて居る有様であつたが、春の日荒野など、漸く佳境に入り始めて、猿蓑を繙いた時には一句々々皆面白いやうに思はれた、これが俳句に於ける進歩の第一歩であつた」と。時に二十四年なり。知るべし、子規の俳に入りしは古俳句の歴史的研究に基し、其の宗とせし所は『猿蓑』を中心とする蕉風の一派に在るを。紅葉は即ち之に異なり、其の俳句は素と文才の餘技にして、狂句川柳に近き諧謔の調を弄するに止りしが、既に小説に於ける西鶴崇拜は延て俳諧に及び、遂には西鶴の屬する梅翁一派を宗として之に趣き、未だ『猿蓑』以下には及ばざりき。時正に二十二年なり。知るべし、紅葉の俳諧は西鶴摸倣に始り、宗とする所は談林の一派に在るを。斯くて同時に起りし二作家、一は直に談林に復歸し、他は一步進んで蕉風に適從しぬ。爾來紅葉は硯友社一旗を率ゐて紫吟社を結び、子規は所謂日本派を率ゐて新聞『日本』に據り、兩々歩武を進めて流風世に布けり。此の間紅葉は談林の奇調より

漸く平淡の調に入り、子規は元祿より一進して天明の俳風を追ひ、以て二十八年の盛時に及びり。兩派の趣く所同じからずと雖、之を復興俳諧といふ大筋の下に一團と見るを得べくんば、吾等は江戸時代文學史に於ける梅翁以來蕪村に至る前後百年間の俳諧史がさながら最近五六年の間に縮寫せられたるを覺ゆるなり。されば兩派時を同うして立てりと雖、之を歴史的發達の跡に見ば、紅葉派は即ち俳諧復興の先驅にして、子規派は即ち之か主力なりといふべし。

尾崎紅葉

紅葉が俳諧は談話の奇調を以て始り、小波(漣山人)思案、眉山、水蔭等紫吟社の一派頻りに談林風又は虚栗集風の發句を吐きぬ。時恰も小説勃興の機運に際會し、硯友社の聲望江湖に布ける折なりしかば、其俳風も亦青年文客を動かして一時の流行を作りぬ。舊派は驚いて之を排斥し、書生俳諧と冷罵しぬ。既にして文學の進運小説をして戯作の境を脱せしめ、紅葉か作風亦滑稽談話の戯作者風を擺脫するに及んで、其の俳諧もおのづから楮餘の戲筆たる境界より出で、眞面目の文學的作品に入り、華麗より一轉して平淡に移り、想も調も漸く談林を離れぬ。時に二十七八年の交なり。然れども新に起せる俳調は談林の其れの如く青年俳客を動か

すに足らざりき。凝り性なる江戸氣質に洒脱を求むる餘り、平淡益々平淡となりて遂に主觀的醇化の極に達し、從て其の趣味著しく個人的となりしかば、文壇多數に容れられて一世の流行をなすべき性質を失ひ了んぬ。蓋し紅葉か俳諧は決して明治文壇を飾るに足るべき者に非ず。之を創作せし事實は決して文學者としての彼の價値を増す所以に非ず。彼が『太陽』『秋の聲』等の雜誌、及『煙霞療養』と題する紀行文の中に收めたる吟什の如きは、決して小説の手を停めて之に従事すべき程の者に非ざるなり。

紅葉に次きてこの紫吟社中の作家を大江小波即漣山人となす。紅葉門下にては鏡花風葉最優る。此派作家の特徴を擧げれば、趣向に時間と事件とを含める小説的の者を喜び、多少複雑なる人事を取らんとする傾向ありといふべし。

俳壇革新の先驅たりし談林復興の一派は、普遍的傳播をなすに至らずして其の勢力を失ひしに際し、蕉風復活の子規一派、革新の主力として文壇に現れたり。正岡子規は伊豫松山の人、若うして東都に遊學し、高等中學に在る頃恰も紅葉か同窓の人々と文社を結びしが如く、同郷の内藤鳴雪、竹村黄塔、五百木瓢亭、新海非風、藤野

正岡子規

古白等と文會を組み文集を編めり。二十四年大學國文科に在り、始めて俳句分類に志し、古來の俳諧を歴史的に研究して元祿の絶調に及び、茲に斯道に於ける活眼を開きて爾來一身を俳事に委ねたり。翌年の初燈火十二ヶ月「男女句合十二ヶ月」を始め連りに一題十二ヶ月の俳句を作りしは即ち此の時頃の事にて、調未だ整はず、句尙勿しと雖、縦横の俳才鬱勃の活氣おのづから其の裡に現はる。同年又俳論を『日本』に投じ、遂に大學の業を抛つて日本新聞社に入り文苑の一隅に俳欄を設けて同人の句を載するに至りしかば、新聲始めて斯壇に上りぬ。爾來東西に旅して句作に耽り遂に『猿蓑』に私淑して俳句の寂を悟り、蕉翁が自然觀察に眼を開きて古池の吟を得たりし如く、客觀叙景の一門を立て、俳句の領域を擴張したりき。『はて知らずの記』『高尾紀行』等に出てたる者は即ち當時の作句にして、以て彼の格調を窺ふべし。

斯る格調は當代の俳壇に見るべからざりき。舊俳の俗調は勿論、談林復興の一派と雖、此の清新に遭ひては一瞬を輸せざるを得ず。而して子規と歩調を一にせる者には前記鳴雷孤亭等あり、之に加はりし者には佐藤肋骨藤井紫影伊藤松宇等

あり、來り學べる者には高濱、盧子河東碧梧桐佐藤紅綠等ありて、新俳風漸く起り、二十七年『小日本』を發兌して句を江湖に募るや、應募者連りに出で、勢力愈張る。加一方にては子規俳話俳論を公にして益此の運動を進めたり。されば今、新派の句品を詳論するに先ち、暫く子規が俳論の主旨を畧述せん。

曩に硯友社の俳家は非文學の極に達せる當代俗俳を斥けて談林を取りしが、子規は談林の格調思想を以て尙非文學的なりとなし、『虛栗集』を以て尙幼稚なりとなし、『曠野』『猿蓑』に至りて始めて文學として推稱すべき俳諧を認めたり。彼の俳話はこの論を以て始まり、爾來論述する所少からず。就中新思想宣傳の上に最力ありしは即ち二十六年に出てたる『芭蕉雜談』を以て始となす。こは實に明治新思潮を以て俳諧を論じたる嚆矢といふべく、芭蕉を藉り來りて宗匠者流の没詩眼を指摘し、進んで新詩眼の標準を示し、者なり。曰く、芭蕉の人格は偉大なり。五十年の短生涯能く一代の崇拜を博して俳道の宗と仰がれ、恰も宗教の祖師の如く後世に神視せられたり。然れども人格の偉大は直に文學者としての偉大を證する料とはならず。彼の俳諧を以て完全無缺超批評の靈物となし、は即ち憐むべ

「芭蕉雜談」

き舊俳者流の無識に出づと。乃ち斷案を下して曰く、彼が俳句一千餘首、過半は悪句駄句にして、古來靈句として傳へたるか中にも、宗匠者流が金科玉條とせる「古池や」道のへの「枯枝に」等は、一として凡句悪句ならざるはなし。彼等が此等の句を尊ぶは批評眼の明なるありてするに非ず、唯文學上何等の價值なき傳説によりて之を神視するのみと。該句を擧げて縦横に批判し、以て二百年來の盲目的信仰を破りぬ。次に新に芭蕉の眞價を闡明せんとし、新審美見を以て集中の名句を精査し、芭蕉の芭蕉たる所以を發揮せり。曰く、本邦詩歌に雄渾豪宕の致を缺けるや久し。此の間に介し、獨り豪壯の氣を藏め雄渾の筆を拜ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を叙し、直に萬葉を追ひ實朝に及かんとせる者は、即ち芭蕉なり。試に「夏草」最上川「荒海」大井川「野分」等の諸吟を見るに、老健雄邁殆ど空前絶後なり。而も彼の技倆は之に止まらず、或は自然なる、或は纖巧なる、或は華麗或は幽玄、其他奇拔滑稽蘊雅、行く所として可ならざるなく、格調亦必しも一格に拘せず、凡百の姿態普く包容して滯るなし。芭蕉の偉大なる所は、即ち爰に存すと。是れ子規の芭蕉論の概略なり。

芭蕉論は當時に在りては實に空谷の跬音破天荒の論評なりき。其の直接の目的は千載誤られたる芭蕉の眞價を發揮するに在りきと雖、其の結果は舊俳折伏と新俳顯揚との二者となりて現れたり。勿論子規の説多く獨斷に傾き、且つ連俳の第一句たる發句を評するに獨立せる一個の文學に對する標準を以てし、而も其の批評は彼自らの趣味見識に依據して疑はざる嫌ありと雖、彼の趣味は明治の新趣味に養はれ、彼の見識は明治新思潮に養はれたる者なり。「芭蕉雜談」一篇小なりと雖、俳壇革新の曉鐘として長へに耳傾けらるべし。此點に於て之が俳史に於ける地位は『小説神髓』の小説史に於けるに似たり。子規が宗匠者流の神聖視せる幽玄主義寂癡主義を打破して新蕉風を發揚せし態度は、即ち逍遙か馬琴一流の勸懲主義を排斥して心理主義を鼓吹せし態度なりき。「雜談」及其他の俳論を收めたる『獺祭書屋俳話』一部永く明治文壇の珍たるべし。

子規の古俳研究は歩を進めて安永天明の中興俳傑に及び、『猿蓑』の高古を喜んで他を知らざりし彼は、是に於てか蕪村等豐麗の趣味を解するに至りぬ。二十七年より翌年に亘る彼が俳論と創作とは、即ち此の間遷移の消息を表す者にして、作

句に著しく妖艶雄健等積極的趣味を帯び來れり。當時蕪村の俳壇に於ける價值未だ世に知られず、畫人の名のみ獨り高うして其の句集の如き殆ど坊間に存せざりしが、子規等類題集中蕪村の句の散在せるを見て其の異彩に驚き、乃ち故紙堆裡に一寫本を搜索し得て始めて其の全豹を窺ひ、之を研究する益深うして之を評價する益高く、遂に漢語を含める一種拮据の異調はいたく『日本』の俳句に影響を與へたり此變遷は子規一人に止まらず、延ては普く彼の一派に及び、『小日本』の募集に應ずる者、『小日本』屢刊して『日本』の俳欄に投稿する者亦悉く之に倣ひ、相率ゐて夜半亭の格調を追へり。此時に方りて、斯派の俳風天下に布き、新思潮に養はれたる青年競うて子規の麾下に趨りぬ。世稱して日本派と言ふ。『日本』に據りて立てるを以てなり。

日本派俳句の内容は爾來、又多少の變遷をなしたりき。『俳句帖抄』に依れば、子規か蕪村の真相を解して眞の蕪村調を創り出てしは、二十九年『新花摘』を讀めるよりなりきと。然り、子規を始め日本派一輩は、蕪村に得る所多かり。然れども、思想と聲調と、必しも蕪村の模倣に終らず。思想に明治の特色を帯び、聲調に長短拘

河東碧梧
子規高濱虛

る所なき異格を加ふ。此傾向の極端に發達して宛然當時の風潮を代表する者を、虚子碧梧桐の二人となす。二人は郷貫を同うし、修學の徑路を同うし、俳句に入りて其歩武を一にし、各特色ある思想聲調を以て斯壇の急先鋒となりき。思ふに碧梧桐は冷靜に事物を觀察し、虚子は熱情を以て事物に同感す。從て前者は客觀に傾き、後者は主觀に傾き、一は寫實的、他は理想的なり。碧梧桐は寫實に傾くを以て常に印象の明瞭ならん事を求む。十七字の短詩形の中に印象の明瞭なる詩想を盛らんとするか故に、其の描寫の對象は範圍極めて小なり。虚子は然らず。彼は理想に傾くを以て或は主觀を詠じ、或は複雑なる人事時間を含める事物を描く故に彼の句は印象の明瞭碧梧桐に及はずと雖、餘韻あり、時間の延長あり、間々大景臺を描かんと試みぬ。

斯くの如きは子規か認めて以て古人以外の新調となし、蕪村に出で、一步を進めたりとなし、者なり。蓋し二人の爲せし所、悉く粉本を蕪村に求むべく、蕪村の企劃を紹介し來りて之を極度に發展せしめたるなりき。而して此事實は思想よりも意匠よりも、句法聲調に於て一層甚しきを見る。彼等は先づ五七五の格を破り

十九字二十一字の句を敢てし、漢語漢文の句法を用ゐ、虚字を省きて實字を充てたり。且つ句切れに於て從來見るへからざる新工夫あり。極端に走るや、虚栗集にも求むべからざる奔放自在の異調を取り、一時評壇の物議を招けり。斯る拮据の調破壊の調は、動もすれば韻文の美を失うて散漫無味の語句とならんことを。要するに永續すべからざる一時の變象なり。

内藤鳴雪

是等の點に於て鳴雪の俳風は虚碧二人と反對に立てり。鳴雪は弱冠の青年のみなる日本派に於ける唯一の老俳人にして、子規に次て該派の有力者たり。彼は思想に於ては純客觀の事物にして餘韻の長きを喜び、形式に於ては五七五の正調を固守して虚碧の變調を斥く。彼は又用語は雅言を好みて虚碧の漢語を取らず。詩材は過去社會の事物を用ゐ、總て優美典麗若くは幽寂清雅の趣を愛す。

其他當時日本派に重きをなし、者には、東京に佐藤紅綠石井露月あり。伊豫に村上露月柳原極堂あり。熊本に夏目漱石あり。就中、紅綠は碧梧桐に似て、而も變化の才あり、露月は漢語調を好む事虚碧に同じくして、而も漢思多面なり。露月夙に蕪村調の眞を得、極堂は巧緻清新の作をものし、漱石は嶄新警拔の句を吐く。共

秋聲會

に一方の雄なり。以下、下村牛伴、福田把栗、坂本四方、太等數ふるに暇あらず。

筑波會

此時に方りて俳運大に起り、舊俳家角田竹冷は戸川殘花と共に秋聲會を起し、(一十八年)紫吟社、雪人派を包容して新俳の一部と舊俳の一角との大連合を企て、雜誌『俳諧秋の聲』を刊して之か機關となし、帝國文學會の佐々醒雪、大野洒竹等、筑波會を立て、(二十九年)作句を『帝國文學』に掲げたり。筑波會の俳人は論評の精透なるに比して作句未だ熟せず。秋聲會は數十の會員を擁し、新舊調和の標榜を掲げ、たれども新派の粹と舊派の粹とを招致する事能はずして、唯準新派準舊派の多少趣味を同うする者のみを集むるに止まりぬ。何れにしても俳社俳人の増加夥しく、俳書俳誌の發刊亦盛に、新聞雜誌は競うて俳句を載せたり。當時都下新聞十六種の中之を載せざる者六種に過ぎず、雜誌にては苟も文學にたづさはる者一として之を収録せざるなし。

然れども日本派以外の俳人俳社は、其の活動常に受動的に出づ。彼等は日本派が一切の異趣味一切の異色を拒否して只管自派擁護に勉むる反撥的排他的態度に、其競争心を激發せられて是に至りしのみ。故に其の活動や概ね末頼もしから

す。加ふるに彼等か俳句研究に於ける熱心は到底日本派に及はず。彼等が俳句を作るは閑人の閑事業の如く、日本派の之に於ける純然たる文學者の態度を以てし、研鑽擁護に至らざる所なし。是を以て二者が斯壇に於ける進歩は頃刻にして著しく懸絶し、日本派獨り其の進歩を續けたり。三十年に入りては紫吟社振はず、雪人派潜み、秋聲會亦衰へて『秋の聲』も倒れたり。之に反して日本派の傳播、各地方に亘り、極堂松山に俳誌『ほとゝぎす』を發刊し、爾來俳會の起る者各地相次ぎ、根岸子規庵の會衆益多きを加へ、翌年遂に一派の選集『新俳句』を刊行し、次で『ほとゝぎす』を東京に移して虚子之に當るに至り、斯派の勢力牢として抜くべからざるに至りぬ。

斯る間に日本派の俳句は内容に於ても少からざる進歩をなし、二十九年に於ける變調漸く捨てられて平正の常調に復し、奇想を弄する事少くして着眼を平淡の境に求め、絢爛の趣致漸く減じて淡泊の情趣加はらんとす。而して蕪村の研究益々歩武を進め、子規は『俳人蕪村』を『日本』に連載して縦横剖拆、所論精緻、俳人としての蕪村を天下に紹介し、更に鳴雪等と『蕪村句集』を研鑽講評して之を『ほとゝぎす』

『ほとゝぎす』
『新俳句』

に連載したりき。是に於てか斯派俳句の趣致傾向格調句法乃至文學上の地位、社會の批判、大體に一定の境に達し、俳壇の優者として一般に認めらるゝに至れり。

故に吾人は『新俳句』の刊行『ほとゝぎす』の東遷を以て、俳句革新の事業の略完成せる時期と見做し、乃ち筆を三十一年以後に進むるを停め、願て明治俳句の高潮たる日本派の作を検し、古人以外明治の特色の如何なる者を含めるかを究めんとす。

三十二年の初子規『ほとゝぎす』に論じて曰く、文明が簡單より複雑に、粗大より精緻に、散漫より緊密に越くと共に、美術も亦同一の傾向を取りて進み、俳句亦從て此の迹を追ふ。多様と變化とは進歩の階段なり。明治俳句の進歩も亦此の中に攝せらる。明治俳句に古人以外の特色ありとすれば、其は即ち古人より一層複雑精緻緊密なるに在り。元祿は天明に進めり。天明は更に進みて明治となる。新興の特色は常に純粹なる新分子を含む所に存せずして概ね複雑精緻緊密の度を増す所に在り。碧梧桐の『強力』の清水濁して去りにけり、蕪村の『二人』して掬へは濁る清水かなに比し、虚子の『繪踏して生残りたる女かな』は蕪村の『御手討の夫婦なりしを更衣』に比して一層時間的複雑を加へ、印象の明瞭ならん事を勉めたる碧梧

桐等の句は概ね描寫の精緻を見るべく、一句充實勉めて冗漫の嫌なからん事を期せる虚子等の句は句調の緊密遠く、古人の外に出でたり。若し夫れ明治俳句の新趣味に至りては、當時洋畫界及小説界にも現はれし如く、濃厚に非ず高遠に非ず、むしろ淡泊平易、元祿天明に發達するを得ざりし一種の新俳味なり。此の俳味や實に三十年以後の發達に屬し、虚子の「宿借さぬ蟹の村や行き過ぎし」の句に見ゆる如く、蕪村の「牡丹ある寺行き過ぎし恨かな」と恨を言ひ出でしに似ず、又「宿借さぬ火影や雪の家續き」とて其の光景を辭りしに異なり、唯前村後村の間中途に在りて歩むを言ふのみ。此の間の趣味は新俳人にして始めて味ふを得べし。明治俳句に於ける古人以外の特徴は蓋し之に盡く。是に於てか明治俳界の進歩の小説界の其れに比して著しく遜色あるを覺ゆ。元祿化政の小説と明治の小説との間に存する如き鴻溝は遂に之を安永天明の俳句と明治の俳句との間に見る事能はざるなり。

俳句革新の運動は一段落を告げぬ。乃ち願て其の主唱者たる子規に就て再説する所あらしめよ。子規既に蕪村調に入りしより其の作句絢爛の域を過ぎて平

淡の境に入り、彼の所謂新趣味は最早く彼其人の句に現れたり。「俳句帖抄」に曰く、「新花摘」を讀むに、蕪村の頭を惱まして修正したる句は概ね好句ならず。又自慢の意を洩せる句も餘り好き句に非ず。最感服する句は多く一題七八句の中に在る極めて無雜作に成りきと思はるゝ句なり。蕪村の大才を以て尙且かくの如くなるを見て俳句の如何なる者なるかを始めて悟りぬ。子規の句か平易淡泊の趣を得たりしは、蓋し之より後なりしならん。「大爪に近よる鳶もなかりけり」「夏川や中流にして願る」「椎の木を切り倒しけり秋の空」「夕鳥一羽後れてしぐれけり」「水々仙の苔に星の露々孕む」などの如きは此の期に屬するものか。然れども子規の俳才は一格に拘泥するか如き小なる者に非ず。一派の俳人、虚碧を始め、一として一時の僻調に走らざるなき中に立ちて總ての格調を容れて餘裕綽々、常に進歩の先登に立ちて一派を指導したるは即ち子規なりき。彼は多様の變化を一身に集め思想聲調行く所として可ならざるなし。二十六年「日本」に掲げし「古人調十二ヶ月」及二十九年同紙に出し、「俳句二十四體」の如き子規自身も其の杜撰なるを言へりと雖、こにかく變化の才を見るべし。思ふに多數を率ゐて一派の指導者たらん者

は常に此種の才なかるべからず。而も其の蕪村に悟入するに方つてや、變化の裡おのづから子規獨得の俳風を生じ、遂に獨立して其の新趣味を宣傳するに至れり。而して彼の俳才は常に俳句に止まらず、聯句にも現はれ、夙く二十五年以來時々試みし者少からず。然れども是れ固く彼の餘技、深く究むるの要なし。

子規は又小説に指を染め、夙に「月の都」を草して「小日本」に掲げ、三十年又新小説に「花枕」を出し、又新體詩を試み、二十九年以來「日本人」は「きす」等に載せたり。然れども是亦楮餘のすさび、鬱勃たる覺想の十七字詩の中に收むべからざる者あるに方りて是等大詩形を試みしに過ぎず。唯短歌に至りては、三十一年「日本」紙上之が革新に着手せし者にて子規に取りて甚眞面目の事業なれば、重ねて後節に説くべし。

文學者としての子規はかくの如く多方面なり。而も其の事業の最赫灼なるは言ふまでもなく俳句復興の一事に在り。彼は俳句を墮落の深淵に救うて文學の境域に引き上げたり。詩歌の何たるを解せざる非文學者の輩に弄はれし俳句をして學識ある文學者、趣味卓越なる詩人の手に移らしめたり。此の點に於て彼の

事業は頗る小説界に於ける逍遙紅葉等の事業に似たり。若し古今俳史の上に其の條を求むべくんば蓋し蕪村か。蕉翁後百年にして其の遺業を起し、者は蕪村にて、蕪村以後百年にして俳句を暗黒の中に救ひし者は即ち子規なり。然れども一派の俳人を率ゐ、一流の俳風を以て世を動かし、を以てすれば、孤獨なる蕪村の如きに比すべきに非ずして、むしろ蕉翁其人に比すべし。其の俳才の大なる其の俳徒の普遍なる、はた多數の子弟をして各其の才を盡さしめたる、略其の面目を移せり。加ふるに子規が梅室蒼虬等俗俳の勢力を排斥して審美眼を發句の上に開きしは、頗る芭蕉が貞門檀林の勢力を打破して自然美の上に活眼を開きしに相似たり。然れども是は俳史上の位置、俳人としての彼等を比較せしのみ。其の性格に於ては必しも相同じからず。子規は熱烈の人なり。俳壇の革新に着手して以來之を畢生の事業として身命を献じて悔いず。斯壇擁護の爲には如何なる外敵も排撃殲滅せずんは已まず。常に陣頭に立ちて一派の爲に長城となれり。師弟の道全く其の面目を改めたる今日に方り。文壇稀有の佳話を残せる者、主として彼の性格に出づ。此の點に於て蕉翁の稍閑寂冷靜なると趣を異にす。子規の句集

「俳句帖抄」

は『俳句帖抄』と題し、三十五年に至りて上巻を公にせり。二十五年より二十九年までの作を收む。不幸續巻を公にするに至らずして止みにき。

第三節 和歌の革新

歌壇革新の思潮は夙く國學復興の際に萌し、國文教育家落合直文等の運動に其の泉源を有す。彼は二十五年淺香社を結びて文章和歌及新體詩を研究し、門下效を受くる者少からさりしが、特に盛なるは即ち和歌の研究なりき。然れども彼の歌は固く御歌所一派の孱弱に反抗し、桂園末流の卑俗を排斥して起りし者にて、即ち純乎たる復古なり。勿論彼の創作は必しも議論に伴はず、歌樹常に古調たるを得ざりきと雖、とにかく純日本想を以て古歌の粹を明治聖代に發揮せんと志したりき。彼は猶紅葉の元祿小説に於けるか如く、子規の元祿俳句に於けるか如く、近代俗惡の文學を捨て、直に古文學の靈泉に汲まんとする者、門流を率ゐて能く後進を導きたるも亦二家と蹟を同うす。而も復興の文學は常に多少の新采あり。淺香社の和歌亦然らざるへからず。假令萩の家其人は泰西の詩美思想に縁遠き

人なりとするも、新思潮の文學界に於ける勢力至らぬ限もなく、四圍の物象皆新詩美思想によりて進める今日に方り、國外等『柵草紙』の徒と交り、紅葉子規等の自覺しき革新運動を目にするに及んでは、彼か和歌に對する態度も亦漸く變せざるへからず。彼か門下を教ふるに和歌は時代の進運に伴ふべしとの主義を以てするに至りしは即ち此時に在り。

當時歌壇を支配せる潮流は言ふまでもなく舊派の其れなりき。俳壇の宗匠か天下に遍きか如く、歌の師匠も亦津々浦々到る所に存し、詩歌の何たるを知らず、詩美の何たるを解せず漫然心に思ふ事を見る物聞く物につけ言ひ出せる者即ち和歌なりと考ふる固陋無識の徒が、恣りに子弟を取り詠草を集め、賻を收めて點を加へ其の俗了せる事、點取俳諧者流と擇ふ所なかりき。是を以て所謂歌人なる者多士儕々として其多きに堪へず。所有國學者は即ち歌人なり。所有公卿は悉く歌人なり。廟堂の有司亦多く歌人なり。而して皆流を競ひ派を立て或は會を組み社を結び、各類を以て集り、門を開きて風を布く。當時斯界の中心たる御歌所には、高崎正風、小出桑、植松有經、大口鯛二等あり、其他鈴木重嶺、阪正臣、黒川真賴、稅所篤子、本居豊

海上胤平

類等、或は某園或は何適合と稱する者頗る多かりき。然れども彼等は、其流派に如何に係らず、畢竟桂園の末輩に非されば則ち四大人の精粕に止り、想形共に陳套相襲ひ、千年の舊型を墨守して、詩歌に對する根本的誤謬を悟らず、歌詞を制し、嫌忌を定め、範裡に籠居して井蛙の見を固持したりき。獨り海上胤平の和歌は一種の異彩を此間に放ち、其の萬葉集模倣の作、頗る豪健の趣を帶べり。然れども彼の議論と製作とは萬葉集の外に一步も出づる能はず、唯加茂真淵が百年以前になしたりし驚歎を再せしに過ぎずして、其製作の如きも固より橘曙庵に比ふべくもあらざりき。特に詩歌に對する根本思想に至りては依然傳來の誤謬を繼承し、從て當代歌壇に何等の事蹟を残さざりき。

新思潮を餘所に見て、歌界の状態が今日に至るまで其の舊様を存する事斯くの如くなりしは何故ぞ。和歌革新の獨り大に後れたりしは何故ぞ。思ふに和歌は三千年の傳統を有する本邦最古の文學にして、前代以來小説以下の平民文學に對し、貴族文學堂上文學として立ち、因習の久しき、革新を以て破壊と考ふる傾あり、新思潮の奔流も之に加ふるに由なかりき。否、之に加ふる能はさりしに非ず、革

新の手を下す價值なしとて之を拋棄せるなりき。蓋し新體詩の創始者は其精神に於ては即ち和歌の革新家なり。彼等は泰西詩歌の精神を本邦詩歌に加へんとするに方り、和歌なる者の到底複雑清新なる新詩想を容るゝ能はざるを知り、乃ち去つて新體詩を起しゝなり。故に斯道の先覺は夙く十年前に存し、詩歌に對する觀念の更新も亦既に成就せられたりき。然れども之を和歌其物に及ぼし、短詩としての發達を促しゝ者未だ之あらず。即ち和歌は長く新思潮に見捨てられたるなりき。さばれ御歌所一派の歌は依然斯壇の牛耳を取り、『國光』『明治會叢誌』等保守的國家的主義の雜誌に其吟咏を載せ、堂上の和歌尙跋扈せり。淺香社は實に斯る時に現はれたるなり。

落合萩家

淺香社は歌壇革新の先驅をなせり。萩の家の歌を教ふるや舊型に依らず、舊様を追はず、歌題の如きも新を取り陳を避け、其の新しきも唯大體の着想の方向を示すのみにて、極めて自由なる態度を取り、學弟をして各其の才を盡さしむ。『萩の家遺稿』收むる所の日課歌題を見るに從來月並的の題とはいたく趣を異にし、着眼新にして題目奇拔、材料豊富にして吟咏の對境甚しく廣濶となれり。是を以て創

作も亦たのづから舊套を脱して清新掬すへき者少からず。而も彼れの和歌に對する愛慕は無限にして、其の熱心や殆ど献身的なり。我歌をあはれと思ふ人ひとり見出で、後に死なんぞ思ふと述べしは實に彼が素懐なるべし。彼は猶紅葉子規等の如く、自己の文學を以て其の生命となしたりしなり。彼が斯界革新の先驅となり、其の事業を果すべき幾多青年の歌人を養成し得たる洵に故なきに非ず。然れども萩の家の思想は其根底に固有思想の半乎たる者あり。飽くまで新思想を容れて着想聲調に大膽なる更新を加ふるに至らざりき。かの夢に見し女神の跡を慕ひ來てけさ我見たり白百合の花の如き理想的の和歌は、蓋し彼れの本領に非ず。萩の家の歌は、猶其新體詩、孝女白菊歌等の、動もすれば七五調の長歌たらんとする形跡あるが如く、全然舊様を擺脫する能はざりき。彼はげに最妥當なる意義に於て過渡の歌人と稱すべく、革新の事業は渾て之を其の門下に附屬しけり。

（今や文運興隆の機熟し、各種の文學競うて其の面目を改め、俳諧革新の事業も亦着々成功しぬ。和歌界のみ豈獨り舊態を存すべけんや。曩に和歌を以て改良す

るに足らずとなし、之を捨て、新體詩を創めたりしも、詩人胸裡に存する詩想は必しも長大の詩形を俟つて發露すへき者と限らず。或は三十一字詩に表はすを以てし最適切なりとなし。或は十七字詩に表はすを以て最妥當なりとなす。詩想無限なり。豈和歌に盛るべき恰好の者無からんや。況や新詩想の流入詩材の増加、詩語の擴張特に著しき今日に於てをや。是を以て新體詩起るも和歌は爲に倒るへきに非ず、兩々相並びて別個の發達をなすへき充分の餘地あるなり。

一 淺香社中の青年歌人は、萩の家の鼓吹の下に斯壇に新風を導かんと努力しぬ。與謝野鐵幹、金子薫園の徒、即ち是なり。就中鐵幹年少の銳氣を以て新調を鼓し、革新の先頭に立ちて健闘最力めたり。

鐵幹は京都の人、萩の家に學びて和歌新體詩に一新調を出し、霸氣旺盛にして常に豪健の風を喜べり。二十八年征清の役中、韓國京城に在り。病んで重きや、歌うて曰く、韓にしていかでか死なん我死なばをのこの歌ぞ復すたれなむと。以て從來の婦女的和歌に反抗し、自ら男子の歌を以て任せる彼が意氣を想見すべし。二十九年長短各種の詩歌を集めて『東西南北』を出し、續いて三十年『天地玄黄』を刊行する

や、一種の特調を帯べる短歌及新體詩は、其想形の粗放癡拙にして圓熟渾成に至らざるに係らず、いたく文壇の注意を惹き、佐々木信綱と共に最有望なる青年歌人と目せられたり。彼の新體詩は別に之を論すべし。今特に短歌に就て之を見るに、萩の家の詩風を承けて温藉の情、清新の致、掬すべき者、亦なきに非されども、是等はむしろ其特調に非ず。所謂鐵幹調は、年少の客氣世を憤り俗を恨める慷慨の歌、若くは、太刀、虎、鷲等の豪語を連ねて剛快の情景を叙べし歌に於て最善く現る。蓋し鐵幹古今集以後の纖弱と優美とを嫌ひ、萬葉集の雄壯と剛健とを喜び、乃ち粗豪の一風を立て、斯壇の沈靜を破り、從來新體詩に壓倒せられて評論界の問題とならざりし和歌をして復好箇研究の對境たらしむるに至れり。然れども彼れの萬葉を學べるは、雅樸、高古の詩想莊重なる五七の詩形に非ずして、單に其の雄壯の姿致のみ。唯夫れ雄壯ならんとす。故に往々銜氣あり、強て粗豪の語を連ねて佚宕を粧ひ、真情の流露却て見るべからず。之を要するに、鐵幹の和歌は、革新の急先鋒たりし歴史的價值に於て重すべき者にして、之に取るべき所は即ち才氣縱橫、大膽なる詩風を試みたる點に有するのみ。

鐵幹と流派を異にし、詩風を異にしながら、同時に新詩人として評壇の注意を惹きし青年歌人を竹柏園主人佐々木信綱となす。二十一年大學古典科を出で、爾來竹柏會を立て、和歌を門生に教へ、『日本歌學全書』『歌の彙』等斯道に關する編纂出版をなして其の弘布に益する事少からず。二十九年其の詠草を『めさまし草』に出すや、漸く世の注目を惹き、聲調の流麗なるを以て稱せられたりき。彼の和歌、鐵幹の霸氣なき代りに其の俗氣なく、鐵幹の銜氣なき代りに其の意氣なし。唯かの舊時代の發達に屬する和歌を以て新時代の事物に調和せんとし、多少清新の趣致を得んと勉むるに至つては、亦新歌人たるを失はず。試みに『めさまし草』所載の歌を検するに、

星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く。

鐘の聲さ霧に消れて天地に到りわたれる夜の色かな。

葉賣る家の門べをたぐく子が髪ふきみだすさ夜嵐かな。

等、從來歌人に比して想像の範圍廣く、彼等に見るべからざる清新の趣致あり。其の調の流麗暢達なるは、十年來専門の宗匠としての竹柏園が獨得の壇場にして、鐵

幹の遠く及はざる所なり。然れども竹柏園は用語に於て保守的の主張を有し、新事物新思想を詠するに、總て雅語を以てせんと擬するが故に、弊や流れて牽強となり、性々笑ふべき滑稽に陥る。思ふに彼の長所は宛轉たる聲調と千篇立ろに成る達腕とに在り。而も短所亦茲に存し、動もすれば平弱無力の凡調を出し、詩趣索然として空しきあり。歌壇革新に對する態度も、頗る穩和にして、新派と言はんよりむしろ新舊調和派と稱するの妥當なるを見る。從て新文學界に於ける勢力も亦おのづから鐵幹等の下に在るを免れず。

此時に方りて、正岡子規は俳句革新の餘勢を振うて和歌革新に着手しぬ。三十一年の初『日本』に掲げし「歌人に興ふる書」は、即ち子規が斯壇に討つて出てたる名乗の聲にして、續て『百中十首』の創作を同紙に掲げ、爾來竹の里人の名を以て一種の新調を詠みて出でぬ。

緣先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の緑手水鉢を掩ふ。
病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて尙病みて臥す。
立並ふ榛も楓も若葉して日の照る朝を四十雀鳴く。

の如きは當時の歌壇に見るべからざる異彩を帯べり。而も其異彩は鐵幹信綱と趣を異にし、調子歌題の上よりもむしろ一首に磅礴する趣味の上に存す。思ふに子規の和歌を讀みて先づ感ずるは俳趣味の掩ふべからざるに在り。本邦の文壇短歌ありてより、歴代の歌人によりて養成せられたる和歌の趣味は、遂に特立して一種固有の者となり、漸々發展して茲に文壇一方の趣味を代表するに至れり。竹の里人の短歌は即ち之に加味するに俳句の趣味を以てせるなり。此の特色や、漢語を含めるを指して言ふに非ず。漢語は鐵幹も之を用ゐたりき。又間々萬葉の古調を交ふるを言ふに非ず。萬葉調は海上胤平も之を用ゐたりき。用語句法の末に在らすして根本の趣味に於て存するなり。げに此の事は俳人にして和歌にたづさはらん者の、必ず然るべき傾向にして、芭蕉蕪村の徒が指を之に染めたりしならんには夙に斯の風體を得たりしならん。而も前人之を成さず、竹の里人乃ち本邦文壇に於ける和歌趣味と俳句趣味との調和者として之が創始の譽を負うたり。

俳趣味はげに竹の里人の異彩なり。而も尙第二の特色として調のしまりて一

點のたるみなきを擧ぐべし。彼は從來の和歌の一大通弊として調のたるめるを指摘し、斯る歌を以て調と、のはぬ歌となし、語の配置、句の連續に於て冗漫弛廢の病なく、飽くまで緊張勁健なるを尙ぶ。竹の里人は此の點より古來の和歌を通觀して萬葉集の卓逸せるを喜び、其以後に於ては源實朝を推し、田安宗武を擧げ、井手曙覽を稱し、更に備前の歌人平賀元義を暗黒の中に救へり。斯くして彼は從來歌人の纖弱にして弛廢せる聲調、陳腐依様の思想を排斥し、溯つて萬葉集の剛健にして緊張せる聲調を取り、自然及人事に對する新しき著眼より得來れる詩想若くは彼の既に得たる俳想より形作れる新歌想を詠み出でたりき。

三十二年以後の作歌も、大體に於て前條所說に異ならずと雖、唯萬葉崇拜の度の益加はり、音に剛健の趣緊張の調のみならず、延て句法用語を模し、更に長歌旋頭歌等の形體を模し、進んで思想さへ學はんとするに至れり。然れども之既に加茂真淵等に見たりし如く、萬葉崇拜の極、皮相に走りし一時の變象にして直に以て竹の里人の本領となし難し。其の歌想漸く神に入れる頃の作『曇』五首、『雨中庭前の松』を見て作る『十首』、『風』八首、『星』九首等の如き、重厚勁健の古萬葉調を以て明治の新

詩想を詠じ、詩味津々として清新の氣盡きさる者あり。且つ一題數首乃至數十首をもつて各其趣を得たるは、本と俳句にて養ひし手腕なるへしと雖、亦彼れの詩想の富贍なるを見るに足る。唯事彼が晩年に屬し、一臥起たさりし病牀の執筆なるか故に其詩材題目概ね病室乃至庭前の小範圍に限られ、動もすれば同一の歌想を繰り返さんとする嫌あるを恨とす。

竹の里人が『日本』紙上歌論創作を載せしより、麾下に集まりし者に、香取秀真伊藤左千夫等あり。三十二年春根岸短歌會を起し、作歌は常に『日本』ほととぎす、『心の華』等に載せ、歌論亦之に伴ひ、頻りに革新の説を稱へたり。

竹の里人の期する所は蓋し短歌革新の事業を成就するに在りしならん、然れども其運動の文壇に及ぼし、影響は到底俳句に於けるか如く雄大絢爛なる能はざりき。思ふに是當時和歌界の革新は既に萩の家竹柏園の徒によりて其の幾分をなされ、加ふるに革新の大勢力たるべき青年好文の徒は、多少貴族的女流的なる和歌よりも平民的男子的なる俳句に趣く傾向ありしを以てなるべし。況んや竹の里人の病漸く篤く、意氣復當年の如くならず論壇筆を振ふ事既に絶えたるをや。

三十三年鐵幹新詩社を結びて雜誌『明星』を發刊し、和歌を主として新體詩俳句其他一般文學を收録し、以て自家一流の和歌を擴布するに勉め、遂に所謂明星派の一團を形作りぬ。次に根岸派は又機關雜誌『馬醉木』を發刊して斯派宣傳に勉めしが其の青年の間に於ける勢力は遂に『明星』に及ばざりき。

茲に暫く和歌に關する筆を擱き、翻つて上述の運動が文壇に残せる結果を列擧すれば、從來單に志を述ふる要具となし、又は風を移し俗を推す方便となされし和歌を一箇の美術品として取扱ふに至りし事、其の一なり。花鳥風月に限られし歌想著しく擴張せられ、蘆庵景樹等か夢想だも及はざりし無數の題材新に入り來りし事、其の二なり。古來歌人の最得意となし、枕詞掛詞及縁語の類漸く其姿を隠し勉めて虛字を去りて實字を充つる傾向生じたる事、其の三なり。古來制定せられたる歌詞の小範圍を脱して新詩想を述ふるに足るべき總ての言語を用ゐるに至りし事、其の四なり。從來の和歌を評する者、概ね作者の感想の仔細に表章せられたるか否かに標準を置きしに反し、藝術の本義よりして該作物が讀者に與ふる詩的效果に就て論するに至りし事、其の五なり。其の他新現象一にして足らずと雖

とにかく、一時新文學界に顧られざりし和歌が、再び新文人の手に保育せらるゝに至りしは、複雑なる詩想中、又此の可憐なる小詩形に寓すべき恰當の者存するか故なるべし。然れども、革新の事業は今尙試験の際に屬し、當時の新壇未だ明治の特調を見る能はざりき。

第六章 文學の轉進

第一節 小説 其の一

一 觀念小説

前記末葉に方り甚しく沈衰せる小説界は、文運興隆の機に乗じ俄然として頭角を揚げぬ累年蓄積し來りし潛勢力爰に勃發して桃李一時に花咲き、而も前期の小説に比して一段の進歩をなしぬ。小説専門の雜誌『文藝俱樂部』は二十八年新に發刊せられ、創刊の『太陽』亦小説に盡し、『國民の友』の小説に對する推挽も從前に劣らず、其の他諸新聞殊に『讀賣』『國會』『朝日』等、競うて小説を載せ、單行本の新刊益多きを加へたり。翻つて作家を見れば紅葉露伴等前期の大家復び振ひ、柳浪眉山等、未

だ大名をなさゝりし者著しく發達し、加ふるに鏡花一葉宙外天外等新進の作家踵を接して起り、各特有の詩想を鼓して斯壇の一方に雄視せり。二十九年に入りては、此の傾向益甚しく、専門雜誌『新小説』新に發刊せられ、創作出づる者愈盛なりき。而して此の間最早く其の萌芽を露し、小説界大轉進の陣頭に立ちし者は、即ち觀念小説の一派なりき。

曩に論せし如く、第二期に於ける淺薄なる寫實小説は長く文壇の聲譽を繋ぐ能はず、代つて起りし歴史小説は成功の域に至らずして衰へ、撥發小説は粗笨淺薄、在來の寫實小説にも過ぎたり。小説内容の進歩は二十五年以來全然停止せりと言ふへかりき。是に於てか意義内容の一層深刻なるを求むる傾向文壇に生じ、之に應ずる新進作家相次て寫實小説の部内に出でぬ。彼等の作たるや、之を在來の寫實小説に較ぶれば、結構單純にして篇章亦短小なりと雖、其の心理描寫の精緻なる其の性格表出の刻劃なるに至つては遙に從來の者に勝り、而も概ね一定の觀念若くは傾向の上に立ち、人物の性格心理の發展主として之に出づ。故に此等の人物の性格及心理は從來の小説に於けるよりも更に複雑、更に微妙にして、其發展の如き

も因果關係一層確然たり。作家が斯る描寫を試みんとするや、特殊の人物を取り特殊の舞臺を取り、以て特殊の觀念思想を寓し、特殊の心理現象を描き、所謂寫實以外に或物を捉へんとせり。事二十八年に起り、世に稱して觀念小説といふ。眉山の『裏表鏡花の』夜行巡查』『外科室』等の如きは、即ち此種の小説の代表的製作なり。

川上眉山は硯友社中の才筆と稱へられしも、前期に於て未だ名をなす能はざりしが、二十八年に至りて、從來の纖麗妖冶の筆に加ふるに一種深刻の觀察着想を以てし、いたく在來の西鶴的寫實と趣を異にし初めぬ。『太陽』に出せる書記官は實に此の傾向の萌芽にして、『國民の友』附録に掲げし「うらおもて」は即ち之か精華なり。書記官は純潔の處女が父の名利の爲に一身の貞操を犠牲に供する一種悲惨なる社會現象に着想せし者にして、世間往々存する名利の繁累を利用して處女の純潔を弄ぶ惡むべき行爲を捉け來り、之を描くに一箇清新なる具象的作品の形を以てせるなり。次に「うらおもて」は、同じく社會の罪惡に着想し、徳行家として知られし者が冷酷なる世人に其の慈善心を翻弄せられ、遂に財産を蕩盡し、はては社會に突き放さるに至りて始めて社會の無情なるに驚き、熟々世相を觀察して我利私慾の世

となし、遂に自らも盜賊となれる順序を描き以て、社會を痛罵せるなり。斯くの如き趣向は從來の小説に見るべからざりき。大詩才にして筆を此の方面に向け、複雑なる心理變化の剖拆を試みる事あらば、沈痛深刻人の肺腑を穿つべき異彩出色の作を得べし。然れども作者、理想を表すに專にして事件甚自然に遠く社會觀を體現するに急にして心理變化の徑行甚分明ならず。僅かに其の一端に觸れしのみにて未だ優秀なる藝術たる能はざるを憾となす。唯小説題材を一新せし功績小ならずといふべし。

斯くして眉山は觀念小説作家の一代代表者となりぬ。然れども此の作風を文壇に捲き起して之か陣頭に花々しく戦ひし者は即ち紅葉門下の新進作家泉鏡花なりき。眉山の如きはむしろ後れて此風を學びしか如し。鏡花は二十六年紅葉の門に入り、夙に峻峭の筆を以て『讀賣』に異彩を放ちしが、二十八年春、先づ『夜行巡查』續て『外科室』を『文藝俱樂部』に掲ぐるに及び、彼の名は俄然として評壇の論題となり

『夜行巡查』

き。帝都の夜を守る一巡查あり、職務に忠實なる事類なく、夜行巡查の職務を行ふに

一點の懈怠なく、又一點の假借なく、宛然たる職務の權化なりき。然れども彼も亦木石の無情淡ならず。熱情を傾けたる一箇の愛婦を有せり。其の冷々氷の如くなるは職務の觀念強烈にして凡百の私情暫く屏息するのみ。偶々愛婦の父泥酔し、彼の女に扶けられて夜を歸り、彼を嘲罵誹議して兩者の愛を割かんとす、巡查は黙々として酔漢の後に從へり。忽然酔漢誤て濠に陥りぬ。巡查は身を躍らして續て濠に入りぬ。彼は人民保護の職掌を行はんか爲に、惡むべき戀の妨害者をも救はんとするなり。憫むべし、氷の如き濠水は此の職務の權化をして長へに逝かしめぬ。斯くの如きは『夜行巡查』の主旨なり。蓋し鏡花義務の觀念を寫さんと欲し、戀愛の私情に對する此の觀念の勝利を描き、以て人生悲劇的の一方面を深刻に體現せんとす。故に巡查か職務に忠なれば忠なるだけ、彼の情熱の高ければ高きだけ、戀愛の妨害の大なれば大なるだけ、作者の成功は其れだけ光榮ある者となりぬべし。此篇固より渾成の名作に非されども、其の題材着想全然創始に出で筆致亦幽峭にして詩趣に富み、洵に小説一轉の機を云せりといふべし。『外科室』の醫學士と伯爵婦人との間、亦這般斷腸悲慘の趣を盡し、遂にわりなき戀に一身を献するに

至る所、更に人生の恨事を體現せり。

二小説出で、鏡花の名文壇に普く、奇峭の想、俊爽の氣、沈痛の筆相俟つて人生の或物を描出せんとする彼の作は、教養ある讀書社會に多大の歡迎を受けたり。同年の「鐘聲夜半錄」二十九年の「琵琶傳」、「化銀杏」、「海城發電」の如きは皆此の系統を引ける者、構想益慘憺、筆法益瑰奇、「化銀杏」に至りて特に此の傾向を示せり。然れども物一度新傾向を帶ぶるや、往々極端に走り、從て其の弊に陥る。鏡花亦此の弊を承け、着想奇に過ぎて恠に流れ、筆力玄に過ぎて趣を失ひ、其の極不自然非人情の域に落ち、人物の如き、往々常識を超え常情を離れたる奇癖の怪物となる。故に其の事の悲惨なる讀者の胸を刺る者あるに係らず、惻々として人を動かす事なく、特に主人公の悲劇的没落以外、屢殺人の慘事を仕組みたれば、中には却て不快の感を起す事なきにあらず。

吾人は鏡花眉山の二人を以て小説界に於ける新傾向の唱首となせり。爾來或は社會の罪を寫さんとし、或は人生の目的としての戀を描かんとし、其他倫理上心理上の種々の觀念或は概念を捉へ來りて之を作品の上に體現せんと試みたる小

説續々出で來れり。批評家は概ね之を觀念小説と呼べるも、尙時には概念小説と稱し、或は其の傾向より名けて深刻小説、悲惨小説とも言ひ、又は心理描寫を主とする點よりして漠然心理小説とも言へり。然れども心理小説は觀念小説深刻小説などよりも範圍廣く、所謂觀念小説は小説全體の心理的傾向の一部なり。一部先づ起りて種々の部類之に繼ぎ、遂に各種の心理小説競ひ起るに至る。此現象は獨り小説界に存するのみならず、文藝界の全部を通じて現はれたり。國民の自覺學術の進歩と共に、從來比較的淺薄なりし思想界の比較的深厚となるや、文藝界に於ても一種深刻幽玄の新思潮起り、世態人情の機微を捉へて直に人の靈界に觸れんとす。繪畫界に於ける心もち主義、印象主義の如き皆此の思潮に出づ。特に小説に於ては、或は作者自ら泰西小説に接し、或は小説の理想觀念などを論せる批評家の論議に鑑み、從來の小説の輕浮單調に對して漸く不満足を感せるか上に社會生活の現狀は人をして人生の嚴肅なる方面を経験せしめたりしかば、愈益此の傾向を助長せるなり。

廣津柳浪

觀念小説に次て現れたるは、即ち廣津柳浪の深刻小説、悲惨小説なり。彼は前期

黒蜥蜴

に在りて既に一種人生の機微を寫すに長したりしが、今や新興の氣運に乗じ、二十八年「黒蜥蜴」變目傳を出し、其他翌年に亘りて「白百合」龜さん等を出し、愈其の本領を發揮し來れり。就中「黒蜥蜴」は隻眼痘面の醜婦にして而も貞實至孝なる大工の嫁が、貞操の爲に無慈悲酒亂の男を黒蜥蜴にて毒殺し、己亦自殺すといふ悲惨なる脚色「變目傳」は、侏儒變目の醜貌に生れて而も心尋常の情を解する心身不調和の男が、性格境遇の否なるに激成せられて遂に殺人の大罪を犯すに至る凄慘の事象を描き、其の他概之に類せる病的人物の憫むべき忌むべき運命を叙せり。此等の作出で、柳浪の名大に揚り、鏡花等と共に新派と稱せられたり。

柳浪は概ね筆を人生の暗黒面に着け、性格と肉體と境遇との關係より凄絶なる破綻を來すに至る徑路をば、極めて痛切に寫し出さんとせり。其の主人公が常に肉體上精神上の不具者、若くは強度の神經家なるか如きは、た其の大破綻の結末が概ね殺人自殺等鮮血を以て染めなされしか如きは、即ち此目的を達せんが爲に外ならず。鏡花を以て之に比するに、彼に在りては觀念或は概念といふべき者全篇を支配するも、此に在りては必しも然らず、唯世相の悲惨なる一面を深刻に描き出

さんとするを見るのみ。彼は又理想に馳せて超人間の不自然界に入る事ありと雖、此は決して然らず、人生一部の寫實として特殊の場合に於ける心理自然の徑行を寫せり。而も人の靈界に觸れて其消息を描き出でんとせるは二者等しく新派小説家たるを失はず。唯惜む、柳浪の小説往々殘酷に流れて不快の感を惹起するを。

觀念小説深刻小説一たび出で、文壇爲に活氣を生じ、讀書社會は其の新奇の色彩に眩して頻りに之を謳歌せり。然れども、少しく思慮ある批評家は潑刺たる新彩の裡に潜める幾多の缺點を見て屢之を難せり。蓋し之等小説の失とすべきは、主に規模小にして觀察概ね主觀に偏し、從て不自然病的に陥る事多きに在り。是を以て一時の革命的現象として心理的傾向を小説界に残しつゝも、漸次勢力を文壇に失へり。

吾人は叙述の順序として當時續々起りし心理小説の新進作家を擧げ、觀念小説悲惨小説以外如何なる發展をなし、かを論すべき場合に立向へり。されど上述三作家の作風も亦之と同時に多少の推移發展をなせるを以て、便宜上暫く他を差

措いて三作家其後の作を見ん。

眉山が裏表以後の作に在りては、二十九年作「松風」翌年作「臙富士」と「絃聲」と稍見るに足る。「松風」は詩人は狂に類すといふ思想を體現せる者と見るべく、「臙富士」は葛藤ある戀愛と悲慘なる運命とを叙して、女子心理状態の一方面を描き、「絃聲」は人心の奥妙を寫すに夜半おのづから起る絃聲を以てせる幽玄の作なり。是等の作、聲譽固より前年の作に及はずと雖、觀念小説の矯激なくして心理小説の自然的なる分子著しく加はり、作風の推移鮮少に非ず。唯其の筆力未だ眉山の名を高うするに足らざるを恨となす。

鏡花は怪奇に過ぐるゝ人情に遠きとの故を以て、一時評壇の批難を受け、爲に二十九年の主たる作「一の巻」より「六の巻」に亘る長篇を「文藝俱樂部」に掲げし時も、苦心の作なるに係らず、世の視聽を惹く事少かりき。然れども鏡花の鏡花たる所は、幽玄神秘の詩的風韻に在りて寫實的筆力の精細に存せず。鬼才益幻恠を逞うして「龍潭譚」となり、「照葉狂言」となり、「風流蝶花形」となり、「化鳥」となり、「清心庵」となり、「髯題目」となり、三十一年に入りて更に「辰巳巷談」「笈草紙」「烏物語」等となり、一方より性に迷ひ

情に悖るゝの貶評、邪路に入れりとの警策を受けなから、兎に角才筆斥くべからざる者ありき。

「龍潭譚」は薄暮一幼童の魔に魅せられて夢幻に入るを描き、「風流蝶花形」は恠蝶を材として遊女の咀死を寫し、共に凄婉の致に富む。「化鳥」は落魄の佳人半狂して夫の形見の一塊肉を抱き、世を恨み人を罵りて己れ獨り天女なりと言ふに至れる悲痛の物語、「清心庵」は貴人に嫁せし美女が幼馴染の少年に邂逅して其零落に同情し、遂に相共に一草蘆に止りて其家に歸らずといふ奇矯の筋、共に幽玄の詩趣を認むべし。「髯題目」と「辰巳巷談」とは、一は藝人の末路、他は女郎の末路を描きて、嶄新又凄涼、烏物語は眞宗寺院の内部を寫して恠奇なる人物性格を集め、幽玄蒼涼人をして悚然たらしむ。而して作家か是等の趣向を筆にするや、獨得の省筆法を以て含蓄餘韻あらん事を求め、隱約の消息を讀者の想像に一任す。是を以て彼の小説を讀むや、先づ神秘的の想髓と脚色とに魅せられ、文字の恠奇、詞章の凄愴とは之を助けて恰も幽界に赴くか如き思あらしめ、次て此の省筆に遭ふや、益其の想像を逞うして夢幻の恠境に走せしめらる。蓋し鏡花は人情世態の機微を寫す作家に非ずし

て、神秘界の消息を穿たんとする作家なり。彼れの立脚地は正に茲に在りといふへし。

然れども斯る特色を發揮して渾成の域に至らんには非常の修養を要す。鏡花の筆力惜むらくは未だ圓熟せず、堂に上りて未だ室に入らず。其の人物と事件とは、一面に於て現實を超て幽性の眈に入ると共に、他面に於て未だ超自然の神秘界に觸れず、徒に結構の不可思議と詞章の幽玄とを弄して思想の神秘を装はんとす。故に形式に於て多少の成功を見ると雖、内容に於て意外の空虚に驚く。彼の讀者を魅する所以の者は主として脚色の不可思議なるによりて催起せらるゝ探偵的の好奇心と、詩味津津たる描寫の往々幽玄の高調に達する箇處あるか爲に惹起せらるゝ感情の昂上との二者に在るべし。思ふに鏡花の作、全體としては散漫の失あると共に、局部に於て緊密周匝、及ふべからざる者あり。是に於てか作者の名復び揚り、模倣する者少からず。盛名當年の如ならずとするも、筆力の發展決して尠に非ず。又以て後進作家の冠冕たるを失はず。

悲惨小説の名家柳浪は、其の深刻の筆鋒を以て心中物を作り初めぬ。二十九年

「河内屋」

『文藝俱樂部』に出でし「今戸心中」『新小説』に出でし「河内屋」『小説六佳選』に出でし「淺瀬の波」の如き是なり。皆情海に浮沈する男女の複雑なる關係と葛藤ある戀愛とを描き、結ぶに悲惨なる情死の現象を以てし、即ち元祿の昔、巢林子の靈筆に詩化せられし心中を取り來りて一篇の主眼となし、之に戯曲的結構と心理の解剖とを経緯せりき。就中「河内屋」は當年の傑作にして、所有柳浪の長所を集めたりと稱せらる。げに寫實小説心理小説在りてより此作程人情世態の自然なる現象を描ける者少く、人物の氣稟性質に應じ、其の境遇の上に凡百の色彩を與ふる狀況も明瞭に描かれ、特に對話の如きは作者獨特の筆力其巧妙を極む。げに此作は實に柳浪をして名を當代に高からしめしのみならず、明治の文壇に重きを爲すに至らしめし傑作なり。

爾來柳浪は「信濃屋」「段々染」「異り種」等、創作少からず、皆深刻の觀察を恣にし、陰森の氣に滿つ。げに柳浪獨得の壇場は即ち人の思ひ至らぬ一種疾痛すべき人生問題を捉へ、一種深刻なる詩題を自然界より擇み出して、之を讀者に提供する手腕に在り。此の特質は「殘菊」以來の者にして、慘憺の境遇と悲痛の運命とに翻弄せらるゝ

情的人物を描いて其の心裡の苦悶を叙する所、人の腸を九回せしむ。唯描寫の筆力惜むらくは之に伴はず。對話の巧にして隙なき、當代を曠うするに係らず、心情流動の迹を寫すや、往々説明の疎筆を以て、叙し去らんとす。讀者か斯る文章を讀みて、尙無限の妙味と一種の魔力とを感ずるは、詩題結構其の物が極めて奇抜にして、讀者の想像をして文筆の形似を脱して直に事象の中心に突入せしむるか故なり。彼の長所は結構の戲曲的發展に在ると共に、對話を以て始終すべき戲曲的形體に在り。此點に於て三十年『太陽』に掲げし『畜生腹』の如きは最よく作者の特色を現せる者といふべし。『畜生腹』は『河内屋』と共に柳浪一代の傑作にして、『畜生腹』の一婦人苦惱の餘り、惡婆の勸誘に應じ一兒を暗に送りてより、悔恨と恐怖とに身を悶わ心を勞し、夫の疑惑と惡婆の強迫とに挟まれて、懊惱憂苦、遂に夫婦の間長へに疎隔するに至りし始末を寫し、通篇讀者の感興を緊張して一點の弛みを與へず、凄慘の氣人に迫りて卒讀に堪へ難し。作者嘗て曰く、深夜燈下に非ざれば小説の作をなす能はずと。其の能く凄婉なる脚色と筆致とを得來るは、孤燈暗影の下に思を凝せばか。然れども事利あれば必ず弊を伴ふ。柳浪の如きも往々慘酷に過

ぎ發忍に流れ、刺激強烈に過ぎて間々不快の感を起す。此の傾向は彼を驅りてかの精神上肉體上の不具者を寫さしめ、然らざるも下等の人物社會に想を構へ、延て殺人自殺心中等、衝動の強烈なる結果を取らしめたり。之を以て彼の作には詩想の高尙脱俗なる者なく、寫す所の戀愛概ね汚れたり。かの情死の如きは愛情發動の最美しき者なるも、之を狹斜の巷に求めんは、品位あり見識ある詩人の爲すべき事に非ず。階級の嚴制ありし昔に在りては、人情の自由にして自然なる活動を現じ、複雑にして曲折ある戀愛を構成すへきは、獨り楊臺柳巷の間に在りしを以て詩人の着想亦此の地に向ひし事争ふべからずと雖、明治の新天地に入りて尙且つ遊女漂客に非されば戀愛を語るに足らずとは言ひ難し。

同年の作の可なる者には、尙あに『青大將』七騎落あり。手腕漸く老熟して強て悲慘を求めず。作風漸く中正に赴き、歩一步自然派の領域に近きつゝあり。三十年『羽拔鳥』、『新著月刊』、『女仕入』、『新小説』等を出すに及んで益此の步趨を取り、前者は從來の悲慘小説に比して、結構性格の自然なる、結末の光明的なる點に於て大なる差異を現し、後者は多少悲慘小説當年の面影を存するも、心理自然の徑行を描いて

一系亂れず、好箇戲曲的發展をなせり。此の自然派的心理小説は、當時の小説界を風靡せる者にして、柳浪實に此の間に重きをなし、多作縦横、彫琢を用ゐずして直ちに稿を脱する所、亦異才なりといふべし。

斯くの如く新潮流の擴布に最力ありし三子者の作風は、一時極端に走りて其の反動を受くるに至りしかば、翻つて多少の變更推移を其の間になし、概ね中正折衷の風に赴けり。獨り鏡花は自然派的寫實を離れて幻恠の境に入りしも、眉山柳浪特に柳浪は其の心理小説益自然的となり、比年大に奮ふ。而して三子者皆明治寫實小説の祖門たる硯友社に出でしを見れば、斯壇の進歩に對する該社の因縁蓋し淺からず。況んや江見水蔭大に振ひ、小栗風葉新に起りて之に貢獻する所ありしをや。此の時に方りて後進作家踵を接して起り、文壇之を歡迎するの聲高く、二十年創刊の『新小説』『世界の日本』『翌年創刊の』『新著月刊』等、皆之を標榜せり。既に新進作家あり。乃ち之に對して從來の作家を先進作家又は老大家と呼び、二者是非の論喧しく、反動又反動、後進奇峭の氣は先進老熟の風に宥和せられて、極端に奔逸する事漸次少かりき。此の先後新舊融和の潮流は、夙く女作家一葉に萌し、早稻田專

門學校出身の諸作家に至りて其の勢を逞うせり。以下序次を追うて是等新進作家を叙すべし。

二 心理小説

觀念小説深刻小説の天下を風靡するに方り、筆は露伴を學びて氣骨ある西鶴風を取り、想は心理的主觀的の最新思潮に出てたる一新作家の、忽焉として文壇に現れ、佳作連出、盛名一時に世に布けるありき。樋口一葉女史是なり。一葉は東京の人、二十五年始めて筆を小説に執り、爾來二十九年、其の病没に至るまで文壇に於ける生命僅に四歳、而も其の間作る處二十餘篇皆傳ふるに足る。没後蒐輯發刊せられし『一葉全集』に就て見るに、其の處女作は『闇櫻』にして、二十五年の中に得たりし短篇總て七種ありと雖、世に公にせられしは『都の花』に出でし『埋れ木』などや嚆矢なるべき。其後『文學界』『文藝俱樂部』等に掲げし者數篇あるも未だ作家の名を高うするに至らざりしが、二十八年一代の傑作『たけくらべ』『文學界』に出で、續いて『行く雲』『太陽』に、『濁江』『文藝俱樂部』に、『十三夜』『閨秀小説』に出で、翌年『わかれ道』『國民の友』に、『わかれ』から『文藝俱樂部』に出づるに及び、才筆忽文壇を動かすに至りぬ。

「たけくらべ」は楊臺近き大音寺前、一體の風俗餘所と變りて少年少女のませかた恐しき市井に人となり、春は櫻の賑ひ秋は仁和賀の折々に、迭にくらべ來し振分髪の間にも情意氣地戀無常種々の世相の幼きながらに見らるべき情味ある舞臺に筆を着け、全盛の華魁を姉に持てる十四の少女美登利を主人公となし、界限種々の少年少女を之に配し、以て美登利の快活勝氣なる性格を彫り浮め、此の如き氣象者のいつか物恥かしく人なつかしくなるに至れる心理變化の微妙を躍動せしめたり。

「濁江」は塲末新開地の銘酒屋菊の井の出女お力が嘘のありたけ串戯に其の日を送る中、怨の刃にかゝりてお寺の山の人魂と化するに至りし筋を叙し、遺傳と境遇と閱歷と相倚りて成る人生の複雑なる徑行を描きて筆力最深刻、平和快活の大海の下奔激悲惨の暗流あるを示し、絃歌嬉笑の裡悲壯の涙の潜むを寫して筆鋒熱烈を極む。「十三夜」は貧乏士族の娘お關が夫の虐待に堪へ兼ねて夜私に親里に趣きしに、殘し置きし一子の愛やら物堅き父か訓戒やらに思ひ返して歸る途中、十三夜の月影に、處女なりし昔思をかけたたりし男の、車夫とまでなり下りしに遇ひ、浮世に辛きは一人と思ふなごて相別れ去るといふ筋、憂きは互の世に思ふ事多き世相の一

部を描破して凄婉痛惻人を動かす。其の他「行く雲」別れ道「われから」等、皆夫々の人情の機微に觸れ、世相の凄慘を表せり。斯くの如くにして一葉の名は文壇賞讃の中心となり、或は誠の詩人といふ稱を贈るを惜まずと言ひ、或は當今の小説界は一葉時代なりと呼ぶに至りき。かゝる過大の讚美は勿論才華一時に煥發せる強烈の光彩に眩惑して冷靜なる鑒識を誤りしに出でしならめど、亦是れ從來觀念小説悲惨小説の奇恠慘酷に嫌惡の情を生じたりし時に際し、比較的自然温藉にして而も意義の深刻なるを失はざる新小説を得たりしに因らすんばあらず。尙其の全集に就きて觀察せん。

一葉の見たる社會は、冷酷無情個人の發達を抑壓する意地惡の者なりき。まゝならぬ愛世とかこつは一葉の社會觀よりすればむしろ穩和に過ぐ。社會は個人と對立して屈せざる者に非ずして、個人の上に駕して之を埋没せんとする者なり。「行雲」の中に「三葉の新芽に雪霜の降りかゝりて是でも伸びるか」と押へるやうな仕方と言へるは正に社會か個人に對する態度を説けるなり。社會果して斯の如しとすれば、此の間に生を享けし者、醉生夢死の徒に非ざるよりは如何で平穩無事なる

べき。苟も一節あらん者誰か社會の冷酷無情に萬斛の憤涙を濺ぎ、之に抗し之に逆ひ、當つて摧けさらん。一葉の小説に於ける人物は即ち是なりけり。

斯る性格を以てこの意地悪の社會に處せんには忽ち起るは衝突なり、葛藤なり、熱涙なり。續いて起るは悲むべき大破壊、恐るべき大破壊なり。然らば則之に繼て來るべき結末は何ぞや。正に是れ一葉の小説の主眼とする所、全集二十餘篇は即ち此の間の消息を描かんと試みたるに外ならず。思ふに古來の文學にして此の消息に觸るゝ者、概ね自殺若くは遁世を以て其の結末となせり。然れども是等は一葉の小説の結末たらんには餘りに淺薄、餘りに古風なり。深刻の思潮文界に横溢せし當時に在りて斯る陳腐なる人生觀の容れらるべくもあらず。是に於てか一種沈痛なる人生觀を生じ、萬斛の憤涙を揮ひ盡せる後に於ける異常の諦めを生せり。一葉か甚深の同情を以て氣骨ある筆を揮ひしは即ち此の恐ろしき諦めを生ずるに至る消息にして詩人として成功せし所亦茲に在り。而して男女人物の中全幅の同情を傾倒せしは勿論女性に在りとす。蓋し弱きにつれなき冷酷の社會は人の中の最弱き女性に向つて特に其の横暴を逞うす。持つて生れし一ふし

あらん女の涙を揮ひ盡して所有強情我慢に恐しき決心を示すに至るはむしろ憫むべからずや。一葉は即ち是等無告の女性の爲に萬丈の光輝を吐ける者、明治文壇に在りて當代の女性を描く事かくの如く痛切なるあらず。紅葉一派の寫實家か創れる女性の如きは、之に比すれば尙未だ淺薄なるを免れず。

吾人は一葉の小説を通觀して略其の特質を盡しぬ。顧みて之を思ふ、全集二十餘篇悉く同一人生觀の上に立ち、同一性格を描けり。女史の小説は大自然を描かんなが爲に人生の種々相を寫せるに非ずして、一定の人生觀を表現せんか爲に人生の特殊相を寫せるなり。換言すれば各篇其の結構を異にするに係らず、畢竟同一問題を解決すべき實例の蒐集に過ぎず。是を以て主觀の基彩は全作品に亘り、篇中の人物動もすれば作者其人の影子たらんとし、而も其影子や、作者の人生觀の明晰直截なるだけ、所謂寫實派の其れに比して甚しく明瞭著大なり。故に其の筆に上る所、狹隘なる社會に限らるゝ代りに、描寫の深き、奥底に徹し、單調なる性格に限らるる代りに、刻劃の生采、躍動の妙を極む。此の點に於て一葉の思想筆意は所謂深刻小説に似て、其の奇怪と慘酷と無く、却て同情の人を動す者あり。且夫れ一葉

の自然を重んじ背實を忌む事必しも所謂寫實家に劣らず。女史は即ち寫實家の心を以て深刻小説を作る者、從來の寫實派と觀念小説一派との最善き調和家析衷者なり。

一葉は小説に師事する所なかりしかど、私淑せるは蓋し露伴に在りき。人物の性格の如きは頗る露伴のに類似し、特に「埋木」の主人公の如きは全く露伴固有の人物なり。従て文章亦露伴を學べる者少からず。蓋し一葉の文、初め西鶴を師としたりしが、西鶴を脱して一家をなせる露伴を見るに及び、更に之に私淑するに至りしなり。「埋木」の如きは元祿の大家を模倣せる跡没すべからざると共に、頗る露伴の初期の文章に類す。然れども「濁江十三夜」に至つては既に獨立して一新體を創出し、精練にして才氣縱橫、雅俗の言語句法を驅使するの妙一世に秀づ。特に「たけくらべ」の一篇は、文情清婉、文氣老熟、洵に渾成の名什たり。且つ從來等閑視せられし小説中の敘景分子著しく増加し、特に「行雲」の末段「たけくらべ」十回に於ける情景雙敘の一節の如きは、清新簡淨にして趣味溢るゝか如し。不幸にして詩想文章並に成熟の境に至らずして病に伏し、一臥遂に立たざりき。年僅かに二十五歳。大橋

『一葉全集』

乙羽齋藤綠雨等『一葉全集』を編纂發行し、以て紀念となす。

一葉文壇に出てし比、女流文學者の筆を小説に染むる者一時に輩出しぬ。從來女流文學とし言へば和歌に限られたりしが、文運の興隆以來往々小説翻譯新體詩等に及べり。三宅花圃の小説に於ける、若松賤子、小金井喜美子の翻譯に於ける、夙に才筆の目ありしが、是に至りて一葉を出し、北田薄氷を出し、田澤稻舟を出し、大塚楠緒子を出し、二十八年末遂に一部『閨秀小説』の出版を見るに至れり。收むる所の作家は上掲數人を合せて總て十二、就中花圃は曩に「露」のよすがを『太陽』に、今は「萩桔梗」を『閨秀小説』に出し、共に無垢の娘心、可憐なる處女の情を寫して温藉の姿致を極む。作者は當時に於ても、又其の前後に於ても、作品多からずと雖、さすが女流小説家の先輩として、老練の筆ぶり一葉と共に當代閨秀の首班たるに足り、一葉の悲觀的厭世的なるに對し、樂觀的光明的の觀察に富めり。げに二人の特質は好箇の對照にして、一葉の社會の缺陷を指摘するや秋霜烈日の嚴しさを以て之を冷罵し、花圃は其の缺陷を認むるも、其の裡又一點の調和を求め、春風滋雨の温さを以て之を謳歌せんとす。一は人生の暗側を寫し、他は其の明側を描き、一は文章の奇拔を以

三宅花圃

て勝り、他は其の温和を以て優る。故に二者の觀たる社會は等しく不調和缺陷の集合なりきと雖、人物の性格は大に差あり、從て個人對社會の葛藤は、其の終結に於て甚しき相異あり。「露のよすが」の露子姫、何一つ不足なき身ながら與はらぬ容色に赤繩結び難く、千行の紅涙強て抑へて唯醜草の疾く枯れよと祈るは好箇人生の悲劇一葉をして材を此に取らしめば、正に一個世のすね者を描き出でしならん。而も花圃の露子姫は無情なる子爵の筆意に倣うて靜に富士を畫く餘裕と和平とあり、末段一點の光明を示して慰藉する所少からず。「萩桔梗」の浪子亦失戀の恨を懷いて傷まず狂はず、曠昔一時の夢を忘れて和平の局を結び。斯くの如く二作家の人生觀は根底より異なりと雖、各人生の一面を寫して雙璧の價値ありといふべし。薄氷と稻舟とは之に次く作家にして、前者の作は「鬼千疋」あり「黒眼鏡」等あり。結構着想共に人生の悲觀に出で、而も這裡女作家の温藉を見る。後者は「白薔薇」等の作あり。筆熱せずと雖、才氣おのづから現る。山田美妙齋に配して二三の合作ありしが、二十九年一葉に先ちて没しぬ。「閨秀小説」に漏れし作家の中、田中夕風は亦有望の名ありき。

北田薄氷

田澤稻舟

心理描寫の潮流は、一方に於て江見水蔭と田山花袋との散文詩的小説を出しぬ。二人は共に深刻なる寫實、高遠なる理想の筆を缺けりと雖、其代りに津々たる詩趣に富み、縹緲たる詩韻を藏する事群作家に超ね、鏡花の怪奇柳浪の悲惨一葉の沈痛以外、別に一異彩を新作家の間に放てり。

江見水蔭

水蔭は漣山人と同じく獨乙協會學校に出で、硯友社初期以來の社中たり。所作概ね小説なれども夙に脚本に指を染め、且つ艶筆を鳴れる社中、比較的奇骨ある文章を屬し、同人間の異色と稱せらる。早く「中央新聞」に入りて小説をもつし、戦争酣なるや數多の軍事短篇小説を出しぬ。然れども第二期に在りては特に注目すべき作なかりしが、二十八短篇集「水車」を刊し、「女房殺し」を「文藝俱樂部」に出し、二十九年「炭焼の煙」「泥水清水」「絶壁」等を出すに及び、詩想の頗る見べき者ありて忽ち文壇の注目を惹き、就中「水車」の中なる「兜の星影」「斷橋」「温泉」「狂詩人」等、及「女房殺し」「炭焼の煙」の二篇は其の傑作と稱せられたり。而して彼の文章は多様多變或は雅俗折衷、或は言文一致或は對話體或は獨語體、行く處として可ならざるなしと雖、其の長所は蓋し言文一致の説話體に在るべし。

水蔭の小説は、世相を描き人情を寫す小説としては成功の域に遠き者なりと雖、之を詩篇として見る時は、優に散文詩の境に入る。彼は硯友社中獨り理想小説を以て任じ、從て其の詩題は多く理想界に生活する人物、即ち藝術家に關し、然らざるも之に類似せる抒情詩的題目を選べり。彼の好める人物は畫師詩人巡禮漁夫山樵旅客等にして、從て都門塵俗の風よりもむしろ山海林野の趣を愛す。「炭焼の烟」に於ける炭焼男の愚直にして一圖なる性格及行爲、「絶壁」の主人公たる詩人が身世の不遇と戀愛の失敗との爲に破壊し盡されたる半生の生活の如き、共に作者が着想の傾向を覗ふに足る好例といふべし。「女房殺し」は當時一葉の「濁江」と並稱せられ、可憐の賤女に同情して所謂社會の罪を鳴らし、人生の迂餘曲折を盡して深刻小説の畛域に入り、文章亦精練にして緊張せる所、以て當代傑作の一に數ふべきも、是實に水蔭作中の異色にして、以て他の篇を推すべからず。彼は飽くまで理想界に遊ぶ人物を描くを特長となす。而も其の藝術家を描くや、必しも露伴と趣を一にせず。露伴の藝術家は一向専念にして、意志強健道念高潔なり。水蔭のは之に反し、信念堅固ならずして世間の毀譽に惑ひ、道念確固ならずして或は墮落の淵に陥

る。斯の如きは水蔭が理想として描き出し、詩人に非ずして、正に當時の詩人に模本を取りて其の憫むべき運命を寫さんと試みしなるべしと雖、要するに理想派の小説家として未だ至らざる所少からざるなり。

翻つて之を詞藻の方面より見るに水蔭は詩人としても亦未だ至れる者に非ず。其の文辭精練を缺き其章句推敲を缺き、速筆一過復顧ざる趣あり。「女房殺し」さすがに清婉の氣難すべき所少しと雖、其の他の諸什可惜詩想を傳ふるに足るべき十分の詩筆なきを憾となす。

田山花袋

花袋は二十七年頃に現はれし新進にして、二十八年作「山家水」「水車小屋」「小桃源」「翌年の「無名草」「忘れ水」等、皆幽婉純清、無韻の抒情詩なり。描く所概ね青春の純潔なる戀愛にして、之を織りなすに優美なる山色水光を以てし、之を行るに詩趣饒き雅俗折衷體の文章を以てし、情景錯綜する所限なき韻致を含む。花袋の戀を描くや、其の成立の因縁順序を細寫せんとはせず。直に成立以後の心狀に及び、思内に溢れて而も言ひがてにする年少初戀の情、又は獨り片戀を胸に懷きて人知れず煩悶する狀を寫せり。之を嵯峨の屋か描ける青春の戀に比するに、其の純潔なる點相似た

り。其の煩悶の態相似たり。其の人物の性情相似たり。然れども、情感の熱烈に於ては花袋到底嵯峨の屋に及はざると共に、着想の自然にして描寫の妥當なるは花袋固より嵯峨の屋に超えたり。蓋し花袋に取るべき所は一篇を掩ふ詩的情緒に在り。之を外にしては彼の小説は稚氣滿幅、脚色單純にして篇章概ね短く、従つて小宇宙としての小説たるに甚遠し。「忘れ水」の如きは、彼の所有特色を代表すべき好作例といふべし。要するに花袋の作より大なる教訓を得、深き戀愛を味ふ事難しと雖、清く美しき戀を味うて青春の慰藉となすに足るべし。

小栗風葉

硯友社の後進作家として鏡花に接踵して起りし者を小栗風葉となす。風葉は紅葉の門人にして、二十九年「寢白粉」「龜甲鶴」を出すに及んで、忽ち評壇の注目を惹きぬ。「寢白粉」は人情自然の徑行を描いて着筆亦輕妙、紅葉の面影を模し得て才藻見るべき者あり。唯着想奇矯、強て人生特殊の一方面を描き出でんとせしが爲め、一時評壇の批難を招きたりき。思ふに斯かる紛糾せる逆境の戀を描きしは、從來戀愛の單調を破らんか爲に葛藤烈しき者を求めんとしたると、葛藤を個人と人倫との衝突に取りて悲劇の効果を大ならしめんと企てたるに由る。かくの如き

は、企劃必しも非ならずと雖、取材の奇を弄するに過ぐるを誠むべしとなす。「龜甲鶴」の着想かゝる弊なくして、詩趣に富み、才氣を見るべし。然れども彼の發展は尙未來に在り、後章に説くべし。

紅葉門下にして當時世に出でし者には、尙柳川春葉、徳田秋聲等ありと雖、未だ特に説くべき者なし。翻つて硯友社作家の全體に就きて其作風を思ふに、概ね逸氣奔放、所有試験企劃を敢行して常に小説界新潮の先頭となりき。かの中和自然なる折衷的手腕は遂に早稻田派作家に俟たざるべからざりき。

新作家勃興の氣運熱するや、坪内逍遙の指導せる早稻田専門學校文學部は、多數の創作家を輩出せり。就中小説の作家としては後藤宙外、水谷不倒、島村抱月、三木天遊、繁野天來、伊原青々園等あり。「早稻田文學」を始め「文藝俱樂部」「新小説」等に其の作を掲げ、遂に三十年自家の經營に成る小説雜誌「新著月刊」を發刊するに至り、新進の銳氣旺盛なる事、恰も前期初頭に於ける硯友社の如くなりき。是に於てか評壇此の二者を對比論評する者多く、所謂早稻田派は小説界に於ける一大勢力となり、硯友社と角逐して新進の文壇を二分するの觀ありき。且彼等は概ね相當の學

識素養ありて、一方に於て批評家たる能力を有したりければ、硯友社の才人等か黙々と語らざるに反し『早稻田文學』を中堅として諸種の刊行物に、逍遙流の記實的論評又は精到平正の議論を掲げ、以て重きを評壇になせり。

後藤宙外

「ありの
すさび」

批評家としての彼等を論せんは暫く措き、作家としての方面より見れば、彼等の先頭は宙外不倒の二人なるべし宙外の現れしは蓋し二十八年作「ありのすさび」に始る。此の小説は翌年『青年小説』に收められ、失敗落魄の實業家、家庭の圓滿を破りて懊惱遂に發狂し、妻亦煩悶病を發して死すといふ筋を叙し、煩瑣に流れ説明は過ぐるの弊ありと雖、人情分拆の筆機微に入り、心理變化の描寫精緻を極む。次で「闇のうづゝ」を『新小説』に掲げぬ。教育もなく節操も辨へぬ勝氣一方の孤女が、零落せる家道を恢復せんとする努力と、之か手段を否認する世間の道德との衝突の爲に蹉跎相次ぎ、遂に飄然志を世に絶ち山に遁るといふを脚色となし、心理の描寫前者に劣る所あるも文章精練情景並び至れりと稱せらる。次で三十一年「思ひざめ」
「亂れ心」「白露」等の佳作を出し、多く心理の精微なる消息に描き入る。

宙外の作概して平正淡雅、春野分け行く流水の如し。心理の機微を捉へんとし

て、好んで神経質の人物を描き、又好んで自殺や情死などの結末を取る事、或は柳浪の如く、或は鏡花の如くなるも、心理を描いては柳浪一葉の如く刻劃ならず。神経質の人物を寫しては鏡花柳浪の如く甚しからず。自殺情死を筆にしては柳浪の如く悲惨ならず。然れども人情の委曲を盡して精緻老熟群を抜き、所謂心理小説の陣頭に立ちて一葉柳浪に接踵し、新作家としては、鏡花の觀念小説と共に斯界の二潮流を代表せり。唯其の缺點は、描寫精細に過ぎて煩瑣冗漫に流るゝに在り。蓋し宙外一方に於ては戲謔滑稽と注意周到との資質を逍遙より受け、他の一方に於ては深刻悲惨と葛藤煩悶との趣味を新思潮より受け、二者融合して此の折衷の風を生せしなり。故に彼れの作は客觀的寫實の門より出で、而も純然たる其の者ならず。むしろ主觀的心理的ならんとす。是彼が特質の第一なり。次に宙外の特質と認むべきは田園的色彩と家庭的趣味と是なり。田園的色彩は當時の小説にはむしろ缺乏せる處、知名の作家概ね東京の人たるを以て、取材の範圍都會を出でず。會々田園を寫すも觀察皮相に止まりて情景眞に入らず。宙外は此の點に於て確に孤尊の價あり。此の事實に附帶して考ふべきは叙景の筆力なり。そ

も小説中の自然の描寫は、逍遙紅葉等より甚しく疎外せられ、露伴一葉に至りて稍注目せられしも未だ宙外入神の筆に及はず。「ありのすさび」の萩の湖の曉色を叙せる條「關のうつゝ」の末段野中の荒祠を寫せるあたり妙趣眞に掬すべし。家庭的趣味の饒多なるは彼の特徴として總ての作に亘り、從て教訓的なる點少からず。思ふに彼や青年新進と稱せらるゝも、年齢既に長ず。其作の平淡にして老熟せる、當に其の資質と教育とのみに因るに非ざるか如し。

水谷不倒

不倒の現れしは少しく後れたり。二十九年「枯野の眞葛」等を『早稻田文學』に載せ、『新小説』發刊に際し、第一號に「鐮刀」「薄唇」二篇を掲ぐるに及び、作家としての目定まり、續て『新著月刊』等に數篇の作品を掲げたり。總して之を言へば、其の想に神韻なく、其の筆に精彩なく、爲に往々陳腐平凡などの酷評を受くと雖、平淡自然の境地に一脈人生の機微を寓せる所亦趣なしとせず。蓋し不倒素と江戸文學の研鑽家にして、深く巢林子八文字屋に私淑し、逍遙よりも長せる齒を以て始めて小説壇に現はれ、後進作家なれども、もはや青年に非ず。故に其の趣向往々江戸文學の面影を存し、「鐮刀」の如きは多少近松の某戯曲を想起せらるゝ所あり。其の文章の深刻なる

島村抱月

事象を寫すに適せずして、むしろ輕快諧謔の作に宜しきは、亦私淑する所に出づるか。かの青春激越の調に乏しきか如きは、思ふに宙外と轍を同うする者なるべし。

二子に踵を接して起りしを抱月となす。三十年作「女をと浪」翌年作「月暈日暈」共に哀深き夫婦心中の物語なり。着想筆力特に目を側てしむる者なしと雖、布置整然、細心なる注意全篇に行き亘りて弛廢する所なきを取るべしとなす。同年の「墨繪草紙」も亦此の特長を發揮して佳作ならずとせず。蓋し抱月は同門作家中最學識ある者、特に美學及美辭學を以て本領となし、最理論的の頭腦を有し、從て批評家としては夙に儕輩に抜んで、穩健中正を以て名あり。是を以て彼か創作おのづから此事實を反映し、甚しき光なき代りに甚しき瑕なく、哀れに情深き所あれど、奔放激越の趣なく、唯其の結構布置の劃然として整へるに驚く。

天遊と天來とはむしろ新體詩家として知られ、小説の作は甚多からずと雖、共に詩的空想に富めるを珍となす。青々園は滑稽の作に富む。而して滑稽の存する所、言語形式の皮相に非ずして、意義内容の裡に立入り、おのづから大人を笑はしむるに足り、文章亦圓熟せり。

三木天遊
紫野天來
伊原青々
園

要するに彼等の創作は、概ね着想穩健、筆意平淡にして、其の長所は細心周到なるに在り。短所は熱烈なる情緒を缺くに在り。之を硯友社の新作家に比するに、同じく寫實の海に生ひ立ち、新潮流に養はれし者なから、硯友社派は宛も逆捲く瀧津瀬の如く、逸氣奔放想像の馳するに従ひ、情熱の之くに任すの趣あり。早稻田派は淀みなき野川水の如く、温雅自然の姿態を盡さんとす。而も一身を創作に献じ、終生小説家として立たんとするに至つては、早稻田派は遂に硯友派に一步を輸せざるべからず。思ふに後者は批評家たり學者たる能はざる人々なるに反し、前者は兩方面を兼ねるを以て、會一方に專なるを得ざりしか。果然抱月美學者となり、宙外『新小説』の批評家となり、不倒江戸時代文學史家となり、青々園劇評家となり、他諸人亦漸く創作壇に遠かりぬ。

新進の心理小説家は略之を説き盡しぬ。乃ち去りて先進作家の心理小説を述べんとするに當り、新進中の別味たる小杉天外の諷刺小説を附記せんとす。而も天外を説かんに、先づ其の前續者にして且師たる綠雨より叙ふるを便となす。

前期の批評家諷刺家として、『小説評註』荊鞭の筆者として其の名高かりし正真正

寄藤綠雨

太夫は、此の期に入りて綠雨の名を以て諷刺の才を小説に試みたり。二十八年『國民の友』に出し、『靚面』翌年『太陽』に出し、『雨蛙』の如き即是なり。前者は意志薄弱の書生、世間の所謂女房等を諷刺し、後者は自惚と沒常識との化身ともいふべき所謂文學者輩を嘲罵せる者にして、諷世嘲俗、冷笑骨を穿ち、熱罵髓に入り、筆鋒銳利、警句應酬に暇あらず、其の文章も亦奇絶妙絶、特に前者の如きは一氣奔放の走り書、文體修辭共に珍奇類なく、而も辭句銑練、當代に卓越せり。げに此の二篇は、綠雨の特質を最よく表彰せる者にして、諷刺小説中の珍品たり。

小杉天外

天外は綠雨の門に入り、鬼才が諷諧の筆を傳へて夙に文壇に現はれたり。二十四年『國會』新聞に『改良若旦那』の短篇を掲げし以來、二十八年『奇病』二十九年『卒都婆記』改良若殿三十年『ひとり者』珈琲店其他數多の創作を出し、宙外等と共に新作家の名を恣にせり。就中『奇病』は國會議員を刺り、『卒都婆記』は所謂社會主義論者を諷し、『改良若殿』は痴愚の華族を中心として世上百般の俗物を罵倒し、總て筆路輕妙、諷刺奇峭にして共に當代の佳作たり。

げに天外の作は深刻沈痛の域に遠く、性格心理の描寫亦其の能に非ず。加ふる

に筆意頗る同情を缺く。然れども從來諷刺といへば魯文一流の淺薄幼稚なる者のみ行はれしに方り、事象を平坦自然の境に取り、人物と社會との所有缺陷に向つて銳利なる諷刺を投する所、靈犀奇警人を魅するあるか如きは、洵に斯壇の進歩といふべし。げに彼か滑稽は、動もすれば審美上何等の價値なき所謂落ちに近からんとす。然れども、從來滑稽といへば、瓜生政和南新二等の如く、強て笑を求め、道化を盡し、以て匹夫匹婦を笑はしむるに過ぎざるに方り、社會や人物を觀察するに常に皮一重の裏に及び、美しく賢しき外觀の裏に潜める汚く愚かなる好笑的材料を求め、之を暴露し來りて乃ち哄然大笑するか如きは、以て識者の顧を解くに足り、多少諷滑の體を得たりといふべし。彼は文才の縦横なると諷刺の奇竦なるとの點に於て、到底綠雨の敵に非ず。然れども天外の筆、綠雨の神經質なるに比して甚靡揚に、綠雨の腥氣毒焰を吹くか如くなるに反して、温藉輕妙の致あり、綠雨の世上一切の者嘲り盡さんとするに反し、専ら諷刺の筆鋒を虚偽と醜陋と愚劣とに向けたり。要するに天外は新文壇寫實の園に生ひ立ちし一種の異草にして、滑稽諷刺の花は此時始めて新粧を凝し出でたりといふべく、綠雨の尙舊文學の面影を存して

過渡の地位に立てるに異なり全く明治の新時代に入れりといふべきなり。

後進作家の擧ぐべき者には尙遲塚麗水、三宅青軒、松居松葉、堀江松華、前田曙山、太田玉若、藤本藤蔭、有本樵水、緒方流水、黒田天外、半井桃水等あり。多少の新作を残せり。

紅葉門下の才筆濟々たるに對し、露伴門下は甚多からず。中谷無涯は二十九年始めて現はれ少しく後れて田村松魚、藤本夕隣の二人現はれ、多少狂熱を帯べる彩筆を揮ひしも、惜いかな、鏡花風葉の如き發展をなさざりき。

三 先進作家の心理小説

曩に後進作家の勃興するや、其の直接の刺戟に勵まされ、又評壇後進を揚げて先進を抑ふる者あるに激せられ、前期に名を爲し、先進作家復び振ひ立てり。而も其の作風大に前期と面目を異にし、悉く心理的寫實小説の新彩を帯びて現れたり、露伴以下紅葉に至るまで、一として然らざるはなし。

『五重塔』以來暫く雌伏したりし露伴は、二十六年『風流微塵藏』の大篇に着手し、初篇『笹舟』を『國會』に掲げ初め、爾來連載二十九年に及び、菊の濱松『獨寐』及『雲の袖』の諸篇を

幸田露伴

出し、無前の大編として文壇の呼び物となりぬ。然れども『微塵藏』は未だ其の局を結ばず、且つ局面廣大事象複雑なれども、既出の分のみを以てすれば各篇唯一二人物の連鎖あるのみにて、全く別の舞臺を現じ、其の間に有機的結合の見るべきなきを以て、大局の歸趣茫として知るべからず。唯其の部分的に現れたる巧妙なる描寫に至りては、さすがに天來の趣あり、人事の表裏を寫して痛切に、人情の秘奥を描破して靈犀なりといふべし。

此の篇出で、褒貶の聲交々起りたりと雖、大體に於て『五重塔』以來、現實の觀察に入りて一段の進歩をなせりといふに一致せるか如し。思ふに露伴の作風は明に一變せり。然れども彼が本領たる散文抒情詩の幽玄を離れて現實描寫の精緻に入りし者、果して彼れか爲に慶すべきか。之を人物に見るに、人夫れ夫れの性格を描いて躍動の趣あり、心理變化洵に自然的發展の妙を盡せり。然れども是等の人物詮すれば皆同一性格にして、悉く作者自身に粉本を取れる者なるに似たり。彼等は概ね酸いも甘いも噛み分け、人情世態を洞觀するに過ぎ、動もすれば作者の人生觀を時所に應じて述べ出すべき傀儡ならんとす。されば人生の奧秘人情の

機微、多くは説明に過ぎて讀者想像の餘地を奪ふ。作中人物が滔々數千言、人情哲學を講ずる所、此の作者に非されは望む事能はさるも、其の間又讀者をして嫌厭せしむる者なきに非ず。蓋し此の篇或は作者胸中の蘊蓄を披瀝せる人生哲學たるを得べしと雖、美術品としての成功は、かの抒情詩的高調に達せる『五重塔』等に比して未だ優れりと言ふを得ず。故に本期に於て露伴の露伴たる所以の作を求むべくんば『微塵藏』よりはむしろ『新浦島』を取らんのみ。

「新浦島」は二十八年『國會』に連載せる者にして、浦島傳説の上に想を構へたる一部の抒情詩的小説なり。後纏め十三十五年刊の『露伴遺書』に收む。浦島太郎龍宮に趣きてより、其の家を承けし同次郎の子孫相傳へて百世、明治の聖代に至りて一個俊秀の詩才浦島次郎を生じぬ。少時郷を去りて京に遊び、天成の詩才忽に當世の寵兒となり、邊海の漁子榮華と戀愛とに身を没して郷を忘るゝ事數十年。偶々戀に敗れ榮達に敗れて茲に悵然望郷の念を生じ、飄然として悟れば漁夫の生活なつかしく、二十五歳の壯年復父母の膝下に歸りぬ。歸れば老親世を譲らんとして傳來の玉手箱を渡し、に、異寶奇瑞を現じて父母一夜に登仙せしかば、次郎始めて仙縁

あるを知り、天界俄にゆかしく、九轉の大丹を煉りて仙道得んとの大願を起しぬ。而も仙道成らず、憤りて魔道を修し、一向専念大地震動して遂に通力を得、或は驪山の靈泉に浴し、或は蘭陵の美酒を味ひ、飛行自在の身となりしが、一夜終に化石して静に生死の外にありきといふ。是れ新浦島の梗概なり。通観すれば前半は現實の分子多きを占むるも、後半は全然超絶界に入り、詩情一段昂進して最後の大發揚に至る。此の結構は對獨幣以來作者固有の手法なり。

此の篇の骨子は浦島傳説に唐土神仙譚の附會して構成せられたる悟道の寓話より得來りし者にて、斯道に入るべき三階段を示せる寓話を取りて直に理想的生活に進むべき四階段を表せしに似たり。物質的榮華の生活は清談自然の生活に若かず。清談自然の生活は超絶的神仙の生活に若かさるを説けるは、かの寓意的仙譚なり。學と詩と富と戀とは未だ以て人を解脱せしむるに足らず。一切世間の欲を絶ちて身を一竿に托するも亦然り。凡界を離れて神仙の間に遊ぶも亦然り。生死の外なる寂靜の境に入るに至つて始めて眞の解脱を得べしとなせるは即ち露伴の「新浦島」なり。兩者の間多少傳説の發展あり、形式に大差なきも意義は

全く更新して時代の色彩を帯べり。思ふに浦島傳説は本邦の傳説中最發展せる者の一にして、萬葉集風土記の古より「新浦島」に至るまでの發展は他傳説に見ざる所なり。

之を小説として見るに、其の超絶的なるは遙に從來の作に過ぎ、理想的なるは更に甚し。されど其は現實を超絶せる一場の仙譚的空想に出で、著しく冷靜の調を帯びたり。「五重塔」以前の作を以て之に比するに、彼には人生に執着する熱情あり。此には人生を達觀せる理性あり。現實以外奔放なる空想の行く所を恣にせる態度、兩者其の軌を一にすと雖、通篇の趣味傾向に著しき差あり。此の新傾向は疑もなく「微塵藏」以來の變象にして、篇中各人物の人生觀、人情觀、女性觀、はた社會觀等滔々揮灑し去る所、一に作者か凡百の人事に對する平生の達觀悟入に出でたり。

「新浦島」を以て作者の本色を現はし、者とすれば、二十九年「讀賣」に掲げし「髯男」は彼が作中の異色として注目するに足るべし。「武田勝頼の家臣笠井高英」といへる髯男が覆滅せる主家を擁護せんとする苦衷を描き、義あり情ある甲州武士の面目を發揮せる歴史小説にして、文章瑰麗奔放、「風流佛」以後の名文と稱せられたり。

「髯男」

既に述べしか如く、露伴の作には常に作家の影を宿せり。彼が小説を読む毎に其の人格の這裡に躍動するを覺ゆ。蓋し露伴は江戸兒の粹。覇氣稜々たるに其の又よく物に凝る。而も藝術に對する熱愛未だ嘗て衰ふる事なく、從つて讀書の嗜好極めて高く、其の造詣蘊蓄常に創作に表はる。此の點に於ては其の風尙頗る紅葉と相似たり。然れども露伴は固と深く人生を洞觀し、冥想沈思其の眞諦に觸れんとする人なり。此の性格は彼を驅つて深く佛典に參せしめ、老莊に入らしめ延て悟道の人たらしめんとす。且つ彼は神祕を認め、神仙を究め、佛力を信じ、神籤易卜を拒まず。總て信念の固き道念の高き、當代作家に多く見る能はず。淺薄なる寫實の風天下を吹き荒れる時、獨り高遠なる詩的哲學的理想を小説に寓せたりしは一に此の性格より來る。此の點に於てはいたく紅葉と趣を異にす。且つ露伴の文を行る、逸氣奔放千言立ろに成り、而も絢爛瑰麗の致を極むる事頗る紅葉の遲筆刻劃に反す。彼が作は忠實なる實世間の描寫、乃至奇警深刻なる實社會の觀察に出つるよりも、むしろ人生に對する沈思冥想より來る。されは露伴の如きは、襟仰すべき人にして模倣すべき人に非ず。時流に超然たるべき人にして門下を

養ふべき人に非ず。是れ紅葉門下の多士濟々たるに反し、露伴の門遂に俊髦を見る能はざる所以なり。

山田美妙

言文一致體の主唱者として、『夏木立』、『胡蝶』の作者として、盛名一時に鳴りし美妙齋は、二十四年以來消息を小説壇に立ち、新體詩の作家としてのみ聞えたりしが、此の頃に至り再起つて小説壇に現はれ、前の盛名固とより望むべからすと雖、尙健筆多作、當年の意氣を存し、文界をして此の才人の健在を慶せしめぬ。

二十八年の『お千代』、『鰻旦那』、『翌年の若白髮』は、趣向の平凡なるに係らず、獨得の言文一致、當年の嫌味を脱して、瀟洒圓熟の境に入る。此の三篇は、共に評壇の一大問題たりし狹斜小説にして、寫實の手腕益精妙に、進んで心理の細寫に及べり。此の點に於て美妙亦新潮流の影響を受け、柳浪の深刻なる者なしと雖、穿細或は之に過ぎたり。爾來數篇の歴史小説及狹斜小説を経て、三十年『閻魔地藏』、『可憐狂』を出すに及んで、或は寫實の筆力を以て、或は文章の妙を以て多少文壇を動かし、特に『可憐狂』は、律義一徹の老父が至誠、自墮落の娘を悔悟せしむる筋を描き、評壇佳作の目ありき。げに美妙の作は筆力を以て優る。惜むらくは同情を缺き、小説家として願はし

き熱血と性靈とを具へず。故に筆鋒愈銳利にして觀察愈皮相に走り、描寫益巧にして讀者の肺腑に入る事益少し。好んで狹斜の巷を描き、特殊の通と穿ちとを銜うて脂粉の氣輕佻の風厭ふへき者あるは、彼が第一の缺點にして、所謂内容のいや味は總ての作物に満ちたり。加ふるに當時多作に過ぎしかば、筆漸く荒み、想亦漸く型に入り、好作家遂に唯文章家の名を止めしのみ。

岩谷運

硯友社の小説家にして少年文學に名を得たりし漣山人は、『日本昔噺』『日本御伽噺』『幼年讀本』等を編し、雜誌『幼年世界』『少年世界』等を發行して益其の本領を進むる傍、時に小説を出して特長なる輕快の筆を揮へり。二十八年、小説界の潮流が人生の深刻なる方面に向ふや、山人『昭君怨』を作し、清淨無垢の華族の處女が破産せる父子爵の犠牲となりて高利貸の新平民に嫁く悲惨の運命を寫し、續いて出でし『燒火箸』等も亦現社會に對する諷刺的筆致を見るべし。然れども山人の本色は飽くまで平易圓熟なる文藻を以て無邪氣なる情緒を描くに在り。二十八年『國民の友』に出し、『董日記』の如きは、正に其の代表的作物なるべし。『董日記』は國外の『舞姫』に似て、獨逸留學中の一學生と薄命可憐なる金髮少女との情事に關する詩趣横溢の着想を

自叙日記體にもものせる短篇にして、文情清高、塵俗の氣なく、詞章亦言文一致の妙を盡せり。

前期の寫實小説家にして、文學一轉の今日、多少の述作を出して世人の記憶を新にせる者には、嵯峨の屋、抱一庵、篁村、採菊、思案、忍月、湖處子、三昧、雪後(花瘦)、乙羽等あり。就中嵯峨の屋は例の言文一致益圓熟し、短篇集『文の庫』『古反古』を始め各雜誌に掲げし作少からず。抱一庵は思軒と共に『報知新聞』に在り、魯文學の翻譯に名ありしが、創作に於ても多少の績を残せり。篁村は老練安平の筆致例の如く、三昧は傳奇小説の外世話物に筆を染め、文章は漢文流の奇氣を帯びたり。雪後と乙羽とは硯友社員にして、共に短篇を諸雜誌に掲げ、才筆の譽ありしが不幸にして早世せり。

尾崎紅葉

上來先進作家を列叙して今や一紅葉を餘すのみとなりぬ。紅葉は今期に入りて連りに外國文學の翻譯物を出し、創作に用ゐし圓熟渾成の彩筆を以て之を翻譯に試みたり。之より先、紅葉は『臚舟』『夏小袖』等既に此種の者に指を染めたりしが、二十七年以後に至りて著しく之に傾き、創作却て兩三篇に止まるに至りぬ。即ち二十七年の『隣の女』、二十八年の『不言不語』、二十九年の『冷熱』の如き、當時有名の作は、皆翻譯

案に屬せり。

「不言不語」は紅葉が傑作の一にして、又此等翻案の代表たる者なり。「讀賣」に出づ。新參の小間使環が、目見之の當時より疑團晴れさりし笠原夫人の憔悴煩悶嗟嘆の原因、不言不語の胸中を探求せんと苦慮する筋を経となし、主人の弟民之介が環に對する戀語りを緯となし、遂に事變の偶發より一家に潜める秘密が隱約の間に推測せらるゝに至る始末を環の自叙體に描ける小説にして、一篇の生命は、讀者が此の秘密の伏在せる家庭に對する不安の念と探求の心とを繋いで最後の大破綻に導く所に存す。されば其秘密の闡明せらるゝに及びて感興頓に去るは亦免れ難き缺點なるべし。唯末段夫人が懺悔の爲罪滅しの爲、病兒を救うて自ら犠牲となる所、慘憺たる悲劇的結局なから尙一道の光明を見る。民之介環の情話は素と一挿話に過ぎすと雖、陰森の氣充滿ちたる大筋に對照して、其の凄慘に過ぐるを調攝し、兩々發展步趨を共にして團圓に向ひ、悲劇の終結を彩るに愛の成立を以てするなど、有機的結合の頗る周密なる者あり。然れども、全體の趣向及人物は、到底本邦の者に非ず。又紅葉の筆致に適應せる者に非ず。而も尙多數の愛讀者を

有らしは、其の探偵的趣向の人の好奇心を繋げると、其の文章の銑練完璧に近きとの致す所なり。

然れども文運興隆文學一轉の盛時に際し、紅葉の製作はかゝる翻案物に止まり、然らざるも「四の緒」の如き翻譯物、「片鱗」名曲「クレイソワ」笛吹川等の合作物に過ぎさりしかば、批評家は漸く彼が健在を疑ひ、中には想泉涸れたりとまで罵る者あるに至りぬ。偶々「讀賣」に載せし創作「青葡萄」は、門人某か青葡萄を味うて不測の大病に罹りし一夜の出來事を叙へしに過ぎさりしかば、悲觀的批評益其の度を高めたり。是に於てか紅葉奮然と立ち、二十九年「多情多恨」を「讀賣」に載するに方り、宣して曰く、是れ俳諧に非ず、雜報に非ず、翻案に非ず、合作に非ず。實に快腕一揮の創作なりと。乃ち連載數月に亘り、前後兩篇五百五十頁の長編をものせり。

「多情多恨」は甚しき神經質の男が最愛の妻を失ひて追慕の情に堪へず、懊惱日を重ねて薄らがず。寂寥の感屢身を幾ふ状態を描き、以て失戀者の情緒を委曲に精寫せし者にて、打見たる所波瀾なく奇巧なく變化なし。其人物を以てすれば、重なるは主人公鷲見と親友葉山、其の妻お種との三人に止まり、舞臺を以てすれば鷲見

「多情多恨」

葉山二家の間を出でず。事件を以てすれば鷺見が悲歎懊惱を反覆するに過ぎず。時日を以てすれば百五十日にだも満たず。人物の寡少と脚色の單純とは、明治小説の新傾向なりと雖、かくの如く甚しき者未だ多からず。而も四十六回五百頁の長編をなせるなれば、從來の小説の刺激強烈なるに慣れたる人をして、或は冗漫と感せしめ、或は無趣味と感せしめ、或は鷺見の如き性格は國民に存せずとさへ斷せしめぬ。然れども「多情多恨」の描かんとする所は、依戀の情緒其物なり。寫さんとする所は、此の情緒の最微妙なる作用なり。粗大なる想像淺薄なる同情を以てしては、往々看過せらるべき最微極細の消息をも隈なく具象化するは、即ち此小説の極意なり。吾人は既に粗大なる感情の描寫、強烈なるるれ、及深刻なるそれを見た。未だ此の小説が描けるか如き平淡微妙なる者を見ざるなり。又人物の性格に就ても、吾人は既に幾多の英雄を見、幾多の才子佳人を見、はた夥多の片輪者を見たり。未だ此の小説の人物の如く平凡にして而も面目躍如たる者を見ざるなり。變人と言はれし理化教師鷺見の性格固より善く、温良貞淑の家妻お種も亦よく、洒脱にして俠氣あり、伶俐にして情理具はる實業家葉山最善し。若し夫れ一篇の結

末の何等段落を劃すべき事件なく、唯快々の思を残して之を閉づるが如きは、新派傾向の一要素にして、其妙趣を解せんには多少の新教養あるを要す。之を要するに、「多情多恨」は平淡自然寫實小説家としての紅葉の特質を最明瞭に發揮せる者なり。觀念小説以來、新進作家競うて深刻の想を凝し、先進諸家亦之に動さるゝに際し、獨り平淡の境地を選びしは頗る彼が立脚地を見るに足る。彼が此小説を草するや、曰く、世間の小説は珍味なり。我家の小説は米の飯なりと。斯間の消息を道破して餘ありといふべし。

斯の小説は精練なる言文一致體にて書かれたり。是より先、美妙齋が盛に此體を用ひし頃は未だ之に倣はさりしが、一たび「隣の女」に成功するや、「青葡萄」「冷熱」等にも之を取り、遂に「多情多恨」の大篇に之を用ひぬ。さすがは詞章の大家、一たび振へば優に美妙嵯峨の屋の諸先輩を凌駕し、恰も雅俗折衷體に一流を出し、か如く、言文一致の最醇化せられたる一體を創め、銑練平淡、よく斯文の儀表となり、第一期以來の言文一致體も茲に始めて稚氣を脱し、銜氣を離れし文章となりぬ。

「金色夜叉」

「多情多恨」の終を告ぐるや、紅葉は更に他の雄篇「金色夜叉」に着手し、三十年一月よ

り「讀賣」に連載せり。高等中學の秀才間貫一、已か寄寓せる鳴澤家の一女お宮に婚たるべく定められ、相愛して歡樂の未來を夢想せしに、美色に誇り富貴を冀ふ婦女通有の缺點はお宮をして富貴の奴隷となりて貫一を棄てしめぬ、貫一、憤怨深く骨髓に徹し、決然宮と袂を分ちぬ。之を此小説の序幕たる前編の梗概となす。斯くて傷心の貫一は絶望の餘りに自殺すべきか、はた白刃を宮の胸に擬すべきか。あらず。彼が金に見易へられたる無念は、空しく自殺せんには餘りに強烈なり。彼か怨恨は平凡なる復讐を敢てせんには餘りに深刻なり。彼は人の頼むべからず世の依るべからざるを悟り、乃ち總身の欲を金に集めて世と戦はんと思ひ定め、遂に彼の極悪非道の高利貸と爲り了りぬ。かくて貫一は男らしき復讐を加へ、前の失望と怨恨とを露し得て、然る後正に死ぬべしと慰めたりしも、其の情を矯め己を托けて魔道を行ふ痛苦と、之よりも遙に大なる失戀の痛苦とは交々身を責めて、肉瘦せ色疲れ、形神共に破れて面を蔽へる陰日に黯きを加へぬ。中編は即ち此始末を叙す。宮は貫一に別れてより始めて心の奥に潜める切なる戀を覺りぬ。げに宮は胸中最奥の眞要求を知らざりき。彼女の心裡には二個の要求ありき。愛と

富とは是なり。而して二者の一致せざるに臨みてや一時旨進して富に就きぬ。而も其富を得了りし時始めて自己の眞要求は其戀人と共に此富を樂むに在りしを悟りぬ。今にして悔いぬ。二者共に得ん事の難き時、其の執れを取るべきかを知るの晩かりしを。別れて四年、會々貫一に邂逅して心火洞然と燃え上り、赤繩一度斷せしも又繋かるべき時のなからずやはと感じ、遂には彼人の恨解くべくんば此富棄つるに惜しからずと思ひなりぬ。斯る間に貫一は蝟集せる所有誘惑を却け、初一念を徹せずんば止まじと決せり。是後編の大概なり。願れば起稿以來正に三年を経、三編四百五十頁に上り、而も尙完結に遠し。貫一の痛苦と宮の煩悶とは如何に發展せんとすらん。

吾人をして紀年の都合上茲に暫く梗概叙述を中止し顧みて之か評論に移らしめよ。「金色夜叉」の出づるや、着想に空前の異彩あると、脚色の劇的變化と活動とを具ふると、主人公か教養と地位とありて而も青春の情に満ちたると、詞章の精練綸爛なる時文體なるとは、教育ある中等社會に於ける青年男女の讀者をして悉く之に心酔せしめぬ。先づ著想に就て言はんか。新思潮起りてより露伴鏡花等の作

世に行はれしも、露伴の理想小説は膏粱の美味却て重ぬるに厭き、鏡花柳浪等は事物を極端の場合、暗黒の一面に取れるを以て、好奇一時の念を釣り得べきも、永く同情を繋ぎ難かりき。況やかの狹斜小説に於てをや。是に於てか、小説の内容は益深かれ、理想は實の上に立てる者なれ、取材は中等社會に於てせよ、舞臺と人物とは尙少しく高潔なれとの要求は讀書社會に普かりき。「金色夜叉」は即ちこの幾分を満さんと試みし者なりき。貫一と宮との戀愛、清き事花袋の小説に見るが如くにして、而も斯くの如く幼稚ならず。貫一か痛憤と無念との反動として夜叉の家業に身を墮し、は多少一葉の「われから」に似たりと雖、而もかくの如く單純ならず。特に宮か罪の自覺によりて激烈なる煩悶に陥るが如きは從來の小説に多く見ざる處なり。思ふに紅葉の才藻よく世運と推移し、泰西小説に於ける造詣亦漸く深く、其の影響の創作に現はるゝ事少からず。罪の自覺に懊む宮と、之を恕宥せざる貫一とは「不言不語」の笠原夫婦に淵源を求むべく、貫一か境遇の大變化は正しく泰西大家の作に其の粉本を求むべきなり。

次に脚色を見んか、この小説は管に情操を描けるのみならず、尙事件を寫せり。

「多情多恨」の徹頭徹尾情操の小説なりしに反し、頗る劇的變化と活動とに富み、波瀾の起伏遙に從來の作品に超えたり。後年小説の戯曲化の流行するや、紅葉の小説にして舞臺に上りしは、實に之を以て嚆矢となす。進んで其の文章を見んか、前期以來の西鶴流雅俗折衷體に非ず、「多情多恨」に光彩を放ちし言文一致體に非ず、純然たる一種の時文體にして、字句烹煉、細寫委曲を極む。

斯の如きは「金色夜叉」か新教育の下に立てる青年男女にもてはやされし所以なり。之を「多情多恨」に比するに、總ての點に於て著しき對照を見る。瀟洒に對する濃艶、平淡に對する絢爛、單調に對する變化、沈靜に對する活動、皆是全體に亘る差異なり。二者各得る所あり、軒輊容易にすべきに非されども、苦心の度を以てすれば「多情多恨」恐らくは「金色夜叉」の上にあらん。蓋し前者に在りて成功の域に達せんは、凡筆の能くすべきに非ずと雖、紅葉の才筆を以てすれば、後者の成功難きに非ざるべし、前者を以て紅葉の所謂米の飯とすれば、後者は所謂滋味なるを免れず。作者自身も亦、後者は苦心の作に非ずと稱す。且つ其の文章に於ても、作者自身之を「穎才新誌」的なりとして擯げ、言文一致を尙んで之を理想的の地位に進めんと企て

たりといふ。要するに「金色夜叉」は紅葉の傑作なりと雖、決して其の本領に非ず。得意の作はむしろ「多情多恨」にあらん。

第二節 新體詩

『國民の友』及『文學界』の詩人が、七五調の短篇を以て新體詩界を領せし時に方りては、斯道の發展は小説界に比して甚しく遜色ありしが、明治二十八年以來、俄然として長足の進歩をなし、面目頓に一變するに至れり。

是より先き、國家的大戦争ありしや、事に文筆に従ふ者競うて之を謳ひ、「拔刀隊の歌」以來、絶えて久しき軍歌再び世に出で、戦争中の事物を詠める新體詩は、斯道にたづさはる所有文人に試みられたり。然れども、是等戦争詩歌は例の如く、一時的傾向を帯び、逸作亦遂に出づる事なく、影響從つて殘る事なくして其の跡を絶ち、七五調の擬古的短詩再び詩界を領しぬ。思ふに此潮流の來るや實に久し。遠くは新聲社の詩人より、『國民の友』の詩人を經て、『梅花詩集』『文學界』の諸詩人に至るまで、古語の智識の深淺之を驅使するの巧拙措辭の手腕の熟否に多少の等差ありと雖、概

して用語聲調に於ける擬古派たるを失はざりき。今や此の作風益發展して詩壇の大勢力となり、遂に『帝國文學』に現はれたる文科大學の詩人に繼承せられ、詩想の清新を加へ、詩形の長大を致すと共に、用語の雅醇なる聲調の流麗なる遂に湖處子殘花等從來詩人の作に抽んでたり。

此時に方り、十四年前新體詩創始の運動をなし、外山、山仙士は、再び一新體を提出して一世の耳目を聳動しぬ。二十八年二月『帝國文學』に掲げし旅順口の英雄可兒大尉は、實に此の新運動の第一着手にして、續いて「輸卒」忘るゝな此日を「我は喇叭手なり等を出し、尙之に關する意見及其の朗讀法をも發表せり。而して之等の詩篇たるや、いたく從來のと趣を異にし、先づ七五又は五七一聯の詩形を打破して、最自由なる無律沒韻の散文的句節を採り、次に曲雅流麗にのみ傾ける古語を棄て、漢語と現代語とを交へたる日常普通の言語を用ゐ、次に作者の創意に出でし獨特の表情的朗讀法を試みて、其詩形と用語との散文的渣滓を除かんと勉め、名けて朗讀體と言へり。

「開闢以來未嘗て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。

外山、山

良運なり。幸福なり。此の時期に遭遇せるの日本人は『可兒大尉』

右はたゞ冒頭の二行を出し、のみなりと雖、以て其一般を推すに足るべし。此の體一たび出で、評壇の排撃盛なりしも、作者は之に屈せず、多少意見を同うする人々と共に『新體詩歌集』を編み、同年秋之を世に問へり。收むる所、山仙士作十一篇、上田萬年中村秋香阪正臣作長短七十九篇。中數首を除けば、悉く七五の舊調を脱し、而も大多數は『可兒大尉』の型式に依る。

此に於てか、評壇詩形論の沸騰を來し、律語詩非律語詩の論議甚盛なりき。然れども、此論争は遂に何等の効果を殘す事なく、創作界は依然として律語詩に適き、七五調に歸しぬ。されば彼の井上巽軒が長詩、比沼山の歌を出すや、亦七五の舊調を襲ひ、革新の範圍を用語の種類と想の規模とに限れり。『比沼山の歌』は二十九年初『帝國文學』及『太陽』に掲けたる叙事詩にして、丹後風土記なる羽衣傳説を骨子となし、竹取物語を血肉となし、天人の志は信を本とすといへる思想を一篇の理想となしたる者。』
 完結を見ずして止みしも、篇章節句形式整齊、空前の長詩なり。』作者の詩論を見るに、大體可兒大尉の作者に同じと雖、未だ一言七五調の非難に及はず、又律

『新體詩歌集』

井上巽軒

比沼山の歌

語拘束の害を説かず。唯用語の豊富道勁なると旨意の明瞭なるとを以て、擬古派に對する優勝の理由とせるのみ。

外山井上二家の運動は、詮する所、擬古派に對する反動なりき。而して其の成果を見るに、前者の朗讀體ははやく失敗に歸し、後者の古語漢語俗語の混用も、著しき不調和の爲に、同じく失敗に終りぬ。蓋し、前者は廣義の詩即ち科學に對立する詩の意義を取り來りて、直に新體詩に附屬し、以て散文詩と韻文詩との差別を棄却したりき。否、口演法の如何によりて諧調自ら生ずと信じ、一定の律語種々に結合して万人の心律に共鳴する者即ち詩の韻律なりとはせざりき。此を以て、世の律語詩を主張する人、七五律を以て邦語韻律の主なる者となす人、詩歌は必しも謠ひ物に非ざればお自から格律を形體に求めざるへからざるを知る人、萬邦の詩歌皆一定の韻律と句節とを有するを思ふ人等、總て此の體を取らず。次に後者は、結構の壯大なる、洵に文壇の珍たりと雖、長詩の價值たる内容の優秀と詞章の精美とに至りては、缺陷なきを得ず。和漢雅俗の言語を混用するか如きは、選擇なく醇化なくして成功する事難し。

然らば其の内容即詩想は如何。前者題材の狹隘なる常に現實の事件に拘泥し而も概ね戰爭中の事象に屬するを以て、多く恒久の價值なし。彼は人事及自然の種々相を諷詠せず。幽遠の情感高邁の冥想等に至りては全然之を缺く。後者の著想はむしろ奇抜なり。神話を題材とするは、本邦詩人に取りては好箇の暗示なり。唯其の構想理に偏し、且其の根本思想を倫理的功利主義に置けるを憾むべしとす。

要するに二家の作品は、遂に大なる成功なかりき。唯彼の長大の詩形を推稱せると、用語に勁健の分子を加へ、聲調に剛強の風趣を添ふるに至りしとは、此運動か齎し、二個の賜なり。

斯かる間に擬古派一輩は、用語の古雅なると、題材の概ね抒情的なると、作風の餘韻を尙べるとよりして、評壇に朦朧體の名を得たりしも、其の詩想は深く主觀界にも入り、詩形は整齊、詩語は粹粹、加ふるに泰西詩歌を味ひ、總て詩的非散文的なる事遙に前二家に超え、擬古派其の物の爲に、大に光燭を擧げたり。武島羽衣は此等詩人の白眉にして、二十八年初「墨染櫻」の一篇を帝國文學に掲げて始めて斯壇に現は

武島羽衣

れ、同年「小夜砧」を出すに及んで、新詩人としての價值、文壇に認められたり。「小夜砧」は西詩翻案の叙事的抒情詩にして、秋夜征人を思ふ少婦の心、惱亂して夢幻の境に入り、既に戦没せる夫の靈に伴はれて廢寺の塚中に陥るを叙して、幽婉幻怪の趣に富む。此類の思想は本邦從來の詩歌には絶て有るなく、寧ろ國民の情想に遠き者なりと雖、清新温藉縹渺として幽韻掬すべく、從來の擬古者流が、徒に詞藻の富麗を以て内容の空虚を飾る者に比較して其の間超ゆべからざる畛域あるを覺ゆ。加ふるに、詞章の典雅精練にして雅言を驅使するの自在なるは詩壇稀に見る所にして、七五四句一節をなせる者、總て四十三を以て成れる長詩讀み去りて些の滯滯を見ず、泰西語脈の混用も自然にして調和を失はず。總て新詩壇に寄與せる一新作風として推稱せらるべき者なり。爾來「詩神」「草刈笛」「月」「人生」等數多の創作皆温藉の詩思を發揮して悠容の姿致を凝らし、時に渾然として天衣無縫の概ある者あり。此の如きは羽衣の獨擅にして當代及ふ者無かりきと雖、長所はやかて短所の潜む所、彼の詩は情感の激越なる者、情熱の強烈なる者なく、其の調往々散文的の弊に陥り、單調の失を免れざらんとす。

鹽井雨江は二十八年『帝國文學』の初刊に「深山の美人」と題する抒情的敘事の長詩を出して名を江湖に馳せ、其より「深山の花」「故郷の花」「磯の笛竹」等長短數篇の創作あり。之を羽衣に比するに、吟什の少きだけ題材も少く、詩想亦純王朝的にして、西詩の面影を傳ふる所なし。形式に於ても古語古格の分量多きに過ぎ、粉飾の痕少からずして、高雅悠容の姿致に乏し。唯詩形の散文的ならんとするを避くるに於て多少の苦心と成功とあり。「磯の笛竹」の如き、句節の配置、措辭の選擇に於て、各種の修辭的技巧を用ひ、荒磯岩の松蔭に夜毎に憧れ出で、思を笛竹に吹きすます海人が子を詠じて、情緒の昂揚遙に羽衣等に超え、想髓の奮きに係はらず、一種清新の詩調に入る。雨江の特長茲に在り。大町桂月次で現はる。彼は寧ろ文章家と稱すべけれど、新體詩に於ても、純主觀の短篇、情感の激越、詩調の昂揚を以て遙に前二家に絶す。桂月の特長は詩形に非ずして、詩思の純真情熱の強烈に在り。其の他杉島山等二三の作家あり。皆擬古調を取りて王朝の麗藻を學べり。

以上は『帝國文學』の詩人の主たる者なり。顧みて之を概観するに、純主觀の作甚稀にして、概ね敘事的色彩を帶び、小説的趣向を取りて之を律語に述へしか如き者

少からず。地の文と詞とを分ち、詞は對白、獨白並に之を用ゐるか如き手法は、最普通なりき。蓋し彼等が専ら用ゐし雅語の性質として、最近の思潮に觸れたる主觀界を表現するに足らず。事を敘し景を描くには大なる欠陥を感せずと雖、一旦内觀の深きに入り冥想の幽なるに至らば到底適切明快なる表彰を得る事能はず、從つて卓逸なる抒情詩を見る事難し。かくの如きは擬古派の發展に對する致命的缺點なれば、羽衣雨江を頂點として其の發達は長へに阻止せられぬ。

然れども擬古派の努力は、非律語論に對する律語論の勝利を確實ならしめ、爾來崛起せる新詩人は悉く律語の門に出でぬ。二十八年より三十一年に至る四年間特に二十九年は斯道勃興の機にして、新詩人は輩出し舊詩人は奮起し、各種の文學雜誌に現はるゝ創作甚盛なりき。以下次を追うて之を列叙せん。

用語及聲調に於て擬古派に反對の態度を取る者を歌人與謝野鐵幹となす。鐵幹は二十九年短歌と共に『東西南北』の一集を公にして始めて詩壇に上りぬ。集中の作は韓山羈旅に關する者多ければ、概して風雲の氣ありて神往の詩趣なし。三十年再び詩集『天地玄黃』を出し、豪語奇句一段の進境を示しぬ。「山中の石」「乾坤寥廓」

「海嘯」「人鬼」等集中の主たる者、概ね理想的怪奇を弄す。就中「山中の石」は深山の白雲に獨り寝ねたる太古の石の述懐に托して、星の都に在りと聞く、一百五絃の玉の琴、嵐の神の音につれて、一時に裂くの慨あらむ詩人の胸懷を詠出す。總じて彼の詩、勁健を求め豪壯を好み、客氣横溢して却て淺俗に陥る事其の和歌に同じ。所謂男子の歌なるべけれど、固より高遠の詩想あるに非ざれば、擬古派の未だ開拓せざる抒情の好詩境に足を入れながら、世上一時の事象に拘して永遠の姿致に乏し。唯漢語を交へ漢語脈を採りし一事は尙、生硬を免れずと雖、擬古派の平弱單調を救うに多大の効果ありき。

正岡子規

歌人鐵幹に續きて俳人子規も亦新體詩に指を染め、二十九年竹の里人と名のりて『日本人』に現はれぬ。「鹿笛」「父の墓」「小蟲」「四季」「洪水」等獨特の俳詩想を長詩に托し、中には全く俳句を新體詩にしたるか如きあり。されば詩人としての子規の得喪は一に此點に歸す。總じて彼の作、意洒脱にして語緊密措辭弛廢なくして聲調常に張り、好んで自然を詠じ、多く客觀叙法を採り、觀察微にして且新なり。故に想到陳套なる少く形に散文的なる弊なし。然れども規模狭小なる者多く、著想即興的に偏し、最冥想を缺く。三十年に入りて押韻論を稱へ、其の作例をも示したりしが其は十五年の昔、『新體詩妙』に試みられし阿行五音の脚韻に過ぎさりしかば、幾もなくして事止みぬ。

美妙齋

前期以來の作家にして餘勢を今日に振ふ者を美妙齋及『國民の友』の詩人となす。美妙齋は『韻文論』以來逸作なかりしが、二十九年雜誌『大和琴』に現れ、翌年『魔界天女』を連載して詩壇に異彩を放ちぬ、數回に亘る長篇精練の措辭、凄婉の情思、當年の意氣を偲ばしむ。『國民の友』の諸詩人は湖處子を始として、客將湯淺半月、嵯峨の山人等前期に比して進歩著しからず。抒情の短篇、平淡にして規模小に、情感女性的にして想像亦稚氣を脱せず。詩形に於ても優雅の辭を操れども、『帝國文學』一派の絢爛に及ぶべくも非ず。詩調平弱散文的の弊最甚し。唯可憐の感情を和平の言辭に寫すを以て其特長となす。三十年夏、湖處子嵯峨の屋は、國木田獨步、松岡國男、田山花袋、太田玉茗と共に詩集『抒情詩』を出版しぬ。

三木天遊
繁野天來

詩風に於て、『國民の友』一派と正反對に立つ者を、『早稻田文學』の詩人、即ち三木天遊及繁野天來となす。共に小説家として二三の作ありし者。夙く新體詩に入り二

「鈴虫
松虫」

十八年以來、天來は「雷の音」「雨聲鳥語録」等を、天遊は「紫姬」月の國等を出し三十年夏遂に合集「鈴虫松虫」を公にせり。收むる所、天遊十九章、天來二十章。概して詩思情熱に富み、青春の客氣に満ちたり。初めは當時の流風に從ひ、抒情的敘事の長詩に傾きしが、後漸く主觀抒情を主とするに至れり。詩形は五七の韻律を好み、渾成の詩品に遠けれども、概ね調強くして弛廢なし。用語に於ては最自由なる意見を有し、漢語俗語併せ之を用ゐんとする事、鍊幹に似たり。

『文學界』の詩人は、由來詩風の清高を以て知らる。情操清婉、詩品高潔、地の濁穢に在りて天の淨界を憧憬するか如きは、即ち其の特色なり。星野天知、島崎藤村、平田秃木、戸川秋骨、樋口一葉、田山花袋、松岡國男、馬場孤蝶、太田玉茗等、皆悲痛哀絶の調を以て自然を語り、聖愛を歌ふ。就中詩人として知られし者は、藤村、花袋、國男、孤蝶、玉茗等にして、花袋、國男、玉茗は「國民の友」にも出で、「抒情詩」に收めらる。其中にも、國男は詞藻穩健にして想像亦温藉、「抒情詩」の白眉なり。孤蝶は未だ特筆すべき無く、藤村此の間に立ちて恰も鷄群の孤鶴たり。

島崎藤村

藤村の詩を『文學界』に試みしは、當期初頭以來の事なれども、其名を斯壇に表せし

は、二十九年後半に屬し、「一葉舟」「秋の夢」と題せる數篇の抒情詩に、一新聲調を出して時人を驚かし、よりなり。就中詩人中野逍遙を悼める「哀歌」、朝と暮とを詠じたる「三つの聲」、戀さまぐの姿を歌ひし「こひぐさ」、星影水の如き夏の朝、匂ふあやめの邊りに、妻鳥を得んと闘ふ二の雄雞を詠じたる「鷄」の如きは、詩壇嘗て見し事なき清新の格調思想なりき。爾來「薄氷」に六人の女性を詠じて各性情を描き分け、三十年春「天馬」の傑作を『文學界』に出しぬ。「天馬」は「序、雄馬、雌馬」の三章、二百三十句に亘る長詩にして、星影夜なく、動き奇端箱根の山に現はれて、蘆の湖の邊り村の南北に賤か屋の片廂をかりて人の世に生れ出てたる雄雌の天馬の詠せる者。序に於て此の由來を叙し、「雄馬」の章にては朝に富士の雪を踏み夕に御嶽の岩を超へ、青雲に嘶きて電影を追ふべき天馬の身ながら暫く槽檻に委して主人に伴はれ、今し箱根を下りて遠く近江の湖畔花橘の蔭を行くを詠じ、次に「雌馬」の章にては、青毛優しき牝馬が蘆の湖を去りて遠く陸奥の野に下り、四時の勞役、冷く情なき人間に驅使せられて頻りに天の靈泉を戀ひわぶるあはれの姿を歌ふ。想像雄偉、詞章清新、當代詩界の通弊たる纖弱弛廢の想調を擺脫し、理想幽遠、詩境高潔、抒情詩壇の一大進運を劃せ

り。しかも彼は更に進んで「深林の逍遙」を『帝國文學』に寄せたり。陽春花深く霞かをる頃、斧鉞未だ入らざる深林の緑を分け、悠遊自適靜に自然懷裡に同化し去るか如き詩境を寫す。深林の中山精と木精とありて相呼び相應へ、到る處春の徳を頌し、春の意を語る一誦先づ幽韻人を襲ふ。

花の紫葉の緑、うら若草の野への糸、工を盡す大機の梭の林に來れかし。

古き落葉を柔き青葉の蔭に葬れよ、冬の夢路を覺め出で、春の林に來れかし。山風たび渡れば、簫管お自ら鳴り、白妙の雲峯を分れて樹々に柵引く。巖を攀づれば、脚下忽ち激湍墮塔の聲あり。既にして彩雲見るく、色變る夕まぐれ、林中の湖邊に出つれば、春日水に沈みて、殘紅紫に交り、遊子自ら暮色一様の彩りに沫し去らる。斯の如きは詩の大要にして、總て二百餘句、自然を描きて悉く生命を賦與し、高韻清致人をして神往せしむ。「天馬」の奔放と崇高と無けれども、沈靜と幽遠とは遙に之に優り、詞章の圓熟亦遠く之に過ぐ。蓋し新體詩創始以來の名篇にして、詩人としての藤村の名嶄然として卓出しぬ。同年秋一集を結て『若菜集』と題し、長短五十一篇を收む。形式多様にして、句節の構成單調ならず。用語は概ね雅醇なるを

「若菜集」

選びしも特に平易なるを用ゐて耳遠きを取らず。但し其の修辭に新工夫あるを以て清新の聲調獨特の妙あり。歌ふ所の題材は自然と戀愛との二方面ありて、自然を詠せる者は「深林の逍遙」を始として、「秋風の歌」「明星」等、最誦すべく、特に「明星」は清高無比短詩中の球玉にして、渾成の詩域に近し。戀愛を詠せる者は、熱情熾烈、從來の詩人の如く怠慢なる戀に非ず。「たくめ」「四つの袖」等は其の代表と見るべく、總て英國近代のラファエル前派の面影を傳ふ。思ふに藤村の作は、詩壇最も西洋趣味に富める者なるべし。

薄田泣菫

藤村起りて幾もなく、又一个の藤村現はれぬ。三十年『新著月刊』に「花密藏難見」と題して短詩數篇を公にし、清婉の調を以て可憐の情操を歌ひ出でたる薄田泣菫是なり。其の特色は「紅絹袖」「夕等」に見ゆる如く、自然懷裡に戀愛の慰藉を求むるに在り。此の點に於て確に藤村の一面を傳ふ。唯夫れ泣菫は藤村に比して情操一層可憐なるだけ熱烈の度低く、形式の變化措辭の技巧を求むる事多きだけ、神韻に乏しく、嶄新の譬喩を用ゐる各種の語彙を取らんとするだけ聲調を傷くる事多かりき。獨り彼か試験に成りし八六の調は一種蒼涼の趣を具へて幽婉の詩思を傳ふる所

なしとせず。尙後の發達に徴すべし。

土井晚翠

之と相前後して出でしは土井晚翠なり。二十九年の末、紅葉青山水急流^及枯柳^を帝國文學』に掲げて、夙に一種の新調を示し、が三十年より三十一年にかけて、希望^{造化妙工}被鐘の響^{山たるし}萬有と詩人^{羨笛餘韻等}頻りに冥想的抒情詩を出し世評嘖々たりき。是より先き、帝國文學』の詩人相次て潜み、羽衣等二三の作家、僅に擬古派の名残をとむるのみなりしが、茲に又新作家を興し、而も其の作風全く異にして、前者の擬古的にして動もすれば濛朧の嫌あるに反し、後者は泰西詩想を咀嚼して之を清高の大和文字に寫し、思想用語共に明晰爽亮なり。又前者の抒情は淺近平板にして、深刻の煩悶も向上の憧憬も無かりしに反し、後者の抒情は高く理想界に入り、常に憧憬の眼を天の一方に注ぎ、進んで冥想思索の哲學的風趣を求む。且つ漢語漢文脈を操つる事頗る巧妙にして、詩調爲めに遒勁、前者の女性的なるに反して男性的光彩を帶ぶ。蓋し晚翠深く泰西文學を愛し、日夕名家の詩篇に親しみ、而も又漢詩國歌を誦するを怠らず。冥想思索の結果を詩篇に構成するに當りて、要する所の抽象語は、概ね漢語に求め、更に洋語を以て之を補ふ。斯の如きは、嘗に『帝

國文學』の詩人の中に異彩を放つのみならず。所有新體詩人の僞逸たり。

晚翠の特色は冥想思索に在り。觸目万象の中、常に一種神秘の意を觀せずんば、止まず。彼自然を詠じ、人生を歌ふ。而も其の描寫に止らずして、或意義を其の後景に探る。彼は美神を謳歌せんよりは寧ろ造化の幽を聞かんとするなり。「希望^{造化妙工}雲の歌^{星と花}夏の夜^{墓上の花}登高^{鶯等}に見わたる自然觀^{夕の思}光等に見わたる人生觀^及詩人^{万有と詩人}に見えたる詩人觀を窺はん者、何人も晚翠の理想的傾向の一斑を知了すべし。若し夫れ暮鐘の一篇に至りては、詩人としての作家の特色を名残なく發揮せる者、落想文辭聲調一として具らざるなく、沈痛雄渾晚翠が作中の絶唱なり。此詩は三十一年春、帝國文學』に掲げし長篇にして、十七節百三十句に及ぶ。暮色降り來りて世上千萬の思を一様の暗に包まんとする時、一打の鐘聲に群がり起る詩人の思は何ぞ。鯨音一過餘韻浮世の耳に絶ゆることも知るや無象の天の外、下界の夢のうは言を、名残の鐘に聞きとらん、高き尊き靈ありと。靈よはた何とか之を聞く、下界の暗は厚うして、聖者の愛絶えずとか、浮世の花は脆うして、詩人の涙涸れずとか。げに此の鐘聲は、濁世の福音靈應橄欖の法の聲

なり。願くは理想實現の曉に至るまで、絶えずも響け長へに、天籟地籟身に兼ねたる夕入相の鐘の聲よ。斯くの如きは暮鐘の神髓にして、又晚翠の詩想の精粹なり。思ふに彼の詩底を敲けは必ず厭世の響あり。曰く「自然は笑ひ人は泣く」。曰く「人は死を疑との子のみ」。而も詩人の向上的憧憬は茲に起るなり。思へらく、かゝる人生を厭離して何所に適くべき。戀愛の花園に逍遙せんか。世に不變の戀なきを如何せん。現實以外永劫不變の大理想に向つて精進せんか。其の容易に企及すべからざるを如何せん。頼に人に想像の力あり。想像に成り出でし詩歌あり。即ち之を以て理想實現の機至るまでの慰藉となし、暫く想像の翼を張つて光明の天國に神往し、美妙の詩歌を玩賞して永劫の樂土に逍遙せんと。是れ晚翠の作品に通ずる根本思想なるに似たり。

以上晚翠の詩想を説きて其の明側を盡しぬ。然れども暗側の之に伴ふ者亦少からず。夫れ晚翠の詩は勉めて哲學的宗教的ならん事を求めたるか故に、多くは理智に走り、描寫せずして説明し、謳歌せずして論述す。されば其調常に冷靜にして情火の熱烈なる者絶て無し。而も彼の思索は單純なるを以て、究竟詩想一た

び定まるや、千篇唯同一の思想を繰り返すに過ぎず。且其の文辭も、明澄の極餘韻を欠き、聲調も奇抜の利あると共に圓熟を缺くの害あり。然れども新體詩有つて以來始めて得たる冥想詩人なるを以て、彼が詩壇に於ける地位甚輕からずと言ふべし。

願れば我新體詩も、三年か間に長足の進歩をなしけり。湖處子殘花より藤村晚翠に至るまでの想形の進歩洵に驚くべし。而も其の間輩出せし詩人、概して壽命長からず。自然淘汰の鐵鞭に驅られて相次て斯壇の外に逸し去り、殘る所は健闘の勇士藤村晚翠の二家となりぬ。今や二家の詩風江湖に布き、青年輩の文學雜誌たる『文庫』『青年文』及『新聲』等に見えたる年少の作品は、曩に羽衣の麗藻を揮ふや、靡然として之に趣きしも、今は即ち藤村調晚翠調となるに至りぬ。要するに、新體詩は草創日尙淺く、正に試験時代に屬し、從て試み、從て驗す。一として恒久の威力ある事なし。唯藤晚二家のみ望を未來に屬せしむる者あり。請ふ。其の後の發達を見ん。

藤村が三十年以後の作は纂めて翌年刊行の『一葉舟』と『夏草』とに在り。彼の詩想

は『若葉集』に比して著しく面目を改めぬ。『一葉舟』頭の『白磁花瓶の賦』は、失戀の恨綿々として盡きざる若き藝術家が、萬斛の悲涙を一技にこめて作り出でし純白の花瓶を詠じ、情緒清婉楚楚として人を動かす者なるが、一方失戀の恨を抒べて他方藝術の歎美に及ぶ所、頗從來と趣を異にす、從來の藤村は戀を謳ひ愛に憧るゝ者なりしが、茲に至りて戀の破れ易きを恨み、却て永劫の美常世の歎たる藝術に憧るゝ爾來彼は藝術愛慕の詩人となり、歌ふ所常に其の風韻を帶ぶ。勿論鶯の歌の如きは、千里の蒼溟、忽黒雲湧き疾風起り、怒濤紫瀾を捲いて白沫四散する所、磯際の岩角に暫し身を寄する老若二羽の鶯が、健翼一搏烈風に逆うて萬里の雲を追ふ光景を叙して、崇高雄渾、天馬と併び立つて圓熟は之に勝り、晚翠の諸什と拮抗して迂餘曲折は之に優り、其風趣を察すれば、正に『若葉集』の遺韻を傳ふ。然れども『晚春の別離』『曉の誕生』『月光等』に至りては、何れも藝術に對する無限の愛慕を表はして一種の特色を帶ぶ。試みに『晚春の別離』に詠せる詩人を以て晚翠の『萬有と詩人』に於ける詩人に比し、『曉の誕生』に於ける嬰兒を以て晚翠の『小兒』に比すれば、藤村の面目愈明なるべし。かの皎月千里の清光を歌ふにも、一樣の彩りを以て萬物を理想化する神

秘の色を謳はずして、百代易らぬ月影に藝術の永劫を觀じ、深夜の月光に藝術國の靜寂を思へるか如き、以て其の本色を見るに足るべし。

此時に方りて彼の詩風は再び轉じ初め、空想的藝術的世界より出で、實際的自然的の生活に入れりぬ。『夏草』收むる所の『新潮』と『農夫』とは明に之を示す。『新潮』は漁夫の生活に托して人生の行路を描き、最後に處生の方針を示せる者。幼稚なりと雖、作者の新傾向を見るに足る。『農夫』は序、及上下二卷、八章より成り、一千句に垂んとする叙事的抒情詩にして、新詩壇空前の長篇なり。利根河畔の農夫鍛工の女と相思ひ、征清の役に召されて征途に上り、三年軍終へて歸れば少女が離恨に悶死せしを聞き、絶望の餘り、身を雲水に托せんと決せしが、會鍛工が愛子を失へる悲愁を勞働に慰めて、奮勵するを見て、驟然昨非を悔ひ、再び利根川邊に己か生業を勵まんと思ひなるを叙し、前者より更らに一步を進めたり。時恰も『文學界』の倒るゝに際し、藤村亦信州に入りて實際的生活を營むに至りしかば、其の『新小説』に寄せし吟詠益實際的自然的となり、『文學界』時代の面影復見るべからず。當時の詩集たる『落梅集』を見るに、感情生活よりも意志生活を尙び、藝術戀愛を歌はずして汗額の事業

を説き空想の叙述よりも現實の描寫を取り、仰いて翹望せずして俯して慰藉す。總て感興の湧くがまゝに任せずして考案反省するを其の特徴となし、通篇著しく沈靜の調を帯ぶ。「壯年の歌」及「勞働雜詠」は此集の代表と見るべし。されば偶戀愛を歌へる胸より胸にの如きありと雖、戀愛其物は、もはや『若葉集』の其れに非ずして、人生の戦線に立てる者の唯一の慰藉となれり。茲に至りて藤村の詩想の中心は事業の謳歌となり、生命の戦闘は其の套語となり、明澄透徹、昔日の濛朧なく、靜平なる觀察頗る客觀的に入る。従つて其文辭の如きも青春の心情を踴らしむる詩的魅力なく、絢爛の賦彩既に見るべからず。唯彼が胸奥に潜める沈靜の詩思を抒べし者は、淡彩の中、大雅の光あり。「小諸なる古城のほこり」及「寂寥」など、清楚の賦彩奕々たるを見る。三十四年秋「落梅集」を公にして後、復歌はず。

晚翠は三十二年春、詩集「天地有情」を刊しぬ。「收むる所、長短四十編、『帝國文學』反省雜誌」等に掲げし從來の作の全部なり。中に「馬前の夢」「星落秋風五丈原」の二長篇あり。晚翠主題及作風の一變せんとするを示す事、藤村の「新潮」と「農夫」その如し。

「馬前の夢」は、不能の文字を笑ひし蓋世の英雄も、玉樓の春短くて、魚龍淋しき秋の水

「天地有情」

「其の常勝の劍折れて、獨り小島の波枕、疾風暴雨の夜更けて、終焉の床に横はる」拿破崙を歌ひ、「星落秋風五丈原」は集中の最長篇、六章三百五十句に上り、南陽の臥龍草廬を出で、天下を三分して王者の師を學びしも、成敗遂に天の命、一代の希望未成らずして、祁山の陣營、大星俄に落ちし諸葛亮を詠じ、共に偉人の歎美と運命の哀傷とを抒べて、悲壯沈痛を極む。其の形式に於ても共に三段に分れ、最初終焉の床に在る偉人を描き、中段作者得意の叙事的技巧を以て一代の功業を叙べ、詰ふに詠歎と憑弔とを以てす。結構雄偉、詞藻壯麗、抒情叙事併せ得て手腕頗る見るべし。之を従前の作に比するに、厭世懷疑の遺韻尙響きて、而も理想を戀ひ光明に憧れし面影、復見るべからず。彼は理想の實にし難く、不朽の求むべからざるを史上の事實に見て、俯仰今昔、遂に感傷の悲音を洩せり。爾來晚翠は破られたる理想を悼む詩人となり、第二詠集「曉鐘」三十四年刊の各篇、概ね哀絶の調を帯ぶ。「萬里長城の歌」「秋興八首」「惆悵吟」「黑龍江上の悲劇」等は代表者たるべし。「萬里長城の歌」は泰皇の覇圖、空しく消えて獨り史上の名を残すのみなるを傷み、二十朝の興廢を閱せる古壁、今既に清室の運命を語るを哀しみ、「秋興八首」は悲風蕭殺の夕、詩人自身を歎き、故郷を偲び

「曉鐘」

母國の詩運を愁へ、毎外の詩國を慕ひ、友を惜み、昔を戀ひて、痛切なる哀傷の聲を放ち、黒龍江上の悲劇は、三十三年北清戰役中、滿州國境に於て演せられたる悲劇に憤を發し、文明の理想の爲に泣き、人道の大義の爲に悼みて熱烈奔放を極む。共に集中の長詩にして、措辭益圓熟に、詩形益整齊、修辭上の進歩著しと雖、青春の翹望を披瀝したる頃の如き豪華の風調なし。

「弔吉國樟堂歌」「富嶽の歌」「登高賦」は集中の絶唱なり。前者は、芳蘭花脆く、運命の神に嫉まれて萬古の恨を殘せる故友を弔ひ、孤燈の下、靜寂と「暗」の中に、冥想の眼を閉ぢし一夜の思を叙し、清怨綿々至情切實、加ふるに詞藻の富瞻を以てし、洵に好哀歌なり。「富嶽の歌」は渾沌の世に湧き出で、太古の雪の膚清く暗を照して立てる姿不變の富士の高嶺に、天上の星永遠の光を送りて露と凝らしめ、其の星の精銀淡と共に下りて嶺上の明水となり、餘滴靜かに谷あひに流れて花を誘ひ香を浮け、幽泉細流集りて大河となり、滔々東海の波に注ぎ、南溟の風北溟の雲、群る友を呼びて靈山に集る處詩神降りて不朽の調を奏つるを叙し、玲瓏の想像、崇高の風趣、莊麗の詞藻、集中に異彩を放つ。「登高賦」は吹き去り吹き來る無限の秋風に對して、十九世

紀の禍惡悉く吹き拂ひ、新に來らん二十世紀の世をして光と愛と詩との世ならしめん事を祈りし者にして、沈靜の想、莊嚴の辭、老熟の域に入る。而して「弔吉國樟堂歌」は流轉の相を觀じて懷疑に陥り、哲學を彈じ宗教を効する處、依然して感傷の詩なりと雖、末段に至りて、靈の光を蓋ふ僧俗の聲を棄て、沈思冥想すれば、有象世界の遙かなた美妙圓滿の無象世界ありと、説いて從來嘗て有らざる慰藉を含めり。爾來理想實現の時あるべきを信するに至り、「富嶽の歌」にては、靈山の曙光を見て萬邦比類なき理想國を我邦に現出せん事を信じ、「登高賦」にては、更に進んで理想界の實現を渾球上に見ん事を無窮の靈に祈り、「愛の神、進化の神、詩人の神……願くは爾の呼吸、天の果てより地の隅に吹き來る無限の風となりて禍惡盡く吹き拂ひ、光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ。」と呼べり。即ち昔日理想の惱みは化して現實の惱みとなり、無象淨土の希望は變じて現象淨土の希望となりぬ。

上述諸篇は何れも「曉鐘」集中の長詩にして、其の短詩は思想修辭共に比較的精彩なし。詩形に於ては七五二句を連ねて一行をなせる一體を始め種々苦心の痕を止め、「萬里長城」以下勉めて變化ある詩調を得んと試みぬ。七五二句一行の詩形は

夙く二十八年羽衣の月に現はれ、藤村亦鶯の歌に之を試みし者なれば、晚翠の新案に非されども、最多く之を用ひしは彼なり。「登高賦」に至りては全く七五の單調を脱出し、前條抽出の斷片に見えしか如き新形式を試み、以て一種蒼涼の調を出せり。而も藤村の『落梅集』に於けるが如く、『曉鐘』以後暫く高遠の聲を收めぬ。

二家の盛なるや、『花密藏難見』の作者泣望も亦『新著月刊』誌上一種の聲調を以て、可憐の情操を歌ひ、頗る江湖の囑目を得、三十二年末遂に一集を公にして、『暮笛集』と言へり。試みに其の詩想を覗ふに、彼も亦他の詩人の如く、最初に、現世に對する不満足、俗人に對する嫌厭より、懊惱懷疑の雲に閉されて茲に一種の翹望を生じぬ。晚翠は斯る時、仰いで天上雲のあなたに無窮を戀ひ、未來の世に樂土を夢想して心を遣りぬ。然れども泣望に在りては、所謂現世とは趣味なき世、所謂俗人とは趣味なき人にして、彼の懊惱は主として趣味なき人生に對する嫌惡の情より起るに過ぎず。されば彼の翹望は甚簡素にして、單に趣味ある人生を實現せんと冀ふに止まる。然らば即ち人生の趣味とは何ぞや愛と詩と是のみ。彼か憧憬の歸着點は即ち此の二者に外ならず。卷頭詩のなやみ既に此の思想を體現し、次ては『星鐘』『蟋蟀』等に

「暮笛集」

詩の憧れを示し、『琥珀』『玉腕』『紅絹袖』『夕』等に戀の憧れを示し、更に其の後の什に於て此の思想を明白ならしめたり。就中兄と妹二篇、詩歌の人なる兄と才敏く情切なる妹とを描きて最よく彼の詩想を代表す。『厄』が紅は四行節百五を重ねたる集中の最長篇にして、浮世ゆかしと思ひそめし若き沙尼が、寺を遁れて、若き戀に悩む綿々の恨を叙して精細を極め、少しく冗漫の弊ありと雖、想形共に集中一方の代表者たり。

泣望の戀を語るや、熱情時に奔逸して頗る藤村の『若菜集』に似たり。さはれ、彼の特徴は熱烈なる感情に非ずして可憐なる情操に在り。かの『村娘』『鶴鶴』などに現はれし同情、『古鏡賦』『盃賦』などに現はれし想像、『秋の歌』『燕の賦』に見ゆる自然感情等、其の著しき者なり。就中『燕賦』は、此の點に於ける代表作品にして、『圓き頭』は葉隠れにかゝる葡萄を見る如く、胸の和毛の白妙は、女子の恥づる肌に似て、瞳の色のらうたさは、潮に澄める一つ星、上毛の艶の紫は、朱冠に彫れる雲母の如く、やがて八重の潮路を越えぬべき力ある翼を打ち、霞める青柳に新月を呼び出づる清き音に歌ひ出でたる燕子に寄懷せし者、恣態文辭最よく整ひ、集中の佳作なり。

『新著月刊』倒れて泣望は『新小説』『明星』『小天地』等に其詩を掲げしが『落梅集』『曉鐘』の刊行と同じ年に第二詩集『行く春』を出しぬ。詩想は前集と大差なしと雖其の懊惱は空想より來る事少くして、現實の上に存する事多くなりしは『暮笛集』に見ざる所頗る晚藤二家の傾向に似たり。特に時事問題に憤を發して『遺憤』と『あゝ杜國』とを爲し、は彼の現實的傾向の極端に走りし者なるべし。爾來作者の翹望せる『新なる日』は、愛と詩との満足せられたる華やかなる若々しき趣味の世より、轉じて平和の世特に平和の田園生活となれり。『牧笛』より始めて『夕暮海邊』に立ちて『夕の歌』『小鼠』に與ふ『郭公賦』『金絲鳥』を放つ歌等は、即ち平和の理想を謳ひし者。『野に立ちて』及『南畝の人』に至りては、全然農民生活の讚美にして、藤村の『勞働雜詠』と歸趣を一にす。

以上述ぶる所を通覽するに、泣望の詩風は、大體に於て藤村の後影を追ふに似たり。而も其可憐なる情操を抒ぶる一面のみを傳へて『天馬』『鷺の歌』『深林の逍遙』の高渾なる情調に及はず。唯『石彫獅子の賦』の一篇、長鬣背に巻き、廣胸強く張りて、夏の日盛り光を浴びて立ち、威風百獸を懼伏すべき石彫獅子の雄姿を寫し、進んで藝術

の不死無窮を叙べて、雄偉壯麗、彼れの作に始めて見る所、宛然藤村が『一葉舟』の詩想なり。

詩形に關して、作者は諸般の試驗をなし、『暮笛集』の八六調以外、種々變化ある格律を用ゐぬ。但し一句一行概ね短く、晚翠の漸く長からんとするに反し、漸々短からんとする傾あり。之を學ぶ者、青年の間に少からざりき。

當代の詩壇、三家を除けば他は皆振はず。從來の作家にては、鏡幹新詩社を起し、『明星』を發刊して短歌及新體詩に勉むるあり。三十四年其詩歌合集『紫』を公にせり。後進にては、高安月郊、蒲原有明、兒玉花外、岩野泡鳴、今村敬天等あり。月郊は、三十三年小説詩歌合集『金字塔』及『夜濤集』を出し、特有の聲調を以て勁健の詩想を歌ひ、有明は『帝國文學』『明星』『文庫』等に現はれしが、三十四年『片袖』に掲げし『高潮』最稱せらる。花外は集『風月萬象』(三十二年)を出し、泡鳴は『露霜』(三十四年)を公にし、敬天は同じ頃『短笛長鞭』を出せり。又かの『文庫』の詩家醉茗は、『無弦弓』を刊行せり。三十四年には詩集の出づる事盛なりしも、皆前年の作を編みし者に過ぎず。實際に於ては、詩壇沈降、新興の氣運一段落を告ぐるに至れり。

第三節 戯曲

明治二十年前後に方り、文學界の新潮として其勢を逞うしたる寫實主義が、戯曲演劇界に入りて誤つて邪徑に走り、性格寫實精神寫實の旨を離れて、徒に事件寫實衣裳道具の寫實に流れたりし由は既に述べぬ。又かの歐化主義の反動として起りし國粹運動と同様の原因より來れる保守主義の運動が、從來の夢幻史劇を推崇して斯界の前途を妨遏せるをも説きぬ。二十六七年に至る劇壇の形勢は、要するに此の二流の消長に外ならざりしなり。然れども少數の識者は、之に満足する能はず、去つて新戯曲を求むるの念甚切なりき。前期劇界を叙し終るに蒞み、一言云ひ及びし坪内逍遙の評論は、即ち此の少數者を代表する者と言ふべし。

二十六年秋逍遙は『早稲田文學』の論壇に立ちて『我國の史劇』を論じ初めぬ。彼は先づ本邦古來の史劇作者を擧げて其作品を批判し、併せて自家の史劇に對する見解を述べたり。曰く、巢林子の史劇は一種の夢幻劇にして、單に眼に翹る技術としては、巧妙驚くべきも、嚴密に言ふ史劇としては、事件荒唐、人物單純、到底今の觀客を

坪内逍遙

して歴史的幻影を起さしむるを得ず。唯、人情を描寫せんか爲に、時所と人名を過去歴史に藉りしに過ぎず。默阿彌の史劇は其の作意過去の事相人物の再現に在るを以て、多少歴史的寫實に近づけりと雖、彼や素と天稟の世話物作者にして、其の學殖識見共に、時代物英雄物作者たるに足らず。〔彼は僅かに野史俗説を典據として、史實人物を想像し、而も其直覺は現在以外に及はざるを以て、時勢境遇地位器度人情及風俗を異にせる過去の事相人物を寫して正鵠を得ん事到底望むべからず。況んや治亂興亡の理を釋ねて英雄の心事を描出するをや。學海の史劇に至りては、過去再現の主義を極端に解釋して單に正史の事實を其儘に取り、道具衣裳臺詞等盡く之に依り、言はゞ非劇的非詩的の考古博覽會なり。蓋し脚本の精髓は個々人物の性格を因となし、境遇を縁となし、此の因縁によりて成れる著大なる業果を描き、以て人事の真相を現はすに在り。従つて史劇は件の人物を過去の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の真相を過去事實の中に表現せんと力むる者のみ。さればかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすか如きは抑も末なり。史劇の過去相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば則定る。學海の如

きは此本末を顛倒せる者なり。櫻痴の改作史劇は言ふに足らず、其の新作史劇は唯史的人物を取り來りて之に當代俳優の個性を與へたるのみ。作者の筆に上りし史上幾多の英雄は、盡く之を演する一俳優の儀型になり了らすんば止まず。加ふるに作者自身の影子を帯びて、俗智世間智に長け、明察機微に通ずる人物ならざるなし。彼等は現在を洞觀し、未來を先見し、奇禍偶福、忽其の由來を察し、他人心事の隱微忽之を忖度し、事の成敗は一に此の世間智の優劣によりて決すとなす。斯くの如きは獨り史上の人物と異なるのみならず、所有人間の通有性を失ふと。次に逍遙は新史劇に反動して起りし夢幻劇崇拜の潮勢を摧かんと勉め、夢幻劇の形式美は近松當時の時勢に在りて始めて發揮すべき者なりと論じ最後に將來の改良策に及び從來の劇の根本的欠點は、第一叙事詩の體と劇詩の體との混淆、第二性格を無視して事件を主とせる事に存するを以て、先づ此點に改良を加ふべしと説き大に泰西式の性格劇を主張せり。

逍遙か史劇論は、げに斯壇の新聲にして、性格劇の發展を鼓吹せる點に於ては全然斯道の『小説神髓』なり。文學革新の著手せられて茲に十年、演劇革新の合理的に

近き論議は始めて世に出でぬ。是より先き『柵草紙』の囑外、穩健の思想と妥當の見解とを以て斯界を警醒せしも、彼れの態度は冷靜なる批評的にして、逍遙の如く熱烈なる鼓吹的に非ず。従つて其の江湖に對する影響遂に此の如くなる能はざりき。逍遙は、其の著眼の卓拔嶄新なる、其行動の華やかにして鼓吹的なる、假令多少の缺陷誤謬あるを免れずと雖、文壇の先覺評界の明星として、卒先の功没すべからざる者あり。

然れども、史劇論の評壇に與へし影響の大なりしに反し、作劇乃至劇場文人に及ぼし、感化は、不幸にして甚小なりき。『小説神髓』ありて小説界の作風一變せしが如くなる能はざりき。蓋し劇界の革新は、脚本劇場俳優の革新以外、觀客の思想を一新するに非ざれば得て望むべからず。而も當時の觀客は概ね教養なき舊世界の遺物なり。其水新七の徒、尙よく梨園作者として其の餘喘を保つは、即ち此の惰力の恩のみ。斯くて爛熟せる舊劇、模倣陋劣の新作は、依然として活氣なき劇界を支配し、活歴流行以來、兎に角舊劇の範裡を脱せんとせし寫實史劇すら、櫻痴一たび蹉跌して、復起らすなりぬ。

此時に方りて、日清戦争起り、戦争文學の流行は所有方面を侵して演劇界にも入りぬ。此勢に乘じ、戦争劇を標榜し、俄然として頭を擡げし者を所謂壯士芝居とす。壯士芝居は二十五年西島越中村座に始めて政治的世話物を演せし川上音次郎一派の劇を指す。此の粗放露骨なる芝居も、二十七年『意外』『又意外』等の新作を演ずるに及びて、不思議にも江湖の喝采を博し、『戦争見聞誌』以下の戦争劇を出すや、一時舊劇の壘を摩し、眇たる貧書生の一團、都下の大劇場に據り、積年の大勢力たる歌舞伎俳優をして後に墮著たらしむるに至り、劇評家は驚きて劇界革新の機運と稱し、之を呼ぶに新演劇を以てし、彼等を名つくるに新俳優を以てしたり。此影響は延て大阪に及び、濟美館等の壯士役者團を起し、四方に傳播して、少からざる團體を見るに至れり。

此の運動は總ての點に於て美術の域に遠きに係らず、演劇史上甚重要な事件なるべし。然れども之を詳説するは本論の主旨に非ず。茲には唯脚本の方面より觀察するを以て足れりとなす。抑も劇界革新の事あるや、其の鋒先は先づ史劇に向けられ、世話物の天地は風靜なる別世界なりき。思ふに世話物に在りては、稀

世の名作家黙阿彌の存するありて、寫實的世話劇必しも貧少ならず。然るに、二十六年黙阿彌没して、凡庸作者獨り存し、且其作る處、明治の假面を著けたる舊幕物に過ぎざりしかば、新時代の新世話物としての價值終に空し。新演劇の勃興は、即ち此の虛を衝けるに外ならず。彼等の脚本は拙劣を極むれども、其水新七よりは明治の現實に近し。即ち此運動の事効は、曩きに史劇に施されし寫實主義を新に世話物に導きし點に存す。換言すれば、世話物に於ける活歴主義の擴充に在り。

然れども、是史上の價值のみ。之を脚本の側より見れば、筋の支離滅裂なる、寫實の皮相なる學海櫻痴の作よりも甚しく、明治の世話物としての價值は全然缺けたりといふべし。顧みて劇壇の状態を見れば、舊夢幻劇の精粹復びもて嚙され、活歴物、川上物の總てを壓倒しつつ、無前の繁榮を致し、斯壇の刷新、脚本の改良は、前途望洋の歎なき能はざりき。或は敢て新作をもつて梨園の關門を打破せんと試みし者なきに非ざりしも、時運は未だ至らず。新作家にして上場するを得る者、依然櫻痴居士に止まり、其すら改作の俗劇のみ用ゐられて、『豊島嵐』の如き比較的好新脚本は遂に容れられざりぬ。

「桐一葉」

此の時に方りて史劇論の記者逍遙は奮つて創作壇に立ち、二十八年初より、春の屋主人の名を以て史劇「桐一葉」を『早稻田文學』に連載し、二十九年の初より「牧の方」を同誌に連載し、完結するや、共に之を刊行して廣く世に問へり。蓋し是れ著者か理想とせる脚本に非ざるべきも、亦以て多年の所論の具體的發表の第一着歩と見るを得べし。

「桐一葉」は豊臣家遺托の重任を負へる片桐市正且元を主人公とする悲劇にして且元が駿府に使用して大御所の難題を受け、已むを得ず淀君關東下向の儀を承諾なし、別に苦計を胸に秘めて大阪に歸りしに、讒者の爲に關東に内通せりと稱せられ烈しく淀殿の不興を蒙るに端を發し、奸臣の阻格偶發の錯誤の爲に、胸中の秘計遂に施すべからず、乃ち望を大阪に絶ち居城攝州茨木へ退かんとして、曉霧の中長良堤の上に木村長門守と訣別し、後事を托して悄悄と落ち行くに至りて終結す。之を本筋として、且元の一女蜻蛉が長門守に對する戀物語を織り込み、淀君が夢幻思想の狂態を以て之を彩り、總て七幕十五場に分る。其の材料は概ね正史に取りたるも、作者は素と正史の事實が單に段幕に按排せられたる者を以て劇と見なさず

るが故に、事件の進行を助け、人物の性格を活現すべき幾多の醇化を加へたりき。作者は此の悲劇の葛藤は、一時關東に屈して大御所百年の後を待たんとする且元の秘計を知らざる淀君の猜疑憤怨と、且元を退けんとする大野父子の野心と、相依り相助けて且元の苦忠を破却し去らんとする所に存すとなし、遂に且元をして退身の已むを得ざるに至らしめたり。故に其の終結は、普通の悲劇の如く悲壯の死に非ずして、惨苦の生なり。事件の取捨按排は總て此の著想より來る。作者は又、筋の統一を求むるが故に、挿話の爲に離裂する弊を避けて、一道の本流全篇を貫かしめぬ。作者は又、人物に作家の影子を宿し、劇に作家の觀念を寓するを忌むが故に個々の人物各特殊の性格を具へて、其の間に褒貶を挿まず、學海櫻痴の弊套を擺脫して、最自然的なる描寫を勉め、特に且元淀君に於て其の著しきを見る。作者は又、俳優の爲に人物を作るの非を知るが故に、舞臺上の注意周到なるを期しながら、強て當時の梨園に媚びて團菊輩の藝風に迎合せん事を勉めず、而して其文字に於ては、從來戯曲の修辭たる七五調、掛詞、縁語等を用ゐたる叙事詩的分子尙少からず、雖、概して精練暢達、一代の才筆没すべからざる者あり。

曙光は暗黒を破れり。曉鐘は寂寞を破りぬ。默阿彌以下過渡時代の史劇を超出して近世思想に成りたる新戯曲は、其の頭角を露はしぬ。百千の群議は一人の實行に若かず。脚本改良の聲起りて、所謂評論家の聲々は其聲徒に大にして、功果一物をも残さざる事數年、茲に至りて、漸く劇壇渴望の一端を充たしぬ。

然れども、此劇を讀む者、主人公の苦忠に同情を表すると共に、其性格の明確を缺けるを覺ゆ。思ふに且元は主君の面前に奸臣と激争し、乾坤一擲悲壯の最後を遂ぐるが如き老忠臣に非ず。遠謀深慮、内忠奸を操縦し、外老翁を控制し、以て主家百年の安寧を致すか如き智者に非ず。壯烈の意氣は重成に及ばず、老熟の智略は家康に若かず。謀りて誤り、誤りて斷せず。因循姑息、一日を緩うせる者。斯かる概括的性格は稍明なりと雖、其云爲常に含糊にして直截ならず。或は故主の恩に感じて孤忠盡瘁するが如く、或は首鼠兩端自家の安きを計るが如く、悲劇的境遇に處して煩悶の痛烈なる者表はれず。壯烈なる大破綻なくして、早く身を退くなど、往々吾人の同情を冷却せしむる事あり。要するに性格悲劇に非ずして境遇悲劇なるべし。蓋し「桐一葉」は完結せる戯曲に非ず。且元の悲劇的最後は、別に續篇ありて

之を詳悉すべかりしなり。作者は三十年「沓手鳥孤城落月」を『新小説』に掲げ以て此の脚本の局を結べり。

「孤城落月」

「沓手鳥孤城落月」は大阪落城の一刹那を舞臺として、且元の最後を描ける悲曲にして、落城の早朝、生命旦夕に逼れる重病を推して家康の陣營に候し、秀頼母子助命と共に、禮を以て出城を迎へん事を請ひ、且自ら其の使節たらん事を求め、十年の苦心、鬢髮霜の如き老武士、籠を急がして城に向ふに始まり、本多正信の計略に阻まれ、自己の重病に時機を失ひ、遺恨千秋、本丸炎上して母子生害となり、乃ち悲憤の涙を揮つて城門の前に瞑目するに終る。總て三幕七場を以て成る。通篇悲愴の調を以て被はれ、階庫階上淀君の狂亂秀頼の愁歎人の腸を斷たしむるは勿論、末段且元落命の一場、巻を捲うて痛憤せしむ。而して曩に模稜含糊の趣ありし且元の面目此の一場に至りて漸く明かにせられぬ。彼や素と、石田三成の所業を以て猿才覺となし、機軸の熟するに時方ありと中心竊に職期しながら、大御所存命の中は平和を陽に一時を欺き、徐に計を運らすを以て唯一の希望、畢生の事業となせる者。彼の苦心經營せるも、卑怯と罵られ不忠と認められしも、總て此に出づ。彼をして悲

劇的最後を遂げしめし者は、主として、大勢を遠觀すべき神智なく、因循姑息一時の小策を弄して機微の動くを悟らざる彼自身の性格なりといふべし。「孤城落月」を「桐一葉」と共に二部曲と見るを得ば、始めて性格悲劇の面影を彷彿すべきなり。

「牧の方」

此の曲は幾多の瑕瑾ありと雖、とにかく明治文學の一記念にして戯曲史上期を劃すべき著作なり。小説史上空前の事業を成し、春の屋主人は、茲に再戯曲史上の大業を成せるなりき。而も其活動は此に止まらず、更に「牧の方」を創作せり。「牧の方」は、鎌倉執權北條時政の後妻牧の方を主人公とする悲劇にして、牧の方が所出政範の愛に溺れ、之を將軍職に就かして尼御臺の榮華を學ばんとし、乃ち千幡將軍尼御臺及義時を除かん大陰謀を企て、事現はれて義時の前に自盡するに至る筋、總て六段十七節、北條時代初頭の罪惡史中特に著しき一女丈夫の末路を描けり。然れども、此曲は之を以て、完結せるに非ず。續きて出つべき「源實朝」及「左京兆」と三部曲の形式をなし、以て義時を主人公とする一史劇を爲すべかりしなり。故に此曲は女性牧の方を主人公とする獨立の曲に非ず。隱謀家牧の方を中心として、更に大なる隱謀家義時の前半生を描けるに過ぎず。唯惜らくは作者續稿を出さず

して止みぬ。されば單獨に之を評論せんは、頗る當を失するも試みに其の脚色を窺ふに、政範を擁して簾中の權を振はんとする牧の方、牧の方を擁して全權を握らんとする稻毛父子、稻毛父子を使喚して政範に代らんと巧む平賀朝雅、是等總てを自滅せしめ、將軍を擁して執權の天下を謳はんとする義時、巴の如く相追うて、一起の伏野心は野心と戦ひ、隱謀は隱謀と相衝き、所有罪惡を盡す。故に場面變化に富み、事件參差として常に讀者の注意力を緊張せしむ。然れども、一部の主動たるべき牧の方の隱謀が、常に黒幕に潜める義時の爲に操縦せらるゝ傀儡に過ぎざる趣あるか故に、時々之に對する感興を破らる。且此の曲には、幾多の豫想せられたる事實を含み、讀者の歴史上の智識に委ねて其の叙述を省略せる者多きを以て、讀者をして、此の曲は甚だ大なる史劇の中間に位する一小部に過ぎざる感を起さしむ。牧の方の性格の如きも、直截明晰なるに係はらず、悲劇の勇者として讀者の注意を一身に集むべき偉大の資質を缺く。其の隱謀もお自ら所動的にして、所有外敵と戦ひて壯烈なる没落を遂ぐるか如き大觀は遂に見る事能はず。

之を「桐一葉」に比するに其の目的が、歴史の發展の隱微なる消息を描破するに在

る事兩者相同じ。『桐一葉』は豊臣家滅亡史の裏面に潜める隱微を描くを主とせし如く、『牧の方』は鎌倉三代將軍時代の罪惡史の隱微を寫すを主とせるに似たり。唯取材の時代及史料の選擇に於ては、『牧の方』の取りし所は、古今罪惡史の頂點にして、史的研究の鋤未だ入らざる荒野なれば、作劇家が想像を逞うして一大悲劇を編み出すべき餘地を存する點に於て、大に『桐一葉』に優れたり。蓋し作者は先づこの神秘なる罪惡史に著眼し、其黒幕の陰に立てる義時を認め、之を中心として此時代の史實を網羅せる三部曲を作らんと企てしなるべし。然れども、局面宏濶事端繁瑣に過きて劇の進行に餘裕なく、且事件の全部が陰謀の連續なれば、總て秋霜逼促の趣ありて、詩興お自ら乏しきを免れず。此の點に於ては、『桐一葉』に一籌を輸せざるを得ざるなり。

逍遙は上掲三曲の外、尙『二葉楠』の一篇を『新著月刊』に掲げたり。小楠公を主人公とせる抒情詩的小戯曲なり。三十一年『孤城落月』と共に、『菊と桐』と題して出版せり。逍遙か作は何れも場に上らざりき。然れども、聰明なる評壇の大部は嘖々之を稱揚し、新作劇家の之に倣ふ者漸く現はれぬ。高安月郊は、二十九年『重盛』をものし、

福地櫻痴

翌年『眞田幸村』を『早稻田文學』に掲げ、其他櫻田綠堂、土居春曙、松居松葉、及水蔭漣山人、柳浪等、各戯曲の才を一二の創作に試みたりき。

三十年夏、櫻痴居士、俳優團十郎、芝居師森田勘彌の應援を得、從來の立作者、舊劇の殘類たる新七、其水を排斥して、自ら歌舞伎座の立作者となりぬ。是より先き櫻痴の作の演せられし者少からざりしも、舊慣の關門固うして未だ立作者たるを得ざりしなり。されは此事あるや、江湖の囑望一方ならず、往々斯界の形勢一變して、新作大に行はるゝに至らんと夢想する者さへありき。然れども、彼が入座以來の作は、『俠客春雨傘』を始め、舞臺面の變化面白く、役々善く俳優に適ふのみにて、材料着想に些の新彩なく、脚色主旨に何等の統一なくして、全然舊劇を後塵を拜するが如き者なれば、到底新時代の要求に應すべき者に非ず。要するに新舊過渡の作家たるを免れず。純乎たる新文士にして梨園の關門を打破せるは、蓋し松葉を嚆矢となす。三十二年松葉、史劇『惡源太』を草し、左圍次に附して上場す。俳優を標的として人物を作りし舊式の者なるが上に、脚本としても失敗の作なりと雖、幼稚なる梨園は、先づ此種の新作を以て啓發せらるべきなり。

松居松葉

右の事件を一小波瀾として、劇壇の状況は不活潑を極めたり。往年の脚本改良會の再興とも見るべき青葉會起りしも、何等の功なく、新演劇は一敗地に塗れてより、僅かに、知名の小説、例へば思軒譯の『替使者』紅葉作の『心の闇』『冷熱』等を脚色上場して、一時の人氣に投せんと試るのみ。元來小説の脚本化は、大阪の劇壇にては通例の事なれども、脚本化其事既に不合理なるか上に、脚色者概ね無識の輩なれば、脚本としての價值問ふに足らず。總て劇界の進歩は、いたく小説界に後れ、唯一の機關雜誌『歌舞伎新報』も一たび倒れ、三十三年に至りて、漸く復興して『歌舞伎』となる者あるに止まる。

纏つて作劇界を通觀するに、史劇の盛行に比して世話劇は甚貧しく、悲劇の發達に較して喜劇(滑稽劇)は皆無に近し。前期末紅葉がモリエールを翻案せる『夏小袖』『戀の病』に似たる者すら當時の喜劇界に現はれざりき。

戯曲の翻譯は二十九年の初『早稻田文學』に掲げし逍遙の『ハムレット』最注目すべく、苦心精練の好譯なりしが、惜いかな中絶す。三十二年『太陽』に出でし戸澤姑射の『オセロ』當時出色の譽あり。三十四年月郊が譯出せる『イブセン』の社會劇は、北歐現

「イブセン」の社會劇

代の名家の作『社會の敵』『人形の家』三篇を收め、獨得の詩筆を以て、最新思潮に觸れたる傑作を紹介せり。其他二三の譯述特に擧ぐべきなし。

第四節 小説 其の二

心理解剖、性格描寫、乃至情操細叙の小説が文壇を風靡するに方り、其の超世間的傾向の極端に趣かんとするに不満を懷き、社會的傾向、即ち實世間と小説との深密なる交渉を旨とする傾向の盛ならん事を望む者漸多く、實業小説、宗教小説、諷刺小説、政治小説、家庭小説、社會小説等、種々の形式を以て其の新要求を表せり。此の風潮は、夙く二十九年に其の萌芽を發し、二三の論者か、或は活動を叙せる實業小説、或は道念高き宗教小説を求めたりしが、民友社が社會小説の名を掲げて之を募集するに及び、此論漸く盛なり。然れども、社會小説の意義に至りては、頗不明にして、或は所謂社會主義の小説となし、或は戀愛を以て唯一の材料とせる從來の小説に對し、政治宗教等社會の所有部面に廣く材を取る小説に附せる名稱となし、或は個人を描き、心理を寫せる小説に對し、社會を描き其實相を寫せる小説を指して言ふと

なし、造語解釋各區々たりき。而も實世間に觸れよ。社會に相渉る作を出せと勸むるに至りては即ち一なり。

論壇の風潮斯くの如くなるに際し、創作壇に於ても一新潮を揚げたり。社會的諷刺小説の續出即ち是なり。風葉の「失戀詩人」柳浪が「非國民」は、共に當世文壇の一部を諷刺し、思案外史が「五濁惡世」は宗教界の葛藤を諷し、漣山人が「從五位」は華族を刺り、美妙齋が「飛影」の名にて出し、「白日鬼」は元老排斥の鋒鏘を見はし、某作家の「初霞」は某内閣を暗刺し、何れも實世間の現象に向つて諷刺の矢を放てり。斯かる一時的性質を帯べる作品は、小説の理想より見て決して推奨すべきに非ざれど、其觀察及諷刺の著しく實世間に密接し來りしは、注目すべき現象ならずとせず。

抑も此の社會的ならん事を求むる主義は、藝術獨立主義と共に、文藝に於ける二大主義にして其の消長は小説史上悠久の事實に屬す、前者は之を人生相關主義と稱すべく、教訓主義、道徳主義、諷刺主義等を包括し、後者は文藝獨立主義と稱すべく、性格主義、心理主義、寫實主義等を包括す。前者は人生と密接なる交渉を有するを利となし、實用主義、差別主義に流れて永遠の生命を失ふに至るを弊となし、後者は

平等無私百世に通じて誤らざるを利となし、出世間主義、非國民主義に流れて人生と相關するなきに至るを弊となす。曲亭馬琴、勸懲の旗幟を翻して教訓小説を出すや、人生相關主義は一大潮流をなして明治以前の文學を貫流し、末流弊を生じて世益主義、實用主義に走りぬ。此に於てか藝術獨立主義の反動は、逍遙の「小説神髓」となりて現はれ、寫實の大旗を擁して勸懲の舊主義を打破し、明治新小説は此間に生れて赫々たる功績を文學史に残しぬ。然れども末流遂に實世間と離れ、國民の性情に遠かり、偏に小主觀に出てたる情操小説、異邦民性に出てたる翻譯小説を作るに至る。此に於てか、反動は再び人生相關主義の側より起らざるべからず。方今小説の新傾向は、即ち是なり。

内田魯庵

げに此の事實は、既に社會的諷刺小説に現れぬ。三十一年に入りては、更に内田魯庵の宗教小説となりて現れたり。抑も江戸時代儒教及武士道の人心を支配せし以來、宗教思想が文學の根本思想となる事、其跡を絶ちぬ。明治の作家に在りて佛教思想の片影を小説に寄せしは、獨り露伴あるのみ。基督教の如きは、未だ文學の思想となるべき地位に達せざりき。魯庵は即ち此の棄てられたる基督教の思想を

「暮の二
十八日」

取り來りて之を小説に寄せしなり。魯庵は不知庵の名を以て前期の批評家たり。後専ら力を翻譯に注きしが、此の年轉じて筆を創作に染め先づ「暮の二十八日」を出し、大望を抱き事業に憧るゝ青年が、事志と違ひ、煩悶遣る方なきに際し、宗教的光明に接して迷夢忽ち覺め、終に靜平なる家庭生活に適歸すといふ筋を描いて一種清高の趣を帯び、從來陰慘の小説の間に一新面目を開けり。爾來『太陽』『新小説』『文藝俱樂部』等に掲げし短篇皆宗教趣味を帶ぶると共に、社會の諷刺を含む。就中今様「厭世男」は執拗優柔なる自稱薄命詩人を描き、「浮き枕」は上流社會が權勢と富みとを濫用して横暴を逞うする當世の社會現象を寫し、「片鶉」は失戀の令嬢が悲慘の運命を藉りて、官人と商人との間の情弊を、暗刺し、其他の作概ね之に類す。

此の時に方りて、時代精神の論文壇に起り、時代の精神を顧みず、之と相關する事なき文學は價值なき者なり、大文學は常に時代精神を代表し、當代國民の感情に最明瞭なる發聲を與ふる者なりと唱へて、益々文學の社會的傾向を鼓吹する者ありき。『太陽』の高山樗牛先づ之を唱へ此の精神を表はせる文學を稱して近代主義の文學と言ひ、近代主義の文學は藝術獨立主義の文學に非ずして、十九世紀末の日本文明

社會の眞精神を描破せる文學なりと言へり。『新小説』の魯庵次て之を説き、方今の小説、徒に戀愛に狂して社會と相關するなきは、是れ作家が明治思想の眞相を辭せざるが爲ならずやと言へり。就中魯庵は、嘗に論議するのみならず、創作界に立ちて之を實現せんと勉め、三十二年「落紅」霜くづれ「血櫻」電影「青理想」等を連出せり。不幸にして筆力其の抱負に伴はず描寫冗漫に流れ、此種作物の成功の要素たるべき沈痛の風趣を缺き、其の着想に至りても、新舊思想、信仰、道德の衝突に關する觀察必しも、神に入らず。然れども、其諷刺や批評や眞摯切實にして從來作家の如く冷嘲的ならず。勉めて時代の實相に觸れんと試みたる態度は、亦以て異彩とすべきなり。

此氣運は延いて新進作家の間にめぐり、宙外の「腐肉團」『時事新報』、風葉の「政黨」『新小説』、秋聲の「情けもの」『同等』社會的傾向の者少からず。三者は共に當今の政黨員を主題とせる政治小説にして、就中「政黨」に、政黨員の家庭を寫せる所最讀むべし。然れども、是等も亦魯庵の如く觀察の皮相にして、時代政治界の神に入らざるの弊を免れず。却て作家從前の作なる心理小説に劣れり。其他前田曙山は『東京朝日』

に「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等を連載し、當世の暗黒面社會の裏面に於ける種々の現象を暴露せしめ、固より社會的小説の成功せる者に非ず。斯くして、三十二年の社會小説は、何等の著しき痕跡を残さずして止み、爾後復發展せざりき。

さはれ、實世間に觸接せよとの要求は、磨すべからざる真理を含み、理想派の泰斗として知られたる露伴すら尙之を唱ふるに至り、心理小説の作家も人を精寫するを主眼とする從來の着想以外、社會を寫さんと試みる者漸く多く、個人の研究以外社會に近接せんとする傾向漸次現はれたり。所謂新寫實的傾向是なり。

小説の新寫實的傾向とは、從來の寫實よりは一層廣濶なる意義を有し、個人より進んで、個人對社會の實相に入らんとする者なり。即ち從來の心理的傾向が新に興れる社會的傾向の影響を受けて成立せる一變形に外ならず。此の傾向は夙く『多情多恨』より『金色夜叉』に移りし場合に現れしが、三十二年頃より宙外、柳浪、天外、風葉等の新作家の製作概ね此の流風を追ふに至れり。宙外の『新機軸』影日なた「先づ彼が以前の作に對して新彩を加へしが、論壇に文士生活問題起るや、田園生活論を

後藤宙外

主唱して、悲觀説を寛和せんと勉めしより此のかた、其の論旨製作の上にも現はれ三十五年の「遺る光」乳母が家「新小説」を始め、總て精細穩健の筆、田園の情景を寫し來つて獨擅の妙あり。「ありのすさび」以後の作者の特徴は最よく、此の和平自然、波瀾なく奇巧なき田園小説に發揮せられたり。

廣津柳浪

「纏れ糸」

「骨ぬすみ」

柳浪は多作第一の目あれども、佳作多からず。「羽拔鳥」以後三十五年迄の間に、舉ぐべきは「纏れ糸」「骨ぬすみ」「紫被布」「二人やもめ」「亂菊物語」「雨」等の數篇に止まる。「纏れ糸」と「骨ぬすみ」とは、三十二年初に『新小説』と『文藝俱樂部』に出で、前後連關せる者、「紫被布」と「二人やもめ」とは亦、同年『文藝俱樂部』に分載せし前後連續の小説「亂菊物語」は長篇の新聞物、「雨」は可憐の小品なり。何れも機智縱横、地の文は粗笨なるも、對話の巧妙なるを以て之を補ひ、優に戯曲的活動を示すに足る。一篇の情趣恍惚として觀照するか如き美感を催起するなきも、痛切人の肺腑を衝くの實感を誘起す。總て曩日の特徴依然として存すれども、唯其の着想、往年の如き陰慘の事相、病的戀愛はた變崎の人物に向ふ事なくして、事相人物自然に出で、戀愛亦純真となり、「紫被布」の如きは多少當年の俗を存すと雖、尙「二人やもめ」に於て之を調攝せり。特に「纏

れ糸「骨ぬすみ」は、着想筆力共に新發展の先頭に立ち、河内屋以後の佳作と稱せらる。惜むらくは作者の達筆、一氣呵成に過ぎ、従つて濫作の弊あり、量に於て一世に超出するに係らず、明治文學の傑作として傳ふべき者甚多からず。

新寫實主義は、風葉天外に至りて自然主義的傾向を取るに至れり。抑も此の主義は近代思想界の一潮流にして、文藝に在りては、美の極致を發揮するよりは、むしろ實際生活を描寫せん事を求め、總ての思辨冥想を排して、唯自然のまゝを體現せんとするなり。故に此主義に成れる文學は美醜を識別して詩材を選択するを要とせず、自然世界百般の人事、其儘に寫せるもの、やがて詩篇たるべしとなす。されば罪惡必しも避けず、卑猥必しも去らず、悲惨必しも却けずして、社會に存する程の事相は一毫の微も之を網羅せんとなす。是素より其の極端なる者に就て言へるなれども、風葉天外の作風多少之に類する所あり。

小栗風葉

「戀慕流」

風葉は曩に「寝白粉」を作り、社會暗黒の一面に筆を着けて評壇の問題となりしが、三十一年より次年に亘りて「戀慕流」「墜下地」等を出して再注目を惹きぬ。前者は「讀賣」に連載せし者にて一管の吹奏斯界の天才と矚目せられし青年樂師と、洋樂界多

望の秀才と稱せられし少女とが、近親を棄て名譽を棄て、多感の情燭に殉せしが、彼等が藝術の誇りと共に懷きし未來の空想、夢の如く破れ情に脆く意に弱き彼等は社會の劣敗者となりて暗黒の裡に葬られ、はては辱められ汚され、赤繩遂に完きを得ずして「埋れ木」の樂師と少女との如き結末を告げし薄倖の譚を叙し、尙此の本筋に編み込むに、暗黒界裡の消息を少からず綴れる傍筋を以てした。此の篇實に風葉の名を重からしめし傑作にして、又當時の彼を代表すべき總ての性質を具備す。後者も亦薄倖の藝人を主人公となし、戀と子の愛と捩み纏れて遂に狂ひ初むるに至れるを寫し、文章の雅文を學べるを取とすべきも、前者と同じく葛藤の深刻なる戀譚りを綴り、當時社會の一部に存する思想煩悶を描き出で、妙趣なきに非ず。凡て作者の文辭凄艶にして滑脱精緻にして婉曲、紅葉門下、最も師の衣鉢を傳ふと稱せらる。其の詩趣饒かにして一種の光彩あるは柳浪天外の遠く及ばざる所、獨り鏡花に一等を輸するのみ。且其の結構の緊密にして戯曲的開闢に富む事眞に柳浪に接踵すべし。然れども、其着想の餘りに現實的なるや、時に不倫の行爲を寫して顧みず。絢爛なる詩筆も遂に其の醜を蔽ふ事能はざるを憾む。三十

四年以後に於ける「醒めたる女」「黒装束」「心中くらべ」「沼の女」等は皆此作風を追へる者にして、就中「醒めたる女」は所謂本能満足主義乃至個人主義の思想を含み、當代思潮に關聯する者あり。

小杉天外

「初姿」

天外は此の風潮の最極端なる代表者と見るを得べし。彼は從來諷刺小説家として知られしが、三十三年「初姿」を公にするや、揚言して曰く、小説作家は唯實世間に在るが如き人物を描き、其の人物の當然爲すべき行爲を正直に丁寧に筆記するを勉むべし。小説は其事相の如何を問はず、作家の空想せる世界に讀者の空想を遊ばしむれば足る。要は讀者をして實世間の事に感ずるが如く感せしむるに在り。即ちかの十九世紀後半の佛國自然派の主張を以て信條となすに似たり。爾來公にせし幾多の小説必ず寫實小説の標榜を冠し、勉めて叙事を省き獨語を斥け、對話と動作とのみを以て一切を描き去らんとす。蓋し此傾向は突然「初姿」に始まりしに非ず。既に三十二年の作「眩枕」「亂れ髪」「蛇いちご」「娘心」後に「左繩」と改む等皆作意なく、結構なく、日常囁目の人情世態を實寫するを主として、其の山つて來る因果の關係を追求する事をなさず、概ね断片的にして有機的の一個體を形成せざりき。

「初姿」は此の傾向の益明かに益意識的になれるに過ぎず。之を其の後篇「戀と戀」及後れて出でたる續篇「にせ紫」と併せ見るに、人物事件の出入偶發的にして、讀者の同情を集中し、其感興を昂上せしむべき中心の人物事件なく、唯或る性格の人が或る境遇の下に正に爲すべき行動を實寫せる者なれば、之を断片的に見るに、個々自然の姿を寫して美醜共に嫌ふ所なし。爾來「女夫星」「新學士」等の作、皆此の作風に從ひ、客觀寫實の筆淡々として他奇なく、唯事件の變化進行に興味を感ずるのみ。

天外が自然主義は「はやり唄」に至りて代表的製作を出せり。嘗に「初姿」以來の寫實の筆力漸く蕉境に入り、巧妙ならざりし對話も漸く圓熟し來りしのみならず、佛國自然派の好題目たる遺傳と境遇とを以て總ての行爲を説明せんと擬し、且つ其の題材を下層社會に取りて不倫の醜事をも避けざりし事など、所有方面に於て作家の特質を發揮したりしなり。「筋は淫亂の血統を享けし女性が、夫に他の女あるを知りて嫉妬の末不和となり、次て姦通をなし、狂ふ仇花親の種」と流行唄に唄はるゝに至る始末を寫し、自然の模寫を以て藝術の要義と觀じ、善惡美醜の取捨をなし、又は醇化理想化を加ふるを欲せざる作者の實驗小説の標本と見るべく、此の見地

「はやり唄」

よりすれば、彼が一代の傑作なり。大體に就て言へば、女主人公の行爲の因て來る所、第一遺傳、第二境遇に存する事、おぼろげながら認められ、總ての動作をば是より演繹し得へきに似たり。然れども、各個に就て見れば、云爲唐突に失して因果の關係模稜に過ぐ、蓋し作者は其の主義よりして叙事の細きを望まず、心理描寫の主觀的筆法を用ゐず。只管外面に現はれたる對話と動作とによりて其の進行を示さんとす。斯る客觀的描法は、常に感覺を本とするを以て、時として冷々淡々、同情の温きを缺き、想像の貧少と詩趣の缺乏と、亦之に伴ふ。特に下層社會の病的現象を寫すや、風葉と同一對境を取りながら、詩筆遙かに及はざるを以て、益々感覺的に流れんとす。

泉鏡花

自然主義的傾向に對立してロマンチック傾向を代表する作家を鏡花となす。彼は現實界よりも虚靈界を重んじ、自然界よりも神秘界に傾き、其の空想は人間實を超越して夢幻境に入り、其の空想を載せたる詩筆は、幽玄の高調を帯びて空靈の域に上る。彼は現實自然の境地を描きて寫實小説と呼ぶべき者を作らざるに非ず。

然れども、之を作るに方り、常に一種の神秘なる着想と幽玄なる筆致とを交へ、或は實世間の裡に超自然超人間の或物を覓め、然らざれば、現實界と神靈界との間に或交渉を發見せんとす。唯其の想像の飄逸なる、往々常軌の外に顛脱するを以て世或は妖怪小説の名を以て其神秘的美點をも没し去らんとす。然れども、人生何時か神性を絶えたる。社會に光明的半面と暗黒的半面とあるか如く、人間に凡と聖とあるか如く、人生亦尋常知見の及ぶ半面に、不可思議なる神秘界を藏せずんばあらず。天外は即ち、かの平凡なる人生の半面に就き、其下層社會暗黒界を寫せる者にして、鏡花は即ちその神秘なる人生の他の半面に就き、下層社會暗黒界を描ける者なり。

『鳥物語』以後、三十二年に入りて益々幽玄を逞うし、錦帯記『通夜物語』黒百合『湯島詣』五の君』より、『三枚續』高野聖』註文帳』袖屏風等を経て、三十五年『女仙前記』起請文等に至るまで、一として瑰奇の想を凝さざるなし。中に往々材を尋常の境地に取りし、所謂寫實小説に近き者、例へば『通夜物語』湯島詣』三枚續等の如きあれども、其は神秘的分子の量の多寡によりて分るゝ皮相的差異にして、根本的性質に至りては即一なり。

「湯島詣」

故に其構想概ね或特徴を帯べる人物、或特種の神秘的事實を中心として、全篇の動作之に向つて集中するか如き型式を取る。例へば「錦帯記」は「月夜五色の彩暈の出現に、妖女お禮の運命を附會し」、「通夜物語」は「吉原のお職丁山といふ傳法肌の女性を中心とし」、「湯島詣」は「愛世に辛酸を嘗め盡したる勝氣の少女蝶吉を中心となし」、「三枚續」は「我儘育ちの氣象者の柳屋お夏を中心となして、三者共に數奇の運命を叙し」、「黒百合」は「古來人跡至らず魑魅魍魎の巢窟と傳へられし石瀧の奥深く、稀世の珍草黒百合の咲けりといふ事實を中心となし、之を採取せんとて此の神秘境に足を入れたる花賣少女と、之を救はんか爲に怪窟を搜りし少年華族とを點出し來つて一篇幽玄の曲を作り、「女仙前記」は「轉生といふ靈界の現象を取りて貴族の奥方の前身を描きしが如き、即ち是なり。就中「湯島詣」「黒百合」「高野聖」等は當時の傑作として傳ふべく、前者は神秘的分子の少き方の作を代表すべく、後二者は神秘的幻境を寫せる好標本とすべし。

「高野聖」

鏡花は人生の下層暗黒の一面に詩眼を注けり。社會凡俗の間に薄遇せられ、壓伏せられて孤弱伸ふるに處なく、而も先天の氣象鬱結して反抗の氣焰を揚げ、進ん

で凡俗界を翻弄せんとする者、即ち彼が創作せる人物なり。其の凡俗反抗の一面より見れば、飽くまで意力の人の如くなれども、底を叩けば熱情の暗涙を湛ふ、故に其の敵に對するや猛然として破壊の暴腕を振ふと雖、其の知己の懐に在りては赤子の如く可憐に、半生の薄命を混々たる涕涙に渾ひ盡さんとす。斯かる境界に同情せる作家は曩に一葉女史あり。然れども一葉の人物は飽くまで人間なりしに異なり、鏡花の人物は、常に一種神秘の色に包れて獨特の怪氣を現はし、遂には縹渺として超人間の幻境に入らんとするなり。若し夫れ彼の文章に至ては、洵に當代の雋逸にして、詩韻饒かに幽默掬すべく、省筆一過すれば簡淨勁拔餘情言外に在り、精描細寫すれば愼密委曲錙銖を分つ。二方面を兼具して何れも短句短文錯落して變化の妙を極む。其の一たび瑰奇の想像を載せて奔逸するや、或は深山畫寂かなる「高野聖」の夢幻境となり、或は天麗かに氣澄み深林幽水咽んで滿地のうつき花雪の如く、圓として一鳥鳴くなき「黒百合」の別乾坤となり、其の對話の形を以て人物の口を出づるや、熱罵怒嘲、紙面に躍動する所、紅葉風葉か濃艶妖冶の方面に於けると同じく、斯抗之に接踵する者を見ざるなり。

以上は明側より見し鏡花の一斑なり。然れども、彼の作品は必しも至醇の藝術に非ず。其の傾向の極端に走るや、暗側乃ち現れずんば止まず。彼れの缺點は怪奇を弄び怪奇を銜ふに在り。筆端の凄愴脚色の幻怪を以て想髓の淺薄を蔽はんとするに在り。彼が多數の作、此の弊に陥らざる者甚多からざるを憾とす。

文學轉進の運に乗して發達せし小説は略之を説きぬ。翻つて小説界の他の半面、即ち歴史小説傳奇小説の消息を覗ふに、時運の影響極めて少く、又新進の名手出づるなく、依然として舊態を存せり。蓋し斯道の大家は、數百年にして僅に存する者、學識筆力準備、共に尋常にして足らず。馬琴の大才を以てして、其の歴史小説は事件と人物とを史上に求むるのみにて、其内部生命は純乎たる江戸時代の者たるを免れず。況んや過渡の空氣中に呼吸する明治文壇に於てをや。今の世に在りて歴史小説の逸作を得んは殆ど不可能に屬す。されば前期以來、唯新聞物に生命を維き、俗衆に投じて文壇の一隅を占有するのみ。但し讀者の數を以てすれば、必しも心理小説に劣らず。特に弦齋の如きは、版圖の大なる事當代恐らくは匹なから

ん。茲に少しく此種の作家を取り、總て寫實小説心理小説はた社會的小説等の範圍に入らざる小説類を叙せん。皆文學の進運に洩れし者なり。

村上浪六

浪六は、二十八年『たそや行燈』を出し、次て『大阪城』『當世五人男』『原田甲斐』等をも、皆例の遊俠氣質を寫せり。就中『五人男』は二十九年より『朝日新聞』に連載せし作者仕中の長篇にして、一屋の破窓に苦學を共にせし五人の書生が風雲を見て世に立つに至れる消息を描ける者。舞臺は明治なるも精神は依然として水滸傳的なり。弦齋は、世話小説をも作れども、觀念的的心理的傾向は全く之を缺き、唯新聞紙上其の日々を面白く讀ませ、間々婦幼の教訓を含めたる實用小説なるに過ぎず。

村井弦齋

『衣笠城』『日出島』『小猶』『深山の美人』等、作甚多く、當時健筆第一と稱す。就中『日出島』は、其量を以てすれば、明治文壇の大作にして、二十九年より三十五年に亘りて『報知』に連載し、卷を重ねて十二に至る。百般の社會事象を取りて悉く材料となし、總て之を作中人物の閱歷として表出す。以て明治世態の皮相をも知るべく、無學者の學問にもなるべし。涙香は、近時速りに西洋通俗小説の翻譯又は翻案を『萬朝報』に掲げて依然時好を維きつゝあり。以上三者は當時の通俗小説家、新聞小説家とし

黒岩涙香

て知られ、文章平易、取材多面最俗耳に入り易し。大阪にては『朝日』の南翠此の時好小説を代表す。二十八年頃の『荒海貫一』最世に知らる。

濫柿園の歴史小説は多少の進歩を見る。二十八年の『最上川』『北條早雲』等より『伊達政宗』『島左近』『五月女阪』『脱走兵』に至るまで、或は浪六を模せる痕ある者もありしが、後お自ら一家をなし、主に戦國時代の戦争譚を綴り、美人勇士を點出して因果應報の結末を描けり。大體に於て依然舊様を脱せされども、文章豪健にして内容に適應せるは、讀みて心地よし。多くは『日々新聞』に出で、新聞小説家として讀者の多き、弦齋浪六に次ぐ。麗水は文章家なり。『不二の高根』『首陽山一帯の風光』等紀行美文に在りては、麗藻美辭有數の地位を占むるも、小説に在りては内容貧少なるか爲に、文辭誇張の弊に陥る。二十八年の『半月城』を始め『さんざ時雨』『照日松』等皆此の類にて、總て濫柿園の後影を蹈めり。其他松葉青軒『大阪朝日』の加藤紫芳、渡邊霞亭等、皆多少の作あり。就中紫芳の『臺灣陣』二十八年は鄭成功の事蹟を描いて當時に名ありき。

麗水

深原流傳

終に臨んで殘存せる舊作家中、諷刺滑稽の一面を記さん。南新二は舊文學戲作界か殘し、最巧妙なる滑稽作者にして、前期中『新作十二番』に出し、鎌倉武士及現期に入りて『太陽』に掲げし『滑稽道中雙六』の如きは、輕妙洒脫、現代の傑作と稱せられしが、二十八年末遂に没しぬ。幸堂得知は、黄表紙の系統を引ける戲作者にして、亦輕妙なる滑稽の筆を弄し、簗村と共に斯道の殿たり。元來滑稽の名作は、明治の文壇に乏しく、僅かに是等舊時代作家の什を以て其の面影を偲ぶのみ。

吾人は既に此期の小説を説き了りぬ。翻つて當時翻譯界の趨勢を窺ふに、其の進歩亦著しき者あり。抑も明治文學の一進轉歩をなせしは、一般學術の進歩と文藝趣味の發達とに因る事論を俟たすと雖、之か原動力となりし文學者評論家を練成して此事業を爲すに至らしめし者は、即ち泰西の思想、文學ならすんはあらず。今や國民の外國語を解する、智識亦往時の比に非ず、新著新作の舶來する者、古來の名著傑作と共に日に多きを加ふ。されば我文學者は、管に之を玩味して自家の著作に資するのみならず、之を翻譯して江湖に紹介する者益盛になれり。此に於て

か、翻譯文學は文壇の一勢力となりて絶えず創作壇を刺撃し、兼て國民をして泰西文學の面影を偲はしめぬ。而も此の活動は小説に於て最も著しきを見る。

曩に思軒、鴈外等の翻譯界に立つや、翻譯家未多からず、紹介せらるゝ泰西作家作品の範圍甚狭く、且つ其の譯出紹介、多くは抄譯梗概譯若くは翻譯案に過ぎずして、謹嚴忠實なる譯述は極めて寥々たりき。然るに今期初頭に入りては、文科大學、早稲田専門學校、明治學院等は、數多の新進翻譯家を出し、従つて翻譯紹介の範圍もリットン、ユーゴーに限らず、古今東西に亘りて廣く之を勉め、且つ其技倆精力も著しく進みて、翻譯案に非ず、抄譯にも非ざる完全譯を出すに及べり。今次を追うて少しく之を述べん。

森田思軒

思軒居士は、當初「報知新聞」に據り、其の「報知叢談」に抱一庵等を率ゐて譯筆を揮ひしが、後轉じて「國會」に入り、「萬朝報」に移り、老熟の手腕を以てユーゴー、ポー、ベルヌ等を譯し、三十年末没するに至るまで、斯壇を啓發して怠らざりき。不知庵も亦斯界の先輩にして二十九年以後に於ては、ゾラを譯せる「戰塵」、ユンウヰイを譯せる「彫像師」を始め譯述少からず、文辭暢達を缺くと雖、譯風誠實の稱あり。彼が創作壇に活動

内田不知庵

小金井喜美子

せし素地をなせりと見ゆ。鴈外は前期に引きかへて譯筆寥々たりと雖、妹女史喜美子、レルモン、トフの「浴泉記」(二十七年)、「ビンデルマン」の「名譽夫人」(二十八年)、「ハイゼ」の「浮世のさが」(同年)等數篇の譯あり。皆幽婉なる雅文を以て之を綴り、活動の趣なき代りに氣品高尚なるは鴈外に似たり。三十年二人の譯稿を集めて「かけ草」を公にしぬ。若松賤子は亦女流翻譯家にして、英語の素養文藻の才力斯壇の異彩と目せらる。『女學雜誌』及『閨秀小説』に收めし「忘れ形見」は「ミス、プロクトル」の韻文を散文に譯せる者、三十年(没後)遺稿として出版せられし「小公子」は有名なる「パーネット」女史の作を譯せる者、共に明治翻譯界の珍として永く滅びざるべき名作なり。其の他飯田旗軒、卯花庵、抱一庵、嵯峨の屋等、皆二三の譯あり。斯壇繁榮の序幕は開かれぬ。

「かけ草」

若松賤子

「小公子」

長谷川四迷

三十年に入りて、翻譯界は局面を開展しぬ。『第二閨秀小説』なる喜美子の「心つくし」桂香の「初戀」故賤子の「ローレンス」小品なりと雖、幽味掬すべく、今野愚公が「コッパル」を譯せし「結婚」及「小説家」共に筆力見るべし。此の時に方り、文壇に跡を晦す事十年なりし二葉亭四迷は、再び當年の詩筆を揮うて斯界の進運を鼓舞しぬ。二十九年

片戀

末『片戀』を出してより『肖像畫』『浮草』を『太陽』に『夢語』『親心』『腐れ縁』『酒袋』を『文藝俱樂部』に掲げ、獨得の言文一致を以て暢達渾熟の逸品を作せり。就中『片戀』はツルゲネーの原作にして、ライン河畔の自然美を背景として詩情清婉の片戀物語を編める者。『浮き草』『親心』亦同作家の名品にして、特に後者は、母親の至情に感激して墮落娘の悔悟する筋を叙せる者。共に長大ならずと雖、内容の神韻に富めると譯筆の精嚴遒勁殆ど渾成に近きことにより、嶄然として當代に傑出し、二葉亭をして斯壇の第一流として、隅外と對峙するに至らしめぬ。其の他『文學界』の星野天知、馬場孤蝶、戸川秋骨等、連りに南歐文學を唱へ、飄逸優婉の詩想を鼓吹して、其の斷片を紹介するに勉め、『帝國文學』の上田柳村、之に呼應して近代佛英のロマंचチック派文學を説き、主として小品の翻譯に力を用ひぬ。長田秋濤は、梗概抄譯の傾あれども『浮かれ蝶』『戀のナポレオン』『王冠』等、比較的長篇を出して、斯壇に貢獻する所ありき。

斯る間に譯風漸く謹嚴に越き、抄譯梗概譯に非ず、又翻譯にも非ざる完全譯の出づる者漸く多く、而も小品短篇に止まらずして比較的長篇を首尾悉く譯出する風漸く盛になりぬ。先づ淺野憑虛は、三十五年『スケチ、ブック』を公にせし以來、翌年には

森陽外

即興詩人

『クリスマス、カロール』翌々年には、『グイカー物語』を出し、皆譯文の清爽、譯風の着實を以て知られたり。次に從來翻譯案物を以て名ありし『萬朝報』の涙香も、亦眞面目の態度を以て、『レ、ミゼラブル』を譯し、『噫無情』と題して、三十五年の紙上に連載せり。此の時に方り、曩に、二十七年の頃、『桐草子』に譯載し初め、一時草子の中絶と共に中止し、三十年再び『めさまし草』に稿を續けし、隅外の『即興詩人』は、起稿以來、八年を経て完結刊行せられぬ。原著はアンデルセンの傑作『インプロヴィザトル』にして、カムパニヤ生れの即興詩人がローマの歌妓と相愛して而も相悟らず、流浪落魄、幾多の轉變を経て、中心の愛嘗て渝らず、遂に歌姫か邊陲に窮死するに及び、其の遺書を得て始めて濃情熱愛十年衰へさりし眞相を知り、感謝と追悼との悲涙を尼院の新墓に澆ぐと言ふ筋を詩人が自叙の體にも、し、ローマ及其附近の自然と人事とを背景として清婉の戀物語を綴りし者なり。想像饒かに叙述微に入り、詩趣縹渺として清楚の情拘すべく、譯筆亦優雅圓熟、例の擬古文ながら、『埋れ木』に比して一層の銑煉を加へたり。且此篇、從來紹介せられざりし北歐文學の一名什なるを珍とすべきのみならず、堅實の意志不斷の精進を以て完成せし譯者の意氣を貴むべしとなす。

三十六年に至りては、翻譯文學の機運頗に動きぬ。是より先き、歐洲近代の文學者、特に現代新思潮を代表すべき作家の思想製作連りに我文壇に入り、或はニイチエを鼓吹し、ハウプトマンズーデルマンを紹介し、ワグネルを論じ、シユンキークウイッチを説き、或はゴルキーの浮浪思想を唱へ、マーテルリンクの神秘思想を道ひ、一代の思潮將に一變せんとする兆あり。従つて紹介翻譯雜然として群起し、小説に在りても富永蕃江の『緋文字』、『ホーソン』、吉田萩洲の『走馬燈』、『ドーデー』、本多増次郎の『驢語』(同人)抱一庵の『聖人歎盜賊歎』、『リットン』、『巴里の秘密』、『シユ』、『秋濤の』、『椿姫』、『ヂューマ』、『紅葉の』、『鐘樓守』、『ユーゴー』等を始め、長短各種の作甚多く、韻文戯曲の譯と共に無前の盛觀を呈しぬ。就中抱一庵は、一時文壇に忘れられし者、再ひ往年の譯筆を揮ひ、絢爛の致なしと雖、瘦勁にして一種の趣あり、『椿姫』は二十八年の頃雜誌『白百合』に掲げ初められしのみにて、久しく中止せられ、八年後の今日一部となりて出てし者なり。原作は所謂十九世紀五大作の一にして、愛すべき人にして世に愛せざりし薄命の人に洪大なる同情を濺ぎ、愛すへき人を愛せざる社會に攻撃の矢を放ちし者。譯筆は此同情を傳へんには華飾に過ぎ、妖艶の中純清の韻ある一篇の風趣を失へりと雖、五

原抱一庵

長田秋濤

『椿姫』

尾崎紅葉

鐘樓守

百頁の長篇、暢達なる口語體を以て揮灑せる所、亦斯界の珍となすに足る。『鐘樓守』に至りては、五大作の隨一、『ノートル、ダム、ド、パリ』の譯にして、文筆の烹煉に苦心する紅葉が、多年の心血を傾注して其の繡腸を絞り、中途病魔に侵されて尙筆を絶たず、稿漸く成りて忽ち永眠に就き、遺稿空しく絶世の才筆を偲はしむるに至りし貴重なる長編なり。げに量に於ても質に於ても文壇稀に見る曠世の鉅作をば、病軀衰餘の筆を驅りて完成せし者なれば、其成就の由來に在りて既に少からぬ價值あり。況や其文と其神と共に原作に渾融融合するに於てをや。此小説は、巴里城内赫耀たる文明の花と、其裏面に潜む暗愴たる魔魅の風とを背景となし、ノートル、ダム、鐘樓守を主人公とし、薄命の少美女を之に配して綴りなせる史的小説にして、中世の大遺物たるノートル、ダムの大伽藍を叙せるあたり、精微神に入り、之を中心にして百般の事象を編み出し、十五世紀文明の首都巴里の面目を躍如たらしめし不朽の名作なり。

第七章 最近文學の概観

明治文學も漸く長けて、今や三十に餘れり。願れば二十年前後、文學革新の事ありて以來、思潮變遷文運進歩の急速なる宛ら走馬燈の回るか如く、昨の新は今の陳、今の新は又は明の舊たらんとす。所謂過渡文學といふ名稱は、獨り十年代の文學に與ふべきに非ず。大局の上より見れば三十年間の文學は畢竟過渡文學の連続たるの觀あらん。十八九年の交、文壇を聳動せし春の屋、及其他の小説家の述作は、二十八九年に至りては、夙く陳套に屬し、之に代りて起りし觀念小説、心理小説、社會的小説の新作家が滔天の勢を以て其の清新を誇りし述作も、三十五年の今日に至りては、是亦新時代の人心を維くに足らずなりぬ。獨り小説のみならんや。二十七八年に起りし和歌俳句の新采も、茲に至りては沈滞して進まず。新體詩亦晚翠藤村等に底止して後久しく、戯曲は逍遙の試験的述作以外、又論壇を驚かすなし。而も之を刺衝し鞭撻して新文學を起す大動力となり來れる世界の思潮は駭々として進む事暫くも止まず。國民の之に參する事、日に月に密接になりしを以て、文壇永く此の狀勢を持續すべきに非ず。早晚一轉して更に新しき大文學を生せざるべからざる機運に際會せり。

當時の文學は、恰も五里霧中に彷徨するか如し。舊に慊らず新を得ず。曠昔謳歌熱中せし文學も今日既に興趣を感せず。今日興趣を感せざる文學を後來如何に變すへきかを知らず。懊惱煩悶の容、文界に普く、二十九年より三十一年に亘れる活氣疾く去りて、沈靜の空氣斯壇を覆へり。此の時に方り、二十年以來の文學者にして、時勢の犠牲となりて影を潜め、姿を隠す者漸く多く、或は筆を燒きて他に轉じ、或は轆轤落魄世に埋もれ、或は筆を案じて病に仆る。矢田部尙今、外山、山相次て没し、井上巽軒復歌はず。逍遙身を教育に抛ち四迷復び隠れ、賤子、稻舟、一葉、薄氷續いて仆れ、思軒及硯友社の二三子同じく世を辭し、美妙嵯峨の屋遂に當年の勇なく、湖處子、忍月、各他方面に轉じ、鷗外稀に筆を取ると雖、雜誌『萬年草』は遂に『めさまし草』の如く盛なる能はず。露伴は江畔の悠遊に龍蛇の氣を沒了し、紅葉は硯友社の諸傑と共に俳道に耽らんとす。三十五年より六年にかけては、文星落つる者連りに、子規、樗牛、先つ没し、紅葉萩の家之に次ぎ、綠雨少しく遅れて三十七年初、亦之を追ふ。斯くの如きは、皆時勢の一大旋轉をなすへき現象にして、正に新陳代謝の輻軸に當れる者なり。今次を追うて此の時代の狀勢を窺はん。

一、俳句和歌及新體詩

俳句界の形勢は、既に三十一年に定まり、日本派の趣味作風全國に瀰漫して、新教養あり新趣味を懐ける青年俳家皆之に赴き、競うて俳會を結び、俳誌を起さんとして。就中大阪は、地方俳文學の冠冕にして、三十二年發刊の俳誌『車百合』は、正に此の俳運を代表す。此誌の主幹松瀬青々は後進中の雄にして、其他新進の作家從來の俳人と並び進みて多少の發展あり。概して言へば、天然より人事に進み、敘景より抒情に移り、單純より複雑に赴き、瑰奇より平淡に向へり。三十四年出版せる句集『春夏秋冬』は、實に此時代の粹を蒐めし者にて、之を『新俳句』に比すれば、一見直に上述の差異を認むるを得ん。然れども是等の發展は素と根本的變化に非ず。前年播種せし所の者を收獲したるに止まる。故に其の内容形式に於ける文學的價值は遠く創業時代に超ゆと雖、其の活氣お自ら當年の如くならず。三十五年に於ける『瀬祭書屋俳句帖抄』『増補瀬祭書屋俳話』の出版、及子規の病没は、恰も此事業の大成を告ぐる標章の如くなりき。

獨り日本派のみならず、秋聲會派も亦『半面』『卯杖』などの俳誌を出して、多少の進

「春夏秋冬」

歩と繁榮を示せり。然れども、時下文運の大發展に伴ふに至つては、則ち未し。

筑波會の如きは全然振はず。

次に和歌壇に於ては、『明星』一派大に振ひ、放縱なる感情を歌うて一種の詩調を出し、拮据奇峭、舊慣を脱して新風を開き、以て一時青年の間を風靡したり。明治の和歌か思想形式共に舊觀を改めしは、實に此の際に在り。詩題は概ね、當時の新體詩と趣を同うし、主として戀愛を歌ひ、次に叙景又は小説的趣向の人事を詠するを勉む。而も其の思想にロマンチック傾向を帯べる者あり。新思潮に觸れて青年一部の感情を表出せり。此の作風を指導せる作家は、即ち『明星』の主幹鐵幹、及女作家風晶子にして、特に上述の特色を極端まで發揮せしは晶子なり。三十四年に出でし鐵幹の『紫』及晶子の『亂れ髪』の二集は、恐らく此二家を説明する好箇の標本たるべし。然れども、『明星』の和歌は此時以來著しき進歩を見ず、作家吟詠少からずと雖、遂に此の樊裡を出でず。

風晶子

萩の家の門流にては金子薫園最著はれ、雅正の音萩の家の衣鉢を傳ふと稱せらる。三十六年末、萩の家没して歌壇一將を失ふ。竹柏園の作風新舊の間に出入し

温雅平正、上流社會の若き男女に喜ばれ、門流甚廣く、特に女流を多しとなす。三十四年の選集『竹柏園集』及三十六年主人の作『思出草』は、正に此派の面目を覗ふべく、趣味傾向に於て『明星』一派と兩端に立てるを見る。根岸派の歌人、三十六年に至りて『馬酔木』を刊行し、依然萬葉の古語を繰りしも、論議の聲の大なるに比して製作の佳なる者少く、要するに子規没後新消息を傳ふるなし。

轉じて新體詩界に移らんに、三十五年以後の形勢は、俳歌兩界に比して遙に活氣に富む。藤村筆を此の方面に絶ちて復出せず、半月羽衣其舊作を蒐めて『半月集』三十五年、『霓裳微吟』三十六年を刊行するに止まりしも、晚翠、秦西羈旅の中より新聲を『帝國文學』に齎し、泣菫月郊有明花外泡鳴の徒、亦『明星』新小説等に奮ひ、新進には吉野臥城、平木白星、山崎紫紅、前田林外、相馬御風、石川啄木等あり。斯壇一時盛觀を呈せり。

土井晚翠

晚翠の吟咏は、三十五年に『西遊微吟』亞細亞大陸回顧の歌、三十六年に『セイヌ江上の離別』ミロのキーナス、司馬子長名山藏書の歌、嗚呼高山樗牛、南歐銷魂吟等あり。詩調例によりて豪宕瑰麗なりと雖、前年に比べて幾分の枯蒼と幽婉とを加ふ。嘗

て『曉鐘』に現はし現世に於ける淨樂界の翹望、益著しく、特に此の理想實現の世を我日東帝國の未來に求むるに至れり。曰く、四海の潮うち交り、東西の文明觸接す。二十世紀の日本は世界の思想を集め、文藝を集め、渾然融合せる一新思想文藝を形成すべき天職を負へり。絶東未來の文壇は光明に充てり。國民新たに歌あれよと。かの藝術を讚美して其不朽を謳歌せる『司馬子長名山藏書歌』ミロのキーナスの如きは從來此作家に見ざる所なりと雖、思ふに上述の詩想の發して此の方面に向ひしなり。

瀧田泣菫

次に泣菫は、『行く春』の後半に於て平和の理想と藝術の悠久とを歌ひしが爾來吟詠多く自然現象の觀察に出で、其の觀察著しき特色を帶ぶ。三十四年の『虹の歌』新小説三十五年『公孫樹下に立ちて』小天地、三十六年『翡翠の賦』新小説『雷神の賦』明星、金剛山の歌、新小説『天馳使の歌』同等は其主要なる者にして、中『虹の歌』は、旅人獵人、情人、海人、農人、隱者の六章に分れ、各特種の生活と自然現象とを結合して飄逸なる空想を凝し、『公孫樹下に立ちて』は、公孫樹の落葉を詠じて實在の證明と觀じ、『翡翠の賦』は翡翠の生態を見て胸に包める清き秘密を想ひ、『金剛山の歌』は、高山の曙色を歌ひ、自

然を人格化して該嶽の雄姿を歎美し、雷神の賦は、朔風吹雪怒濤雷鳴を觀じて一條の神活的譚歌をなし、天馳使は泣菫作中の長篇にして、なかだむあまくだりの二章に分れ、伊弉諾黃泉行の神話と裂天女の傳説とを結合し、天と黃泉と中絶えて諾冊二尊長へに別れ、子孫孤となりて地に殘れるを覺束なみ、天上の大神八柱の天馳使を下して之を觀しめしに、天女比治山の眞名井に浴せる時、和奈佐翁、慈悲と名くる一天女の裂を奪ひて下界に抑留せしかば、大神聞しめして、天橋絶わしより人の世に存せさりし女性の慈悲は再招き降されたり。下界是より新代の歡樂に浴し、民皆蘇るべしと詔り給ふと云ふを骨髓となし。其他霜月の一日、神無月の一夜など皆自然を靈化して幽玄の想像を凝せり。總で空想の奔逸不羈なるに於て優れ、比喻を用ゐる事嶄新、展頓才の着筆を見る。特に詩材として本邦神話を採りしは斯界に一生涯を開きし者にて、有明等の努力と共に文學史上注目すべき事象となす。月郊は三十六年『春雪集』を出し、内容の豊富にして理想の高潔なるを以て稱せらる。『杜少陵』『セレー』を弔ふ等を佳作となす。敬天牧童は三十五年『青春の詩』翌年『牧童集』を公にし、又南米諸詩人の斷篇を譯して『舶來望』の小集を刊行しぬ。然れども、

高安月郊

瀧原有明

後進作家の中最活潑なる運動をなし、は、有明花外の二人なるべし。有明は主として『明星』及『太陽』に現れ、三十六年詩集『獨絃哀歌』を公にしぬ。中『浮世の戀』戀の園』蓋微の思へる『星陣等に悲愴幽婉の戀を歌ひ、靈鳥の歌』佐太大神に空靈高渾の想を凝し、『幻影』蓮華幻境』光の歌等に神秘熱烈の憧憬を披瀝し、『若も過ぎぬ』頼は愛よ等に高き理想と聖なる信念とを吐露し、總て幽玄神秘、之を貫くに美と愛とに對する宗教的渴仰を以てす。流風正しくロセツチ等に出で、泣菫かキーツの遺韻を汲めると好箇の一對をなせり。之を要するに、有明の詩想は、眞摯敦厚、偏に人間情緒の靈化せられたる精神的淨樂界を翹望し、永生の脈精氣満ちて、時劫の進み老いせぬ愛の常かけの實現を見んと冀ふ者なり。之を晚翠に比するに、晚翠は理想實現の世界を現象界特に日東帝國の未來に求め、有明は之を心靈界特に詩人自らの主觀の發展に求むるの差あり。轉じて修辭及技巧の上に見るに、夢幻の如き幽情を傳へて晦澁なるを避けんか爲に多大の苦心をなし、或は譬喩、特に隱喩を用ゐ、或は抽象を具象化し、觀念を感覺化し、就中視聽の官能印象を交錯して表現するに甚勉めたり。故に彼の作品は、多く象徴詩の趣致を具ふ。蓋し象徴詩は、最近詩界の一潮流をな

兒玉花外

し、有明之か先頭に立てる者なり。次に花外は、前者に反して寧ろ放縱熱情の詩人なり。『新小説』に現れ、三十五年に至りては『孤槍吟』等の名什をものし、翌年『花外詩集』を出せり。彼は有明の如く、内容外形の總てに關して眞摯なる工夫をなさず、ひたすら放縱の情操を歌ふ事恰も藤村泣菫の初期の如し。

此の時に方り新詩社の詩人新に輩出し、白星林外御風紫紅啄木等各『明星』に異彩を放てり。白星は三十三年頃より現はれ、三十六年詩集『日本國歌』を出せり。收むる所『日本國歌』『亞細亞』『西伯利亞』『全地球圖を展べて』『アギナルド』『圖南の歌』『望北の歌』等一種の主張を含める抒情詩と『おこん小六機織唄』『伊弉諾伊弉冊』等、材を過去世界に取りし叙事的抒情詩との二種あり。然れども、彼れの抒情詩は、情緒の流動なく、自然の感懐なく、人生の冥想なく、唯論議し、主張し、行るに詩の形を以てせるを見るのみ。而して其の主張は、即ち世界統一人類一致の大主義にして、所謂帝國主義の實現を我日東帝國に見んと欲するなり。是を以て、霸氣横溢、措辭從つて勁健なりと雖、其の弊や流れて粗笨となり、生硬となり、最音樂的要素を缺き、不知不識詩領に遠ざかる。叙事的抒情詩の方面にては、本集中の作以外に尙『片袖』(三十五年)に收めし『心中

平木白星

前田林外

おさよ新七、『明星』に載せし合作『源九郎義經』(三十六年)等あり。詩材各多少の詩趣を帶ぶと雖、詩調例によりて雜駁逼塞なるを免れず。唯戯曲小説の材料たるべき者を取つて之を長篇に作せる勇氣を多とす。林外は白星と趣を異にし、詩想の幽怪なると、詞藻の豊麗なるを以て優る。彼れの代表的作品としては、三十六七年の交、『明星』及『百合』に載せたる『夏花少女』十二篇を推すべし。『夏花少女』は、八七調四行、八行、二行の三節を以て成るソネット形の短篇の集にして、『魔怨』『妖魔の泉』『沙雲雀』『妖女』『魔障』誰と問ひと『夏の夜の夢』等の諸篇を含み、總て恠奇の空想を逞うして、幽魔の境に入り陸離たる麗藻を凝して造形の妙に詣る。彼は所有非情を人格化せんとする事泣菫に似て、魔氣に富む事之に過ぐ。修辭の技巧に於ても語彙句法及聲調、皆最近詩人の試験として頗る見るべし。彼は又白星と共に叙事詩『源九郎義經』の合作をなし、前者の精彩なしと雖、尙當時の佳作たり。三十六年林外は、泡鳴御風と『明星』を去り、新に『百合』を刊して詩歌革新を叫ぶ。所載の詩篇皆青春の憧憬と熱情とに富む。

與謝野鐵

鐵幹は世と共に推移して凝滯せざる靈活の點に於ては當代及ぶ者なく、模倣の

巧妙却て自家の特色を失ふと雖、彼か一群の詩才を率ゐて『明星』を經營する所以は即ち茲に存するか如し。近時主として叙事詩を興すに努力し、合作『源九郎』『日本武尊』等をもものして研究を試みぬ。げに此の叙事的傾向は最近詩界の一現象にして、或は泣萱有明の神話的譚歌となり、或は白星の『おさよ新七』等となり、或は泡鳴の『鳴門姫』三十六年『白百合』となり、或は紫紅の『日蓮上人』同年となり、新體詩創始以來、抒情の一面に偏したりし詩界に始めて叙事詩の片影を現はしぬ。勿論此等は未だ純粹の叙事詩又は史詩と稱すべきに非すと雖も、唯此の傾向を以て猶ほ克く詩領の擴張を徵すべきなり。特に『日蓮上人』は、斯壇稀有の大篇にして、作者が五六年に亘り、『文庫』及『明星』に掲げて、教界の偉人日蓮を讚美せる詩篇を蒐集せる者なり。

三十七年、偶々日露戦争開けて、舉國の人心之に向ひ、新體詩の如きは暫く其の方向に迷ひ、軍歌時事詩の如きは日清戦争の當時に比して一層見すばらしく、詩篇として提供すべき者なし。此の時に方りて文壇の一方より俊峭の聲をあげ、詩界に現はれ、一時耳目を聳動せる者あり。『出塵』の一篇を『讀賣』紙上に出せる露伴即是

「出塵」

なり。此詩は露伴が公にせる最初の詩篇にして、其の引に曰く、『出塵』一部四編、其の第一編は世の悦ぶに足らぬを言ひ、第二編は詩の愛すべきを叙し、第三編に至つて空想に遊ぶも亦竟に實在の累する所となるを免れざるを述べ、第四編に於て詩と世と共に悦び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。こは是れ予が將に世に出さんとする詩集『心の跡』全巻の序として看るべしと。以て其の構想を知るべし。三月稿を起してより連載十閱月、詩界無前の長篇にして、江畔小廬の主人、世に背き俗と絶ち獨り藝術の神に齋きけるが、觀し來れば詩と世と背く事なく詩神の聖壇は小廬の中のみ存せず、天地到る處之在らざるなしと悟り、遂に廬を出で、新生活に入らんとするを叙ぶ。作家詩想の神髓即ち『心の迹』の如何なるかを知るに由なしと雖、出塵のみを見るに、理義透徹して情趣亦饒く、説論明晰にして詞藻亦豊麗、言はゞ作者か蘊蓄を傾倒して人生哲學を歌ひ出でし者にて、即ち作者の人格の詩なり。哲理の詩なり。信仰の詩なり。而も此種の詩篇は、動もすれば吟詠の境を出で、説明の界に入らんとするを以て、詩としての成功如何は、直ちに表現の技巧に關す。先づ其の結構を檢せんに、篇章の區分、論理の推歩、法度あり、順

序あり。整然として一糸亂れず。理を述べて委曲を極め、情を抒べて詳細を盡し、寓意あり比喩あり。説て至らざるなし。是を以て動もすれば、一箇精細なる論文とならんとす。次に修辭に於ては、長句短句錯綜せる間或は漢詩調を取り、或は雅文調を用ゐ、其他俳句調院本調等、未だ嘗て羈束せず、叙法變化あり、用語極めて廣く好んで用ゐる修辭法は譬喩にして、作者獨得の妙腕を發揮せり。然れども、變化縱横は動もすれば散漫に陥り、従つて妙趣畢竟部分的に止まり渾然たる一箇の藝術品たるに缺くる所あり。思ふに、『出處』を評するに獨立完結の詩に對する規矩を以てする事恐らく當を得ず。正に作者か小説に於ける人生哲學の發揮の移りて韻文に現れし者と知るべし。吾人は唯かゝる長篇を得て壇坫の氣風を鞭撻し、所謂詩人以外の奇拔なる修辭用語を得て斯界研究の好資料を供するに至りしを喜ぶ。詩形に就ては、著明なる進歩を見ずと雖、從來の詩律以外幾多の新研究は絶えずなされつゝあり。先づ晚翠は必しも七五によらず、時に長短句を試み、泣菫亦之を混用し、降て有明林外に至りては屢ソネット型の短詩を試み、泡鳴は八七七六、六四七七等各種の詩律に指を染めたり、詩語に於ては泣菫益々古語に走り、有明象徴的

用法に耽りし外、露伴の自在なる口語の使用を珍とすべきのみ。

新體詩界當時の形勢は、藤村晚翠か一世を指導したりし時とは著しく變遷し、一代の詩人二家の境地より更に一步を進めんとするに方り、曩に存せりし如き指導者を失ひ、暗中摸索、各種の研究試験をなしつゝ、未だ安住する所なきに似たり。

二 小説及戯曲

盛衰の迅速なる、進退の倏忽なる、文壇の人の如きは稀なり。特に小説界にては作家の多數なるだけ新陳代謝の現象も著しく、從來の諸家、意氣愈衰へて創作愈貧しく、露伴は、さすが天縱の文才を以て、『二日物語』『新生田川』等の名品を出せるも、未だ『五重塔』『新浦島』に駕する能はず。紅葉、金色夜叉の稿を竣らずして却て講談と俳諧とに嘔心す。三十四五年以後に在りて、多少見るべき者は、風葉天外の新寫實小説、眉山の『野人』(三十五年)宙外の『御信心』(三十六年)、鏡花の『白羽箭』『風流線』(同)及紅葉の『金色夜叉』續編續々編(三十五年)等に止まる。個々の詳細を述ぶるは繁に過ぐるを以て、茲に是等の代表として『金色夜叉』を取り、構想の大體と作者紅葉とに就て少しく語るに止めん。

『金色夜叉』

「宮は綿々たる怨を懐きて一度貫一に訴ふる所あらんとし、或は荒尾讓介にすがり、或は赤心を一枝の筆にこめて玉章を送り、或は自ら貫一を訪うて生殺を彼が手に委しぬ。貫一は断々として之を退けたれども、胸中最奥の琴線之か爲に一脈の微動を感じ、思は病床の悪夢となりて現はれぬ。會々世にも感すべき相愛の男女を窮餘に救うて其の心操を喜び、宮か去就に思ひ較べて喟然として歎す。而して悔恨懊惱の宮は再び三たび血涙を込めたる封信を送るなりき。『金色夜叉』は未だ完結に至らず。作者近年宿病に惱みて筆路益々遅々、起稿以來五年をを過ぎて漸く茲に至り、一旦擱筆するや一臥遂に立たず。三十六年晩秋空しく腹案を齎して詩魂永へに逝きぬ。斯くて此の作は未完の大作として、八百頁の長篇、彫心鏤腸の迹を留め、結構文章、所として作者の藝術的良心の影を見さざるなし。

文壇の先覺紅葉は逝きぬ。彼か文學的事業は終を告げぬ。吾人をして暫く彼を回顧せしめよ。彼は一身を以て詩神に献したりし天成の文學者なりき。文藝に對する趣味の廣きや、文學の所有種類を試みて倦まず。而も之か創作に従事するや、主題の研究周匝を極め、文字の推敲慘憺を極む。其の藝術的良心の旺盛なる

尾崎紅葉

文壇其の比を見ず。彼の將に死せんとするや、弟子を顧みて曰く、七回生れ更つて文章の爲に盡さんと。彼か生涯の事業は、一に此の抱負と覺悟とより來る。硯友社を結んで新文學興隆に盡し、も之が爲なり。門下俊才を養うて文學教育家の典となりしも之が爲なり。文學者對社會の問題起る毎に、一身を以て文學者の長城となりしも之が爲なり。千萬堂出版社(三十六年)を起して文學者に對する出版業者の迫害を防遏せんと勉めしも亦之が爲なりき。是等の點に於ては、彼は實に明治文學者の巨頭たり。唯、其の作物の傾向に至りては、紅葉は未だ文學界全般の代表者たるに足らず。彼れの代表するは其の都市的半面に止まる。彼は純乎たる都市的詩人なり。其の小説俳句は、都市の情に入るの深き、人事を穿つの犀利なる、口語對話を繰るの巧妙なる、殆ど天品に出で、之に反して、田園の情を描き、自然の景を寫せる者は、概ね皮相にして神に入らず。冥想靜思の趣致亦お自ら缺けたり。故に小説家にては馬琴よりも京傳を尙び、俳人にては芭蕉蕪村に赴かずして、植林江戸座に往き、紀行文『煙霞療養』の如きは全然失敗に歸したり。此の對比は總ての都市文學者と田園文學者との間に存し、觀察着想文體技巧等、兩者各其の特長

を具ふと雖、殊に紅葉都市的特長の粹を集め、宛然東京詩人の代表者たり。故に其の特質の範圍内にては彼れの才は多面無礙、行く所として可ならざるなく、特に其の本領たる小説は、洵に明治文界の名珠にして、其の發展推移の迹を叙しなば、直に一部の明治小説史を成すべし。『我樂多文庫』の昔より『金色夜叉』に至るまで、二十年間の作、初は江戸戯作者の面影を帯びし者、漸く移りて泰西作家の思想聲調を傳ふるに至りし始末を見るに、彼れの小説は事實に於て新舊分子の混融する所、東西文學思潮の合流する所、故かば何れ過渡の音を發せざるなし。思ふに三十年間の文學は、大局より見れば、畢竟過渡の産にして、異日精華を開くべき新國文學の基礎を置ける者。紅葉の如きは、正に此の遷轉期の偉人たるべし。

此の時に方り紅葉門下の春葉秋聲漸く發達し、徳富蘆花、菊池幽芳、中村春雨等の新作家輩出して一躍先進の壘を靡し、島崎藤村、詩界を去りて小説作家となり、其の他紅門の山岸荷葉、泉斜汀、露門の神谷鶴伴、堀内新泉を始め、田口掬汀、永井荷風、草村北星、生田葵山、杉谷代水、三島霜川、根本吐芳、木下尚江等、各其の新鋭を揮ひつゝあり。春葉と秋聲とは、三十一年頃より現はれ、夙に鏡花風葉に次ぐの目あり。共に短

柳川春葉

徳田秋聲

篇に巧にして概ね捨つべからざる才筆の傑あり。而も兩者其の作風を異にし春葉は平靜なる樂天觀を抱き、從つて田園の趣致に富み、紅葉の絢爛、風葉の妖艶なき代りに淡彩清楚、旨味掬すべく、秋聲は社會の悲痛なる方面に着想し、常に或問題を解釋せんとする傾向あり。筆力伴はざるの憾ありと雖、沈痛の趣喜ふべき者なきに非ず。三十六年の作なる春葉の「忘れ水」秋聲の「春光」極格を見れば二者作風の一斑を知るに足るべし。

徳富蘆花

「不如歸」

蘆花は夙に民友社の紀傳家として知られしが、三十二年「國民新聞」に「不如歸」を連載して、小説家としての名聲俄に揚りぬ。「不如歸」は身富貴に生れ、前途多望の青年軍人に嫁し、至醇の聖愛を捧げて琴瑟私合の歡を共にせし貴婦人が、一朝不治の病症を得るや、天緣遂に全からず、舊思想に出てたる社會道德の壓迫は、祖先の祀、家系孝道等の語を提唱せる嚴姑の口を藉りて現れ、赤繩一たび断じて相愛の二人長へに別るゝに至りし悲運薄命を叙す。着想奇なるなく、結構妙なるなく、特に其大破綻の原因を新舊思想の衝突に取りしが如きは決して清新と言ふべからず。描寫の技巧措辭の手腕、亦必しも卓越せるに非ずと雖、一篇の骨子たるべき事象の按配

は、よく從來の常套を擺脫し、渾厚自然にして頗る詩趣に富み、而も全體を貫くに一脈深切の同情を以てし、讀者をして惻々の念に堪へざらしむ。吾人が此の作に於て異彩を感せるは、筆を上流社會に着けし事なり。舞臺の廣濶事象の多端なるを以てして、尙脚色の統一、人物の描寫に累せざりし事なり。戀愛を未婚の男女に採らずして、夫妻の間に採りし事なり。特に後者は此の小説をして至醇高潔なる家庭の讀物たらしめし所以にして、又斯壇に地歩を占めしめし所以なり。

蘆花は尙、同年おいたちの記翌年思出の記次て三十五年黒潮を出せり。「思ひ出の記」は富家の子息落魄して流離艱難、境遇と闘ふ事十年、始めて開運の途に就き、至高學府に業を卒ふるを得て宿志茲に成り、萌え初めし可憐の戀の花も共に實となりて夫婦唱和の歡樂を味ふに至りし顛末を描く。趣向平凡に近しと雖、五百頁の長篇、曲折變化、徐々として人生の歸趣に到達する所、自然の妙味あり。加ふるに道念の高潔、信仰の堅固、戀愛の至醇、不如歸にも優る。蓋し新思想を體する理想の學生を描けるなり。言文一致體の文章亦圓熟老練見るべし。次に「黒潮」は材を維新後の政治界に取り、以て明治の文明、明治の社會を描き出でし一大社會的小説にし

「黒潮」

て、既出の分は其の第一編たるに過ぎず。幕府の遺臣東三郎が明治新政府の藩閥政治官僚政治に反抗して遂に憤死するに及び、一子晋が英國留學中なるを召喚し臨終の床上復仇の熱火を吹き込みて逝くといふ筋を経とし、喜多川伯夫人が理想的貞婦にてありながら、淫迷度なき夫伯爵の爲に侮辱せられ、虐待せられ、恨を呑んで乃に伏するに及び、一女道子に遺訓して終生男子に配するなからしむといふ筋を緯となし、以て明治の政治、道德、官僚、貴族乃至新文明社會の總てに對する強烈なる反抗、痛快なる批評を試みたる小説にして、寫實小説起りて以來、明治新時代を描ける者の中、最切實にして最大規模なる者なり。

中村春雨

「無花果」

春雨は早稻田出身の新進作家にして、三十四年「無花果」を「大阪毎日」に掲げて始めて知らる「無花果」は操高く情熱く信念堅固なる金髮夫人惠美耶が意志薄弱なる夫牧師を救ひ、頑陋無識なる舅姑を化し、遂に一家盡く神の教を受くるに至れりといふ筋にて、宗教小説として特に卓出せるを見ずと雖、從來の小説壇には魯庵を措いて他に類無かりしを以て一種清新の趣味ありて異彩を當代に放てり。作者は猶『小羊』三十四年「密航婦」三十五年「望の星」同人「命」三十六年「角笛」等を公にし、著

想の光明的なる事象の純真なる道念の一貫せる等『無花果』に發揮せる特質至る所に現はれ、孰れも理想的色彩を帶ぶ。彼れの作、叙事の冗漫にして對話の杜撰なるに係らず、此の特質あるか爲に、一道の情調、直ちに讀者の胸奥に迫る。然れども、長所はやがて短所の潜む處、之あるか爲に篇中の人物多くは類性にして作意亦一律に流れ、動もすれば、作者の單純なる道念の象徴たるに終らんとす。されば、『角笛』中の短篇の如きも、取るべきはむしろ『耶穌降誕祭』殉教者等の少年文學に在るべし。

菊池幽芳

『已か罪』

幽芳は『大阪毎日』の記者にして、三十二年『已か罪』を出し、次て三十四年『若き妻』三十四年『乳姉妹等』を作し、大に關西讀者に歡迎せらる。通じて之を觀るに、着想の根底には、常に西洋趣味の在るあり、脚色文章亦之に従ふ。而も觀念先づ動いて事象之に續くか故に、往々本邦に見るべからざる性格の人を描出する事あり。従つて何等現代の思想世態と相渉るなし。唯探偵小説的結構を以て讀者の好奇心に投じ、變化波瀾新聞小説の妙を盡せるを以て普通讀者の歡迎を得たり。

島崎藤村

藤村は夙く短篇を『文學界』にも、し、三十年末、うたゝねを『新小説』に出し、が、三十五年に至りて、『舊主人』『新小説』、『翌年』、『老嬢』、『太陽』、『翌々年』、『水彩畫家』、『新小説』を作して江湖の

注目する所となりぬ。皆信州客中の作にして、主に舞臺を此の地方に取る。之を通覽するに、同作者の詩に比して著しき遜色あり、着想に一種の妙工ありと雖、叙述徒に冗漫にして餘韻の尋ぬべき少し。但し、水彩畫家は多少宿弊を脱し、特に自然を寫し、田園生活を叙するには、神韻活動共に具はりて往年の新體詩人を想起せしむ。

田口掬汀

草村北星

掬汀は、三十四年『片男波』、『翌年』、『人の罪』を『萬朝報』に出し、新聞小説家として最青年讀者に喜ばれ、平淡自然、敢て一格に拘せず、時好を察してよく推移す。北星は之に反して傾向小説を主張し、三十五年の『濱子』の巻頭先づ精進主義活動主義の主張を公にし、翌年の『澄子』、『七草集』等、皆其の主張に成る。されば、作中人物の性格は一定の模型に出で、恰も此主張の傀儡の如く、云爲生殺一に是より出で、且つ其主義に専なるの極、表現の技巧に對して工夫を缺くの憾を免れず。荷風は三十五年『地獄の花』に名を得たり。材を社會の暗黒面に取り、想を人間の獸性に構へ、性格若しくは遺傳と境遇とに伴ふ小説的事件の開展を叙す。所謂自然主義者の主張を體現せるに庶幾しされど、其の主張に急なる、動もすれば自然の發展を拘束し却て世相の自然を

永井荷風

失ふ。此の點に於て北星と其瓊瑾を同うすと雖、文藻の才氣あると詩思の豊富なることは遙に之に超えたり。

小杉天外
「魔風戀風」

此等後進作家の外、自然主義的主張を持せる一派の唱首天外、三十六年春より「魔風戀風」を『讀賣』に出しぬ。作者が所謂寫實主義の詩は益現實的となり、事件人物悉く現代社會に粉本を求めて強て醇化を加へず。之を主人公の性格に見るに、感情と理性との發達に反して意志甚しく薄弱、感情の盲動は直ちに理性の反抗を受け、煩悶を極むるに係らず、意志の力を以て理性の命令を遂行する能はず、遂に己を欺き自ら辨じて感情の云爲を是認せんと勉め、依て心理の煩悶を壓伏せんとす。而も小智小才の發達、利害を見るに明にして、動もすれば、利己的打算的に陥る。斯る性格は、素と誘惑の乘じ易き所、況や青春の男女に於てをや。天外の描かんとせるは即ち此間の消息にして、正しく現世相の一端に觸れたり。而して其人情活動の主體を學生社會に取りしは、從來の寫實小説が之を脂粉の巷に取りしに比して、時勢の推移に伴ひ、最近情海の潮勢を察する事明なりと言ふべく、將來小説の人物一變の契機をなせり。然れども天外の觀察せる最近世相は、其形に偏して其神に

入らず、青年學生を描けるも、其頭腦を支配せる最新思想に及はず、爲に秀才名媛共に凡庸の資たるが如く見えたり。

幸田露伴
「天打つ浪」

此の時に方り、一道の異彩、先進作家によりて放たれたり。三十六年の秋、露伴「天打浪」を『讀賣』に掲げ初めぬ。爾來斷續未た之を完うせずと雖、着想詞藻、作者の特長を發揮し、天品所々に閃きて雲間の龍鱗、完成の壯觀を偲はしむる者あり。新寫實の風の荒べる世に、獨り其の理想的傾向を進め、人生哲學の披瀝益蘊奧に入り、且つ宗教的神秘的思想は、新彩を帯びて益幽玄の致を具へたり。其の文章に至りては、雄健周匝、神來一揮の妙益加はり、多年の蘊蓄、傾け來りて作家の面目を躍如たらしむ。思ふに露伴は、紅葉と等しく文學的修養を舊時代に得、舊文學を鑑識せる眼光を以て、泰西文學を見る。故に創作の内容外形、共に純然たる新文學なる能はず、言はば過渡時代文學者の粹たるに過ぎず。然れども彼が述作に臨むや、深遠なる研究と該博なる涉獵とをなし、準備既に成り、材料既に集らば、乃ち神興を藉りて、一氣揮灑、詩想混々として盡きず、詞章陸離として輝く。而も内に養ふ所の氣魄精神は、文字以外作風以外に卓立して容易に他の追縱を許さず。露伴の如きは、實に新舊

文學遷轉の軸頭に立ちて過渡時代の精粹を集めたる明治文學史上の一大紀念なり。

述べて茲に至り、顧みて小説壇を通覽すれば、種々の試験、雑多の提唱、皆是れ暗中の摸索ならざるなく、混沌として未だ一定の歸趣を見ず。加ふるに紅葉逝いて明治小説の中、最進歩せる寫實小説は、其の指導者を失ひ、新進作家唯、何等か新しき立場を得んとして、青春の活氣を揮ふのみ。

轉じて劇界に入らんか、不振の現状は依然たりと雖、裡に一道の暗流大變遷の前兆を爲す者あり。作劇の方面に在りては、著しき活動を見すと雖、劇場觀客俳優の方面に一新現象を呈しぬ。即ち第一、競うて新小説新脚本を演ずるに至り、第二、頻りに西洋物の翻譯翻案を歓迎するに至り、第三、新俳優は第二期の發展をなし、第四、舊俳優は屢新劇を取りて新俳優と競はんとするに至りき。時正に三十六年なり。

小説の戯曲化は、「心の闇」「髯男」に「罪」を始めとして、「不如歸」「金色夜叉」「浪子」「黒潮」「乳姉妹」等小説として最讀者に歡迎せられたりし者には、相次て行はれ、皆舞臺に上せられたり。此現象は、純粹なる文學的見地よりは、素より推奨すべきに非すと雖、社

森鷗外
「玉匣兩
浦島」

會が舊劇に飽きて何か新しきを求めんとする過渡期の現象として、必しも斥くべきに非ず。之か爲に作劇家を刺撃して好新劇を産出するを得ば、洵に文壇の慶事なり。『沓手鳥孤城落月』以來久しく消息を絶ちし脚本新作の事、三十六年復び新聲を傳へしは、多少此の間の關係に因れりといふべし。松葉か左團次の爲に書きし二三の新作は、暫く措くも、鷗外「玉匣兩浦島」及「日蓮上人辻説法」を作り、月郊「大鹽平八郎」「江戸城明渡」を公にし、北里龍堂、小栗風葉等亦一二の新作あり。『兩浦島』は浦島傳説に新意匠を寓したる二幕の小劇詩にして、上編は、浦島太郎か龍宮歡樂の夢さめて、仙界平和の空想に飽き、漸く世間の事業人間の活動を懷ふに至りしを叙し、下編は、人界三百年を経たりし後の世、太郎か裔なる後の浦島活動の事業に向つて努力せる者、仙界三年の歡樂を捨て、歸りし先祖の浦島に邂逅し、兩人手を執つて、思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれと謳ふを大筋となす。着想の存する所は批評家の見る所一ならずと雖、浦島傳説に一新生命を與へ、露伴の『新浦島』以外一新發展を加へたるは、争ふへからざる功績なり。全體、歌劇風の劇詩にして、白は總て七五律を以てし、典雅平正なる雅言體にて成る。されど此の大膽なる創意は、形式の單調科白の緩

漫の爲に、不幸にも舞臺上の失敗を免れざりき。『辻説法』は七五調によらず、雅言に拘せざりしか故に、此點に於て少からぬ利益ありき。中幕物の小篇なれども、鎌倉武士をあしらひて日蓮の英姿を寫し、雅醇森嚴の趣饒し。『大鹽』と『江戸城明渡』とは在來脚本體の史劇にして、題材の選擇表現の技巧共に『眞田幸村』の比に非ず。唯、其奇抜なる着想と雄大なる結構とに伴ふべき事件の配置、科白の練成に缺くる所あるを憾とす。

新作歡迎の氣運は延いて翻譯翻案の悦はるゝを致し、世俗迎合を事とする梨園は競うて此の種の劇を取れり。月郊の『闇と光』、『キングリア』、『水蔭の』、『オセロ』、『春曙の』、『ハムレット』、『エニスの商人』、『澁山人の』、『瑞西義民傳』、『キルヘルム、テル』等は、即ち此の要求に應じて出でし者なり。されど、皆唯、輪廓を象りしに過ぎず、素より完全なる翻譯脚本に非ず。

以上各種の新劇は皆彼の新俳優によりて演せられし者にして、曩に夢幻劇一輩に敗れて屏息したりし新俳優の一團は復び其面目を起しぬ。此の時に方り、舊劇の大立物として妙技斯道の精粹を蒐め、以て其の末路に大光明を放ちし團十郎菊

五郎左團次の三者は、三十六年秋以來、相次て幽界に入りぬ。殘存の諸優は過去の遺物に據りて新時代の好尚を維くべき大手腕ある者に非ず。是に於てか相率ゐて新劇に入り、三十七年大阪の我當上京して芝翫高麗藏等と連合し、始めて『桐一葉』を演じぬ。是れ斯界の一大旋轉機なり。蓋し、垂死の舊劇が命脈を今日に維きたりしは、主として二三名優の斯壇に於ける情性と、新派俳優に名手なきとに因る。今や此の情性を失ふ。舊劇の殘壘危しといふべし。新派の徒が杜撰なる脚本と未熟なる演技とを以てして尙舊派に優る人氣を得たるは、主に舊劇の世潮に合はざるに由る。されば舊派俳優にして演技を以て世に立たんとすれば、勢新劇を取らざるべからず。而も新俳優の跡を追うて小説劇翻案劇を弄ばんは、徒に彼等の後塵を拜するに止まる。茲に至りて我當等が新劇を求めて『桐一葉』を取りしは、獨り彼等の慶のみに非ざるなり。『桐一葉』は製作當時に論せられたりしか如く、脚本として批難無きに非ずと雖、舊型に新想を盛りたる漸進的性質は、過渡期の劇として適切なる素より翻案劇の比に非ず。況や上場の成績に徴するに境遇悲劇としての價值遺憾なく發揮せられたるをや。『桐一葉』世に出で、八星霜、今日始めて劇

坪内逍遙

壇刷新の道程に上れり。

三十七年秋、久しく教育界に隠れたりし逍遙は、再起つて『新樂劇論』を草し、國劇將來の發展に關して多年研鑽の結果を公にせり。曰く、今や國劇刷新の要迫れり。而も刷新の方針は國劇固有の要素の上に立てられざるべからず。翻つて想ふ、國劇は、其の能たるを歌舞伎たるを振事たるを問はず、悉く樂劇の要素を有す。故に刷新を計らん者は、須く樂劇たる性質を需要と好尚とに應じて發展し醇化し、以て二十世紀文明國の藝術たるに相當すべき一種の純樂劇たらしむべし。然らば從來の三種樂劇の中、孰れを取りて將來國劇の基礎とすべきか。能劇は畢竟過去の美術にして將來の好尚に適せず。歌舞伎劇亦然り。唯常盤津長唄等の振事劇のみ、醇化發展の希望あり。其の作意脚色樂曲科介扮裝等に存する缺點を除くを得ば、庶幾くは、進歩せる將來の好尚を維ぐに足らんかと。斯くの如きは本論の緒論に過ぎずと雖、純劇即科白劇を起して泰西の糟粕を嘗むるを避け、過去の國民生活を尊重して其の特質の上に立てられたる新樂劇を得んとする識見は、略之を覘ふを得。之を著者か『桐一葉』を公にせし頃の意見と比するに、劇の形式に關しては

多大の徑庭あり。蓋し當時は從來の劇を導いて泰西の科白劇に近き者たらしめんとせしも、國劇の精粹は樂劇的方面に在りて科白劇的方面に在らざるを悟るに及んで其の態度を一變せるなり。

『新樂劇論』は洵に劇曲刷新の曉鐘にして、『小説神髓』と共に、著者が文壇の先覺として常に豫言的創意を齎せる二大紀念なり。而して『書生氣質』に相當すべき一新樂劇次で出でぬ。『新曲、浦島』是なり。曲は浦島傳説に材を取り、三幕十二段に分る。

『新曲浦島』

序幕は丹後澄江浦に幻影を追うて心空なる浦島、父母に別れて失望自殺せんとするを乙姫に救はれ、歡喜して龍宮に赴く筋、中幕は龍宮三年の悅樂に人間を忘れたるりし浦島、明月の夜遙に船歌を聞き、又父母の幻影を見て人間慕はしく玉匣を形見に乙姫と別れて立歸る筋、詰幕は三百年後の故郷の變遷に浦島悔い恨む處、青年の男女來り慰め、浦島匣を開けば、白氣立騰り神女髣髴として現れ、浦島忽ち老翁となる。時に天明け旭昇り老人青年光榮の未來を謳ふといふ筋。全部曲章と振事とにて現はし、補ふに少許の白と介とを以てし、曲人は歌ひ、優人は舞ひ、樂人は三絃を主として他種々の樂器、西洋のをも併せ用ゐ、曲は場合によりて其曲節を異にし、從

來の樂曲殆ど總てを包容す。斯くの如き型式が新樂劇として成功すべきか否かは、之を當來の試驗に徴し、茲には單に其の内容思想を見んに『兩浦島』以外更に一新發展をなし、先づ現實と空想との交渉の上に存する過渡時代の煩悶を寫し、進んで現實の上に立つて理想を忘れざるは即ち新時代の新理想たるべしとの意を寓し、以て十九世紀より二十世紀に移る人生の象徴となせり。思ふに最近世紀末の思想界は此の一篇に縮寫せられたりと言ふべく、其の人生と相關する事斯くの如く緊密なるは、現代文學の中にも甚稀なり。

斯界の現状は上述の如く希望と活動とに富めり。然れども其の活動や系統あるに非ず。其の希望や、一定の光明に向へるに非ず。各人各勝手に従つて採る者なれば其の間逍遙の如きありて着實なる研究をなせるも其の勢力未だ斯壇を統一するに足らず。各自一新國劇の出現を翹望しつゝあり。

三、結論

斯くて二十年來の文壇を支配せし各種文學は新世紀の大思潮に伴ふ能はずして其の勢力を失ひ、其間に力を揮ひし先進の諸家亦道を後進に譲りて去りぬ。彼

等の文學は未だ新思潮新懷疑新信仰に觸るゝに至らず。過去國民は彼等によりて慰藉せられたりと雖、將來の新國民は、其の述作の中に自己の條をすら見る事能はざるべし。況んや痛烈なる懷疑に惱める者を慰藉するに於てをや。我文學は早晩一變せざるべからざる機運に際會しぬ。然らば即ち新世紀の大思潮とは何ぞや。

近時文壇の趨勢を見ん者、何人も其の冥想的思索的傾向の著しきに想到すべし。思想界の進歩は一日も停る事なく、思潮の推移は片時も滞る事なし。哲學美學佛辭學等の發達復二十八九年當時の比に非ず。心理倫理宗教等各科の學術蒼然として起り、加ふるに交通の發達語學の普及國力の發展は益新文明の吸收に資し、特に泰西文學の輸入紹介益盛にして彼地思潮に觸るゝ事愈繁く、其の推移は直ちに本邦思想界に影響するに至れり。此に於てか、文學界亦此の傾向を取り、人生問題心靈問題は時下文學及評論の主題となり、文學者の之に對する態度著しく嚴肅となりぬ。世には、此の問題の解決に煩悶して自殺せし文學者あり。學生あり。然らざるも心靈上の消息に觸るゝ者多少の懊惱を懷かざるなし。黒岩涙香、網島梁

川、近藤燕處、高山樗牛等が社會人生に對する觀察を公にせるは、其の一例にして、作家評家の作品言説、多くは内觀に傾き靜思に富み、進んでは心靈の堂奥に入らんとす。斯かる傾向に附隨して必起るべき現象は、文藝に於ける主觀主義なり。抒情主義なり。詩人の冥想は、概ね哲學體系の組織とならずして、却て抒情の審美境に入る。當代に於ける文藝の特徴は、實に此の抒情的傾向にてありき。

斯かる現象の由て來る所を尋ねれば、其の原因一にして足らずと雖、思ふに從來斯界に猛威を振ひし科學主義に對する反動、是か主たる者なるべし。輓近泰西思想界に於けるニイチエの超人思想、ゴルキエの個人思想、マールリンクノ神秘思想等、何れか十九世紀科學主義に對する反動ならざる。之を本邦文壇に見るに、曩に科學主義の文藝に入るや、小説の心理學の法則を以て律せられしを始め、所有文學は科學の規矩を適用せられ、客觀主義の潮流斯界に漲りしが、近時漸く反動を起し、和歌に在りては、『明星』『百合』の青年歌人の奔放なる抒情歌となり、『ほととぎす』の俳句漸く主觀趣味を尙ふに至り、新體詩に在りては、晚翠藤村より泣菫有明に至るまで、皆主觀冥想の抒情的詩調を取り、特に最近の述作に斯の現象の著しきを見る。若

し夫れ小説に至りては、理想的冥想的的主觀的抒情的の旗幟陸續として、繚り、紅葉の麾下鏡花を出し、逍遙の帷幄より宙外現はれ、露伴の天骨益靈界に入り、風葉寫實の筆漸く惱みて方向一變せんとし、春葉藤村蘆花の面目復舊時の寫實に非ず。天外の科學的小説獨り全盛を極むるか如しと雖、今後の發展容易に保證すべからず。紅葉すら晩年の作『金色夜叉』に於て作風一轉の端を示しぬ。加ふるに泰西最近の主觀思想は直ちに本邦に影響し、自我發展主義、天才主義、神秘主義等、主觀的冥想的の風潮を我文壇に洋溢せしめぬ。三十四年頃勃興したりし論壇の新ローマンチズムは、即ち此の風潮の所産にして、小説其の他の創作にて、全然此の思想に成りし者すら在るに至りぬ。

斯くの如きは思想界の新潮と、之に對する文學界活動の大勢なり。而も新要求に應じて人心を慰藉するに足るべき者未だ出でず。懷疑煩悶の態所在に現はる。獨り内容の上に現はるゝのみならず、形式に於ても、作家悉く道途に迷へり。試みに小説を見んか。内容を明治世相の寫實に取り、形式を言文一致體の文章に取りしは疑もなく、明治文學史上の一大事實なりしも、今や之に一新面目を與ふるに非

されば、其發展を望むべからず。之を新體詩に見んか。七五五七の詩律のなせる
 貢獻は、西詩の想形を移植せる功績と共に、過去詩壇の一大紀念たりと雖、之に著し
 き工夫を加ふるに非されば將來の好尚を維ぐに足らず。更に之を戯曲に見んか。
 夢幻劇打破の運動は目覺しき限なりと雖、科白劇の分子と樂劇の分子との奇しき
 混合、夢幻劇の分子と性格劇の分子との恠しき結合なる從來の型式を捨て、民性
 の特色に反り、發達せる人心に適應する新型式を得るに非されば、劇の前途祝すべ
 きに非ず。從來の文人未だ茲に想到せざりしに、今や是等の大問題端なく其の意
 識に上り、乃ち煩悶の聲を放ちて暗中摸索す。天か時か。過去文學の大星續々落
 ちて新陳代謝の期正に迫り、一方に於ては、外征の大捷國民の自覺と國力の發展を
 喚起し、文壇の前途頗る光明に充てり。目下の沈靜は衰亡に近ける時の其れに非
 ずして、將に勃興せんとする時の其れなり。新思潮に出でたる新文學起らざるべ
 けんや。

今や吾人は過去文學を送りて更に新なる文學を迎へんとす。乃ち顧みて從來
 の文學が遺せる功績に想ひ及べば、吾人が先進文學者に負ふ所甚少からず。彼等

の勢力は、先づ文學をして社會の各方面に分布せしめ、以て趣味の開拓普及をなし
 次に一代文壇の指導者となりて後、その功績を援き、次に外邦文學を紹介して東西思
 潮の融合に資し、總て將來の大文學を醸成する素地を作り、大天才を生出する地盤
 を構ふるに勉めたり。思ふに異日國民固有の性情に基き、東西文明を融合せる新
 文學の成らん曉、彼等は此の大光明の域に達せん爲に暗中に奮闘したる過渡時代
 の勇士として長へに其の功績を録せらるべし。彼等の或者は死せり。或者は文
 壇を去れり。或者は勢力を失へり。吾人は、彼等を悼惜して其の功績を追讃する
 と共に、彼等を繼承すべき現今及將來の文學者が如何なる事業を以て先進の遺動
 に酬いんとするかを見ん。

572/40

月
B
約

W
M

明治三十九年十二月十三日印刷
明治三十九年十二月十六日發行

明學史
定價 金壹圓參拾錢

不許
複製

著者 岩城準太郎

東京市神田區千代田町二番地

發行者 坂上忠之介

東京市麴町區下六番町十七番地

印刷者 松澤 扛三

東京市麴町區下六番町十七番地

印刷所 (電話番町) 三六九番 同 勞 舍

發行所

東京市神田區
千代田町二番地

育英舍

電話本局 一〇五二
振替貯金番號 三〇八九

9.8.14

29062

Handwritten notes and scribbles, including a vertical line of text that appears to read "1000" and other illegible markings.

Handwritten signature or initials at the bottom left of the page.

40

792